249
50

宮府內繪本風俗志

下

蘆乃葉散人著畫

江戸府内繪本風俗往來

東京 東陽堂發行

江戸府内繪本風俗往來中編序

凡上は高位高官より。下は庶人埒丁走卒に至るまで。神佛及び人類は更なり。鳥獸草花木石をいはず。江戸時代なる天地の間に生年いけるものゝ風俗を。文にかけずとも天窓をかき〳〵。博識面して。前の家外を終て家内に及ぶ。其紙數の多きは壹丁貳丁より八百八丁につらなれり。其廣は四里四方に渡り。東は硯の海の深川を限り。南は風俗の品川をえらみ。西は文も花さく麹町。北は畫數も千住に及ぶ。其口々は、聞た風俗。其風といふ文字の道理は。馬耳とや答へん。實は僕が育をいはんに。九尺二間の才學貧者。坐して三尺帶締る。職人風より。高貴の乘物を昇ける。寢て陸尺。お長屋の名はあれども。至て小さく。お交際と廣く聞ゆれども。井戸側の廻りに過ず。お早うと禮あるに似たるは。朝湯風呂の出入にして。今歸へッた。オヤ歸へッたのかと。夫婦別あるやうなるは。作事場の歸宅。阿母アと甘へ。親父と慕ひ。此兒子と呼は、親子の風俗、入口の腰障子押開るや、玄關書院納戸局を。只の一房に備へ。御臺所奥樣の手數は用なし。是を以て俗と解したり。去ばとて腕木に四分板をつりし、神棚の設ありて。年一度供ぜし榊は。枯て禁符の儲へに富たり。御酒は日々己れが口へ供じ參す。先祖代々の遠きは忘しも。古蜜柑箱の佛壇ありて。水は供ずるに面倒なりと悟り。破壁の古穴より。鼠及び猫の泰然として出入するあり。春は隣家の飼鶯の初音を聞。夏は稗蒔の青田うり。或ひは錦魚商人來り。秋は時雨の紅葉豆腐に。熱燗の夜食。冬は澤庵大根菜漬の押石の借貸。是等の風俗を上つらへば。乃ち江戸時代なる。天地間を網羅すとなんいひしも。豈虛言とやせん　も其時代は前編と同じく。百に不足の僕が天保以後の記臆のまゝを。拙筆をとりが鳴。東陽堂の望みに任せと。仔細らしく申ものゝ。文もあしの葉。畫もまたあしのは。且また看客の愛を得んとは。其了簡もあしの葉にて。此序も同じくあしの葉なりとす。

明治三十八年晩春

45.2.24
米屋

緒言

江戸市の大略

一江戸市中の中央は、江戸城とす、江戸城内濠以内を内曲輪と稱し、外濠以内を外曲輪と稱す、外曲輪以外を總して市中といひたり、市中の中央は日本橋とす、日本橋より數丁四方、東は兩國川、西は外濠、北は筋違橋、神田川、南は新橋の内を下町と唱へ、其以外を總て場末といひたり、其内麻布、赤坂、青山、四ッ谷、市ヶ谷、小石川、駒込、本郷、邊を山の手と唱へり、日本橋何町、神田何町、京橋又は新橋を、町名の上に冠りして呼び土地には、寺院といふもの絶てなし、且又武家屋敷も稀なりとす、此地は工商を以て滿たり、其の他は何れも武家屋敷神社佛閣工商相交りて町をなす、故に屋敷町、寺町、何門前町、の唱へありたり、工の大棟梁、商の問屋大店は下町にありて、武家大諸侯並に大社巨刹は場末山の手にありたり

江戸ッ子

一山王大權現、神田大明神の、産子の土地に生れし者をいふも、山王神田兩社の氏子なる江戸ッ子をいひしと知るべし、兩社氏子なる江戸ッ子といふ者、是ぞ全く別なる氣性ありて、其比類を知らざる所とせり、

町家々業の營み

一百工萬商家業の營みは、御曲輪外に住居し家業を營む者は、將軍家御用達を始め、大小名方御出入町人なり、御用達及び御出入町人、の住宅の最寄に住したる工商は、御用達より御出入町人の需めに、應ずるを以て家業とす、去れば洗湯風呂屋、髪結、又は豆腐屋、酒屋を始め日々入用の物品を商ふ者より、幼童筆學の師、醫師より諸藝人等に至るまで、土地相應の繁昌にして、不自由を覺へず、日々を送りけるは、別に資産のあるにあらず、御用達は將軍家の御餘澤に潤ひ、諸侯方御出入町人は大小名の餘澤に浴し、其他の工商は御用達又は諸家其出入町人の潤澤を得、其他の者皆潤ふ所の源泉ありて、家業の利潤とすること、恰も恒産の士と同し、江戸ッ子の太平樂を唱しも、此れに依るものと

江戸ッ子と唱へたり、江戸ッ子は宵越の錢を遣はず、江戸ッ子の生れぞくない金を溜、皐月の鯉の吹流などいふも、山王神田兩社の氏子なる江戸ッ子をいひしと知るべし、兩社氏子なる江戸ッ子といふ者、是ぞ全く別なる氣性ありて、其比類を知らざる所とせり、

町家々業の營み

一百工萬商家業の營みは、御曲輪外に住居し家業を營む者は、將軍家御用達を始め、大小名方御出入町人なり、御用達及び御出入町人、の住宅の最寄に住したる工商は、御用達より御出入町人の需めに、應ずるを以て家業とす、去れば洗湯風呂屋、髪結、又は豆腐屋、酒屋を始め日々入用の物品を商ふ者より、幼童筆學の師、醫師より諸藝人等に至るまで、土地相應の繁昌にして、不自由を覺へず、日々を送りけるは、別に資産のあるにあらず、御用達は將軍家の御餘澤に潤ひ、諸侯方御出入町人は大小名の餘澤に浴し、其他の工商は御用達又は諸家其出入町人の潤澤を得、其他の者皆潤ふ所の源泉ありて、家業の利潤とすること、恰も恒産の士と同し、江戸ッ子の太平樂を唱しも、此れに依るものと

江戸ッ子の氣性ありて、其比類を知らざる所とせり、

町家々業の營み

一百工萬商家業の營みは、御曲輪外に住居し家業を營む者は、將軍家御用達を始め、大小名方御出入町人なり、御用達及び御出入町人、の住宅の最寄に住したる工商は、御用達より御出入町人の需めに、應ずるを以て家業とす、去れば洗湯風呂屋、髪結、又は豆腐屋、酒屋を始め日々入用の物品を商ふ者より、幼童筆學の師、醫師より諸藝人等に至るまで、土地相應の繁昌にして、不自由を覺へず、日々を送りけるは、別に資産のあるにあらず、御用達は將軍家の御餘澤に潤ひ、諸侯方御出入町人は大小名の餘澤に浴し、其他の工商は御用達又は諸家其出入町人の潤澤を得、其他の者皆潤ふ所の源泉ありて、家業の利潤とすること、恰も恒産の士と同し、江戸ッ子の太平樂を唱しも、此れに依るものと

したり、

江戸市中皆、次第によりて、繁昌す、故に上下苦樂を共にし來りたり、一例を擧ていはんに、下谷邊に至れば、上野東叡山御防を第一として、大小名旗本御家人の爲めに、工商家業を營むこと、下町の御用達諸侯御出入町人の、將軍家及び諸大名の爲めに、家業を營むと同しく、芝に至れば、三緣山增上寺及び、薩州侯、仙臺侯、阿波侯等の源泉に潤ひ、麹町、四ッ谷、赤坂、扨は本所、深川をいはず、四里四方に家業を營むもの、何れの土地にても、家業の源泉あらぬはなし、されば他に競はずして生計を營む、是江戸時代の安心立命の地位を得て、家を子孫に傳へし所のものなりし、

此他に田舍を得意として、家業を營む工商は、便よき土地に住居して、生計をなしたり、

家屋の構造

一神社、佛閣、武家屋敷の、構造は、家々の格式ありて、其法嚴重也、町家の家の構造は、別に格式といふことなく、只分外なる構造を許されず、家業相應なるを以て大旨意とし、家造りの派出をなさず、古店老舗は家

家に傳る記錄ありて、古色を失はず、其他は火災毎に構造の變化あれば、平家二階家、塗家、土藏造り、一定せざるものとす、

道路の通行

一將軍家は猶更のこと、御三家方、諸大名、諸武家方、及び神官僧侶、文武の師を、始め徑搥便利とて、横丁、小路、新道なとの通路外なる町内へ踏入ることなく、通常定まりたる往還道路ありて、其路筋の外を通行せず、町人といへども身柄ある人は、横丁、新道を横切て徑搥を得ることとなし、大八車、牛車、小荷駄馬も、平生の通行すべき道路の外、引入ることとなし、大通りの如きは人肩相摩すといへども、十中八九分は物見遊山神佛詣ふでの通行なれば、雪踏下駄踏む音も、自然徐々として、往來悠然たり、只世話しなきは朝夕芝居見物の往來なり、

江戸府内 繪本風俗往來中編卷之壹

盧の葉散人著
同 畫

裏頭之部

○正 月

元日は武家は歳首の式法を正し神社は此月の古式を擧行し寺院も各院の舊儀を納ひるより天亮より皆其事に懸るも繁雜劇忙に渡る事なく上下共に心豊に其勤めを務む民間は東雲告る迄の繁雜漸く終る明の鷄一聲に舊を徐き萬戸更に新まる若水を汲み上るを今年の事始めとなす

○若 水

例年正月元日早天に初めて若水とて井水を汲み其水にて雜烹を調べ福茶を烹ると上下貧富の別なく皆同じ此若水を汲める手桶も新調して輪飾をかけ今年の恵方に迎ひて水を汲む中にも家々の舊式ありて年々失ふとなし又神社等には古式自から備はりていと嚴格に擧行せられけるとかや愈て元日は空も靡閑に遠近靜謐にして水汲める頃明の烏告渡り初鷄の長鳴相聞て東天紅の光景今少し以前

以上

江戸風俗往來 元旦若水汲 杜鵑舎 芳虎

正月二日
庚申年
南賀園
寛之

鍛治職
正月二日
紐工初

江戸會本風俗生來

三月二日

畫ノ百二十九

東陽堂出版

府内繁花風俗往來

畫ノ百二十八

迄も雑閙せし町々も靜まり心にさわるともなく勤の役とてうるさしと思ふ心なく新年の祝辭相互に自から出づるも目出たかりける大江戸の新禧にこそ

○屠蘇を汲雜煮を祝ふ

江戸中家々あるとあらゆる如何なる貧苦の者にても正月元日二日三日の三朝屠蘇は汲まざるも雜煮の調べなきはなし中等以上の生計をなす家は武家及び工商共年來の式法を守り家例の缺くるを厭ふ武家は元旦より七種迄は特に繁務なり且元日は未明を待ての出仕なるまゝ夙に起出て身を清め禮服を着し當年の恵方を拜し次に神拜佛拜及雙親への年頭を祝し總て式禮終りて彙て設けの席に着し膳に向ひ夫婦子供屠蘇を祝する中召使ひ奥の者代〳〵來りて年禮の祝辭を受け屠蘇の盃を授けて雜煮を祝ひて後御殿へ出仕し己が當番に就き主子の御前に出て新年の祝辭を奉ると元日未明家中のありさま皆同じ

禮服は士以上麻上下熨目小袖士以下は紋付小袖麻上下なり

屠蘇は平生出入せる醫師より參らするものを用ゆ

重詰の品はてり田作、數の子、座禪豆の三重なり併し家々の式により一定せざれども此三種通常用ゆる所なりとす

雜煮は餅に添ひて小松菜、大根、里芋を通常とす露は味噌汁を用ゆる所もあり餅も燒きて用ゆるあり湯にて煮て遣ふあり

箸は雜煮箸とて別製に太き柳箸を白紙に包み紅白の水引にて結び田作を二尾水引へ差すなり

○初風呂

浴場は江戸市中幾萬といふ定數の外猥りに其數を增加することを許されず江戸の俚言に湯屋といふ平生は毎朝早天より客を入れ日暮點燈後二時間ばかり（當時の五ツ時）を限り表を戸差し客を謝絶すること湯屋一同の公則なるは火の元嚴重の取締なればなり然るに例年十二月大晦日は終夜風呂を焚き浴客絶へず出入す只夜明前に至り少しく客の途絶へしころ風呂の湯を落し水を汲替直に焚くより元旦未明烏の鳴渡る頃より客又來る今朝より七種迄の間湯屋にて煎茶を客に參らす客よりは湯屋へ年玉の錢又奉公人へも身分相應の心付あり湯錢は寛永錢三ツを白紙にひねりて渡す是をおひねりといふ湯屋は番臺へ三方盆を据此お

ひねりを盛りて山の如し五節句此お捻り正月元日より七種迄其の他は十四十五日十六日廿日の四日なり五月五日菖蒲湯六月晦中秋湯十月冬至柚湯おひれりなり

因にいふ湯屋は總して年期奉公人の遊山場の如く去れば日暮より近隣の年期者の浴し來るや其騒がしきこと半町四方に響きたり從來湯屋規則一條に騒々敷と無々様の明文ありといへ共誰一人諳むものもなく湯屋は一の喧嘩場と心得たるもの、如くなりし然るに今朝は靜かなる元日のこととて浴客の心も春めきて富本淨瑠璃の淺間も不吉とや思ひけん常盤津節の子寶三番清元の梅の春など風呂の中に聞へ調子に合ふと合ざるの別はあれども元旦の初風呂江戸中同じ風情なり元日より七種迄は早仕舞とて日暮に湯を落したり

○匠人仕事始め細工始めともいふ

正月二日は學問より弓馬鎗劍を始め文武の諸藝は更なり琴三味線の遊藝に至るまで授業始めの式を行ふ商には初荷初賣の賑ひあり工には家職居職の別なく細工初の式をなしたり其式濟みて師家なれば師家の定まれる餘興ありて

○年始の受け

新年慶賀の使者を待受る諸大名並に旗本千石高以上及び寺院社家は寺格社格ある所にては表門を開き玄關には麻上下を着したる士並居て控へられたり人員は祿高と格式によりて差あり町家は店の正面にいとも美事に作りたる屏風の畫又は書に名ある名技の筆に成るは大銳併を圍んで立つらねたり其前へ毛氈を敷其上に大廣蓋を置て禮者より受たる年玉の品を盛りたり番當若者年期の丁稚等詰合たり是鋪子大店の年始受の待設大方是なり此待受武家は、七種まで町家は三ケ日までとす年玉の進物は大方扇子なり

○乘馬初め

千石高以上以下の旗士の郎君たち今二日は乘馬初めの式あり邸内の馬場に出で乘馬を試み給ふ馬見所は兼てより定紋染出したる幕打廻し屏風を立交君着座ありて馬見し給はる當日乘馬も馬具の粧ひ美くしく年齢十二三歳以上の郎君騎目小袖に麻上下品格よく着飾りて金銀梨子地の鞍に跨りし様は優美にして、愛らしく馬丁も新調の法被掛の姿清くして甲斐〳〵しく旗本邸裏の馬場は大方は庭園に接したるより木竹の間をすかして見ゆるは一入なり馬術に流派多く流派に從ひ馬具の別もありしなり

○初結ひ

町民正月初めて頭髪を束ねるを初結ひといふ初結ひの時は髪結ふ者に年玉の心付をなすこと身分貧富によりて金錢の多寡同じからずこの髪結は髪結床とて店を構へ斯匠の親方共二人より四人迄の下匠あり又廻りといふ髪結あり此は町内に得意の持場の定めありて髪結道具を携へて廻りながら髪を結ふより單に廻りと稱したるなり床廻り共其數に定めありて猥りに增すことは許可せられず又斯匠の規定ありて至て嚴重なり客髪を束ねんとして床へ行けば入來る順番にて吾番となるや髭の元結を解く客は水流しへ行て頭の月代を潤して床へ腰をかけんとするや髪結尻敷の板をヒタリと音をさせて直す其板の上へ客尻を載て腰をかける髪結月代を剃り髪を梳る客立て水流に至り此度は顔を濡めす髪結此度は客の髭を始め顔より耳の穴鼻の穴を剃り頤をも腮下をも剃る其次に髭を結ふなり月代を剃り髪を梳ずる者を下剃と呼び顔を剃者を顔とのみ呼び髭は床の親方の役なり

月代を剃り髪を梳者を下剃と呼びて床の親方の弟子小僧なり顔耳等をそるを顔とのみ呼びて床の親方の弟子年期明け前の者が左なくば屬の匠人なり此髪結床は十二月大晦日は夜を明す迄客の絶ゆることなく夜明て新年正月元日を休業二日は未明より初結ひにて年分第一の所得ある

日なり平生は朝未明より床を開き日暮後二時間斗に床を閉るを常とするも正月は二日より七種迄は晩上を限りとす又正月十七日と七月十七日此兩日の外年中休みなし

髪結床は表二枚の腰板障子其左右の窓半障子にて其障子紙へ老海を書けるは老海床と名づく鶴を畫けるは鶴床にて松といふ文字をかけるは松床竹といふ字をかけるは竹床なり床中は土間にて片脇に水流あり夏は水冬は湯にて此水流により客脳袋顔を濡めす冬の湯は銅大薬鑵を火鉢にかけてあるなり湯を遣ふは木製の金輪の小盥を用ゐ夏の水は眞鍮の金盥を用ゆ

匠人の親方 爲 頭又は鋪子の家主兒床場の用ゆる練油を頭髪に用ゆることを嫌ひて自身練油の上製を需來りて床場へ預置て用ゆ床場にては預りの油多きより入置く袋に印をかきて高き所に幾つとなく連ねつれり又近隣の寄席講釋場のヒラといふもの絶へず張出してあり且歳場番付相撲番付もありたり

客人多人數待合する時は將棊の始まることあり談話は流行物の噂より歳言の舌戰扨は色里の噺近邊女子の噂等時刻の移るを覺へず一の髪場は乃ち髪結床なり

○湯屋の二階

湯屋は二階家作りにして表間口八九間以下六間以上とす爺們娘兒們の入口を異にす窓入口共總て格子戸を立たり入口の格子を開き內に入るや踏こみの土間ありて其外は板敷なり二階へ登る梯子は男湯女湯の境とす梯子段の下は板羽目にて女湯男湯の雙方より見へざる樣塞ぎ梯子段の前は番臺として高く作れる臺あり香水行の主人其上に座して男女の湯を注目し客の出入に必配りける梯子段の下に客用の下駄段あり彼方の羽目板岸に客用の衣類をぬぎて置ける棚あり棚は尺五寸斗に仕切て番號を誌したり女湯も猶男湯に異る所なし但女湯より二階に登ることを得ず。

二階は甚だ手廣くして表の方掃出椽に作り恰も酒樓が妓樓に髣髴たり梯子段を登終るや正面に客用の下足段ありて客下駄を携へ登りて其段へ置く二階番頭として親爺一人小高所を出來梯子の上口下駄段に向へる所に茶釜火爐茶碗土瓶等の茶道具を前に控へて座せり座の左右には臺の上に菓子の箱を置く菓子はお市豆ねじ松風の類なり湯屋の二階に婦女子居て茶を出すは山の手の湯屋に限るなり

萬歳大吉
春陽の圖
江戸會本武谷生之
画の圖
東陽堂山友

府内絵本通俗往来
画の圖
東陽堂山友

江戸御城内紅葉山
江戸將軍家
御霊廟前
御儀仗ノ
下ケ髪ニテ
画の百三十七
東陽堂出版

天下泰平
国土安穏
大明神
画の百三十六
東陽堂出版

下町の湯屋は茶汲女をおかず只酒は何れの湯屋二階にても必ず用ゐず湯屋は總て近邊壹丁半四方位ゐの人のみ入來れるより香水行の主人は朝湯夕湯の客の身分を知る故に遊逅新顏の客來るや其注目すること頻りなるは紛失品のありもやせんと氣遣ひてなり

此樓上は近邊壯年輩の遊場の如く色里の歸りなどは先づ此二階へ來り湯に入りて自宅の首尾を探りて歸宅す又寄席の噺芝居相撲の評判より前夜の火事遊藝の師匠の噂等は絶間なく圍碁將棊の下手連中あり口輕の舌戰あり朝湯に入らんとして終に午飯の迎ひをうけ初めて驚きて歸宅するなど日々の事なり正月は猶更心ゆるして二階の樂恰も温泉場の浴客の如し夏は凉風に富冬は温暖の得あり其上茶代の貴も至て少なくかゝる遊蕩の二階なりしも一泊たりとも宿泊するもの皆てなく禁制の遊びは決しなきは妙といふべく且又酒肴の登ることも絶へてあらざりしなり

○御殿の幼女子正月のあそび

江戸將軍家御殿の奥女中高位に昇進する婦女は幼稚の時より御殿に於て成育を受くるもの多く高位の奥女中幼女の筋目正しき利發なるものを撰び御殿なる女中吾が部屋へ引取吾が子の如く敎育し君につくすべき道を知らしめ成長して上へ奉公せしむ然れば敎育の甲斐ありて奉公の道に缺くることなく精忠を勵みたる此女立身の後は己れもまた幼女を成養して君側に出したる故に幼女の御庭に出で草などを摘み遊べる樣を御臺所御覽じて御慰みとなること常なり大諸侯御殿にても同樣なる處もありたり此女兒正月は特に金襴羅綾翠紅の美を粧ひ御樣先の手鞠遊び御庭前のつく羽根實に類なき光景にこそ。

○手習師匠の吉書

百般の技藝の師ある中童子師は江戸に其數いみじく多く當代は町民別に文學の入用もなく工は工に巧みに商は商に精したれば一家の繁榮世渡も安樂に出來得るとはいへども算筆は日用はかならず學ばさるを得ず此日用の算筆は童子師の敎ゆる所なり兒童六歲より師の許に入門し日々通學して十二三歲までには生涯調實する所の算筆を修行して後工商に從事す手跡の師は御家流溝口流の筆意運筆を敎ゆる傍珠算の割懸を世話し幷に修身の端緒を修めしむ此手習の師年々吉書の筆を門人に試さしめあべ

川餅の振舞あり餘興に福引の催ありしを門人の孩子は正月の樂みに待衆る所なり

○萬歲

萬歲は三河國より年々正月迄に江府に着す諸侯幷旗士の邸へ罷出新年の目出度を祝しつゝみを打鳴して萬歲歌をうたひて舞ふ舞面なる時供の才藏立上り戲れて老若の別なく座中をして大笑を發せしむ此才藏の技倆は自から別なり先才藏は遠國山だしの容貌を備へ慇かに見へて痴鈍ならず好色に見へて好色ならず武骨中に愛嬌を含み飽まで質朴なるをよしとす去れば旗本屋敷の女中等恐れ憎みても面白く其戲れを興として萬歲才藏の來るを樂む是才藏の技倆による故に其以前は才藏市ありて萬歲の大夫才藏を撰び抱しとなり但し門萬歲とて町家の軒下へ來り錢を乞あるく萬歲は諸家の奥へ上る萬歲とは別なり

○屋敷の御物見

大名方には絕へてなく旗本の五千石以下表長屋の角に窓の作りも大きく出窓の格子籬をたれ内は八九疊より十二疊程なる房頭なり是を御物見と稱へ主人の君も奥方又は郎君君主且は近仕の女中達此窓より往來の樣を折々見物ありて一ッの慰みとし給ふは猥りに外出のならざる身にしあればなり正月の如きは來客の子供衆を携へられし時は子供衆の御慰みにと太神樂の通行するを呼止めて曲藝を演せしむ窓下の事とて往來通行の人足を止めて人堵をなすかゝることの慰みあるより七種前は御物見窓下へ人の立こと多し但し御役を勤め給ふ屋敷にては箇樣なることは許されざるなり

○七種

正月もはや七草となるや町家は家業に從事するより心に隙なく武家は七種迄は新年の式務に世話しく七種過より追々平務に復す六日の宵は家々の古式後の世に至りては空しきことも多かるめれどもかはらぬ御代と祝し參らす當時なるまゝ御臺所掛りにては紋付小袖に麻上下を着し遠土の鳥の渡らぬ先より恵方に迎ひ若草を打はやすストトントン戸々に響く此日門の松飾り〆繩は取拂ひ翌七種は若菜の粥をとうべげるは當日の祝ひなりけり

○歌牌遊

正月中は晝は男子は凧女子は手鞠つくばね夜は十歲以下は男女の子供打寄て道中雙六幷にいろは歌牌を弄びて遊

江戸會本風俗生來

画の百四十一　東陽堂出版

精舎之梅香

江戸會本風俗往來

画の百四十　東陽堂出版

東陽堂出版

ぶ十歳以上男女共百人一首の歌牌を取合す武家及寺院などにては小倉山かるたの外に古今集伊勢物語又唐詩選の律絶句のかるたを取合す大奥の女中衆はこれに又源氏香の圖の貝合せ幷に雙六盤源氏名寄の札合などの遊びなり此中小倉山の歌牌取をなすこと多し十人以上以下の男女老若の別なく打交り其歌牌の取檢種々あれども何れも敵と味方と互に勝負を爭ふ遊びなるまゝ負じと相手を凌ぐより乙女の姿味方を助け吾衣手を押伸し岩にせかるゝ瀧の川人知れずこそ早取らんと結びて程へぬ高砂も亂そめにし吾か覺え人にはつけの楠も落取らんとすを奪はれて甲斐なくたゝん名こそ惜し夜の更行も知らぬ間唯有明の月ぞ殘るに漸く寐ぶけを覺ゆるなど春の遊びに餘念なかりし

○鏡餅を撤す

今年の歳神にも他の神佛へも奉り家の坐敷毎にも飾り商店正面へも別して美事に粧ひ飾りたる大ずはりを殘らず撤したるは十一日にて此備へ餅を割りて十二日の雜煮の餅に用ゆるをお鏡開きといひたり正月も玆に至りては追年遊もつくしたる諸侯方にては又此鏡開も古式あるべし上野芝兩山中にて將軍家靈廟御寶前へ備へ奉る御鏡餅は厚五寸餘徑尺餘の切立なる形に調べたるは恰も石の引臼の如きを御寶前より御供所へ大臺に移し載て運ぶ其數も多し此餅は上製にして絹の如く餅米も稻毛の糯にして其風味もまた自から無類なりき

江戸府内繪本風俗往來中編卷之貳

蘆の葉散人著
同　畫

裏頭の部目次

○正　月
十四日年越
町内自身番屋
○二　月
寺院の手談
梅　林
涅槃會
雛道具
初　午
○三　月
書畫會
手踊の大俊
宿下りの女
新よし原の花
下屋敷の花見
開　帳
○四　月
灌　佛

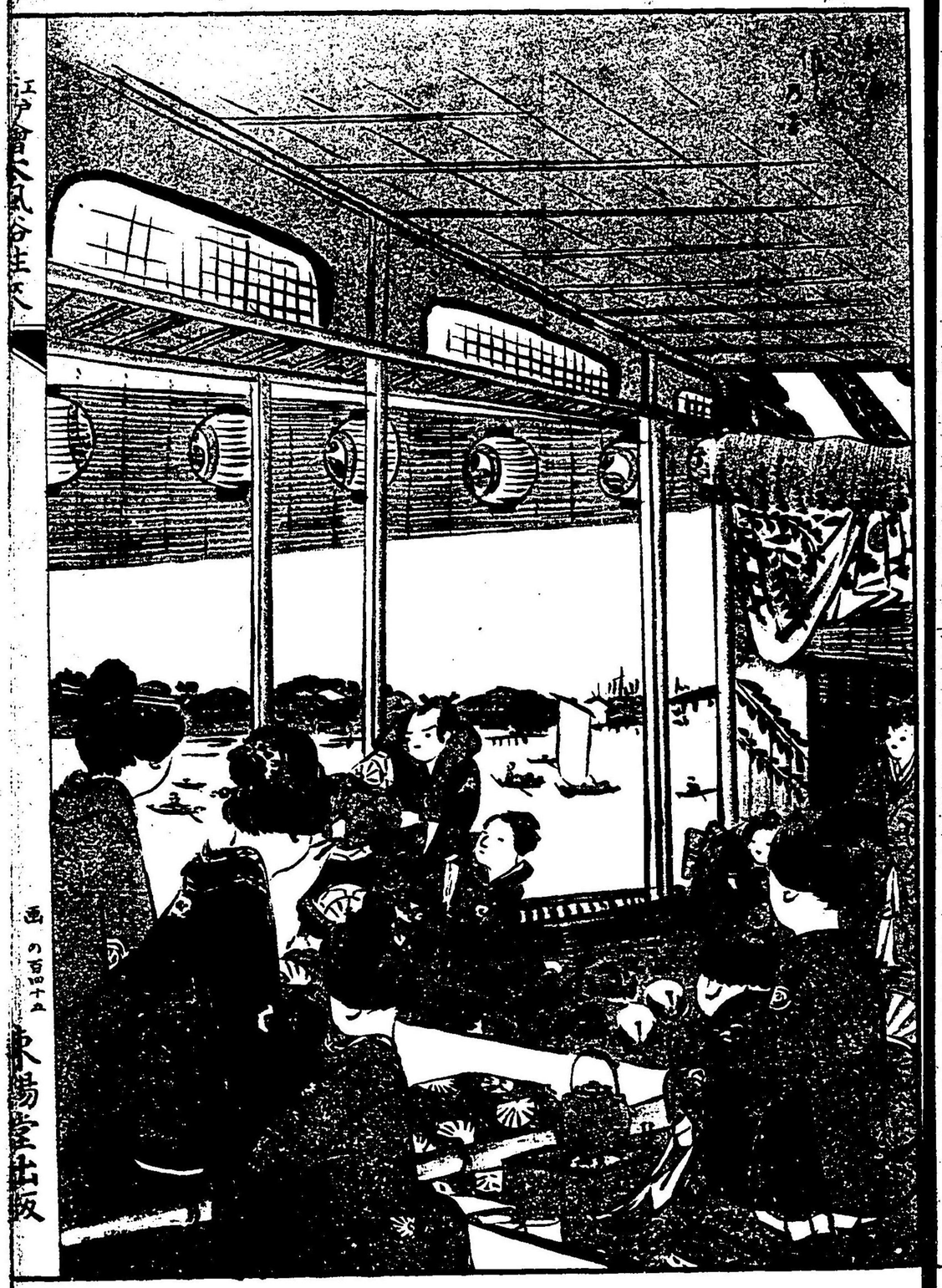
○正　月

○十四日年越

正月の門松幷に七三五繩は外頭に飾りし分は此月六日の晩上に取拂ひて裏頭にかけし輪飾を殘す裏頭の輪飾等總て十四日にはづし其跡へ削かけといふものをかける削かけは柳の木の皮を去り削かけて總の如くにしたるあり又獅子の毛髮の如くなるあり髮毛の如き削かけは家内の間毎にかけ總の如きは諸侯又は寺社の門へかけしなり江戸城三十六門兩山の靈廟へは削かけを用ゐず其他門ある家にてかけざるは一向宗門の家のみとす今日は祝日にて十四日年越と唱へたり依りて獅子舞の遠音神樂も一層多く聲けたり男子等は獅子をかぶり太皷を打はやして頑裏女子たちは削かけをつく羽根に代て羽根つきてたのしめり

○自身番屋

町内の公法を取扱ふ所を自身番屋と唱へて其町入口の木



奉仕
間振
のにぎ
えん

戸際にあり此自身番屋公法の取扱ふ其間空兒なる時は町役人乃ち大屋達相寄りて世間の噂さ噺し等をなす況して十四日年越の如きは何兵衛何右衛門相會し例の雜談會を初ひる中に京傳馬琴種彦の合卷好きは本を持行餘念なく讀める傍に黒白の雫ひ將棊の始まる下町の自身番なぞは往來通行烈しき熱閙の中に閑を占めて他人の來る氣遣なく他念絶へて一日を以と長く夕飯は蕎麥にせんか鰻飯隱れて酒のしのび呑半錢のヂャンと鳴らざる上は外に用なき連中とて又夜に入りて又始む恰も老人の慰場是も乃ち太平の樂な世界と知れたり

○二月

ささらぎの空麗かにして雪とけの草綠の色を發し梅の林間に初午祭りの幟見へ程なく彼岸詣でより涅槃會の供養此月は幸ひ工商とも手隙の折とて野外の摘草花序を歌ひ燕春光を剪當月の朔日日光御鋭頂戴の公事より二日炙の私事なんどなりとす

○寺院の春宵

僧侶の年禮は例年正月六日より出る諸侯及旗士の擧家且つは法類の院寺其廻勤する所相隔絶す去れば年頭禮の二月初旬へ殘れること多し又相親き法類幷に師の坊へ至れるや學問の問答詩歌書畫の雜談より肉食妻帶の外なる興味とりわき多く圍碁將棊にも名手ありて互に仇の相手戀しく待甲斐ありし折からと明障子を開放して日脚ひさばる黒白の雌雄爭ふ彼方より風は梅花のかんばしき薫りを送る春の日暮夕勘勤の鉦の響罐僧運ぶ燭臺に初めて知りし春の宵夕飯食して又取る石餘念のあらぬ樂みなるべし

○梅林

杉田の梅は江戸より里數相隔つより至る人まれなり次は大森は當所は川崎大師詣ふでの便りよく去ながら當時梅林に杖曳く人の多きは龜井戸なる臥龍梅なり總じて梅莊は質朴なる場所にして粹士も林中にては澁茶の烹出したるを覺束なき茶碗に汲み剝たる塗盆にて出すを愛て茶うけも船橋屋の好みより梅干の味を稱し船駕籠に足を借て急に至るよりは時を費し足に勞れを覺ゆるの興多きを知るは時代の然からしめし所と知らる此臥龍園の門をくゞるや園の主人老爺彙て茶釜を据へて烹たる澁茶を汲で出せる樣子は梅樹の培養を自負せるものゝ如し妻の老媼が商ふ梅干は漬方に巧みにして味の無類なるを稱せられた

く去りとて世辭の媚少しもなく萬事に銅嗅少しもわらぬなど當日の土産といふべし

○涅槃會

涅槃會は二月十五日なり一向宗門を除ける外は諸宗都て多少の別はあれども此會の供養あらざるはなし涅槃像を畫がける幅を本堂の正面へかく此幅は大中小區々にして中にも極彩色古錦襴の表粧大きなるは車に綱をつけ本堂へつり上るものあり其供物花等の準備寺院中內外の掃除寺院中への時の膳部上下への振舞數日前より忙はしく十五日の當日は善男善女朝よりの參詣引も切らず群集せる寺院諸所にありたり

○雛祭御道具

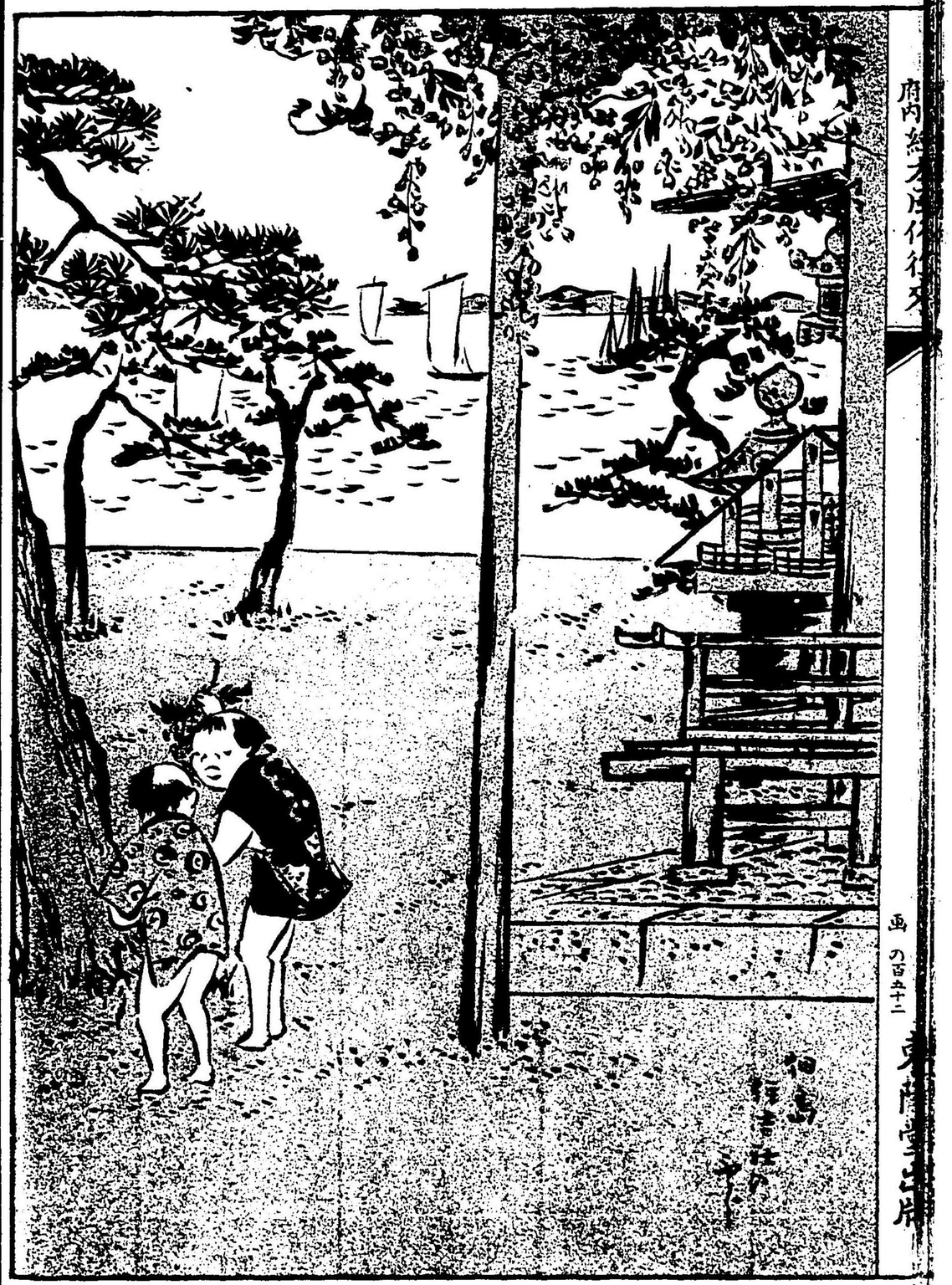
雛祭り御祝ありや千代田大奥諸侯御殿方は昨年より御用達御出入衆へ御注文出しを漸く此節に至りて出來して大奥御殿へ納むる所となる小形の御道具に至りては五分四方の香箱より尺に滿ざる棚類簞笥長持膳椀に及ぶまで木地の下檢分濟て漆下の檢分塗上の檢分梨子地の見分蒔繪の檢査等の手數を經て銀金物を打上げ外箱へ入れて御掛りへ相納る所となる此形を取りて店賣の仕入を作りて賣り出せるは似て非なるものといふべし

○初午

町方の初午は前編へ載て出せり武家邸內なる初午稻荷祭は邸の前町なる町家の子供等を邸內に入ることを許して遊ばしめられ邸內にて囃屋臺を出來廿五座三十五座の神樂を奏し又は手踊の催しより種々なる作物あり花傘掩へる地口書燈籠を數多く庭裏より家中の長屋の門口へ立夜に入るや武骨の武士女子のいでだちして俄踊りの餘興など始まるもあり殿君奥方若君姫君より御殿女中方の透見もし給ふあり去れば二月初午は例年市中賑ふことおびただし

○三月

奥義抄に風雨あらたまりて草木いよ〳〵おふるゆへにいやおひ月といふとかや先日より十軒店人形町尾張町麹町なんどに雛市はじまり櫻の花盛りより汐干狩隅田川大念佛は梅柳山木母寺に行はれ柳櫻をこきまぜて都ぞ春の景色まのあたりとす扨また參府歸國の大名方は品川口千住口四ツ谷口より出入ありて四里四方全く賑ふの月とす



画の四十二

○書畫會

書畫會は當時の詩文家書畫家の催す所にて會場は大略兩國橋の此方柳橋際なる萬八樓をあてたり此會は半年前よりの準備にて案内を諸所へ配付す文墨の諸彦席上の揮毫ありて誰彼の別なく需めに應じ扇面書箋唐紙白紙へ毫を染む會主先生は勿論補助の士も同じく麻上下の禮衣なり來賓には諸侯の隱居旗本の老士侶僧醫師及諸士なり酒宴の場は歌女出て席を周旋す來賓盛んになる頃は樓上相押ふ程なり又房頭間毎に書畫の展覽あり此會の催しも春秋兩季にわり時候のよきを利せしものなりとす

○手踊の大ざらひ

女子の習ふ手踊の師匠は幾派にも別れて其流々にて手足の運び體の構へに異樣あり然るにいづれ劣らぬ中に當日流行の盛んに品位の高きを占たる流は藤間なり此藤間の派に限りては婦女の師匠皆生涯獨身にて夫を持たぬ習ひにて極めて貞操なる品行ありしより愛女をして手踊りを習はしむるは藤間に限れるとの世評を恣まゝにせり又諸大名方御奥の召に應じて梨園の敎坊となるは十に八九までは藤間なり去れば年一度春か秋に催せる大ざらひと稱するものも藤間を以て巨擘とす此大後ひたるや江東中村樓を以て其場にわつ當日門弟を組合せ幾番の手踊り全く盛んにして弟子なる女子達の家にては費を厭はず衣裳に美をつくし手踊の地なる長唄常盤津富本清元の淨瑠璃より下掛りの笛太鼓に至るまで名曲を撰びて愛兒の手舞踏足の助けを求めしめたり此後の支度半年以前よりかゝりて初めて當日舞臺に登る踊りをなす女子の家にては親族知る人を招きて手踊りを見せしむ隨て其來客へも丁寧なる馳走あり然るに此さらひに出る兒女の母親のみ心をつくし夫に秘して費を辨ずる家多し

○御殿女中宿下り

町家相應なる生計を營る以上は女子をして武家の御殿勤めをなさしめざるはなし萬一此奉公を女子に勤めさせざる時は世間へ恥しこと上なきわりさまなり去ればとて町家の女子にては奥女中に出づることを得ず故に借親として武家の女子分にして奉公に出せり其女中年々三月より四月へかけて御暇賜へ親許へ下る是を宿下りといふ女子宿下りにて雙親の許へ來るや雙親の歡び譬ふるに物なく且は世間への自負奥奉公の姿にて親類へつれ行墓參に上

り扮芝居見物又は日としては御殿詣を町方風に結ひ直し衣類も同じく町家の風に仕立つるなど又は宿下り在宅中は日々親族を始め知るべより目出たきを祝する來客足を絶たず馳走獘應に忙はしく又た到來の土產の返禮此月は此事にのみいそ〳〵するも少しも苦にせず勿論此御殿奉公は身に品位を修め起居の正しく辭儀の作法を辨へ膽力をして強からしめ堪忍耐任を知るか女子一家の妻となりて子を育するより江戶ッ子も出來しなるべし

○新よし原物いふ花

物いふ花と物いはぬ花いづれ劣らぬ廓の春晴をつくせる風情とて大門くゞるや兩側の茶屋の二階の笛つゞみ軒端は星をつらねしかと思ふ斗の提灯輝き中に咲滿櫻花今を盛と八重九重裳を開く三ッ齒の下駄外八文字松の位の道中は外に類なき五丁まち先鐵棒をつき鳴らし入こむ人を左右に避けしめ箱提灯に道びかれ禿が袖を振合てつゞきて綺羅や金繡の衣紋揃ひし衣裳にも露重げなる細腰は春柳月をかけたる如く照そうかざし 弁は彌陀の御光もかくやと斗り新造や幇間やり手かしづき花と花との仲の町夜の風情は猶更に別の世界と知られたりける

○下邸の櫻狩

彌生の頃は空晴れたる日は取わき誰彼の別なく氣の浮立て野邊の遊を慕はざるものなし是に至りては輕き下輩程こゝろのまゝに今日は隅田明日は飛鳥御殿山と氣隨なるこそ幸ひなり然るに王公貴人方は御身柄の正しきより心のまゝには叶まじまして北の御方や姬君樣は猶更に務め正しき女中方御墓參の外は御出門自由ならぬも春風の誘ふ花の盛りの頃御上の御胸中を察し參らず老女局此方彼方を取なして御下屋敷の御花見を御催促申上けるより御意も上なき御よろこび御供の女中も日を待兼御下屋敷へ成らせ玉へば今を盛りの櫻花兼思考の御慰手馴ぬ女中の御調料出來そこねしか却て御意を得一日百年に當れる御興又御歸途は町方を他處ながらの御見物御役大名を除ける外は春には度々ありしことなり

○開帳

開帳は三月初より五月迄に終るは時候に利してなるべし開帳日數は大方百日間寺社奉行へ願濟の上行ふものとす千住口四ッ谷へも着しそれより江戶兼て當たる開帳の場へ御着なるといへども多くは品川へ着し及び其翌日江戶へ御着となるものとす法華宗門の開帳は法華の諸講中のみ出迎をなす其他は富士講成田講大山講中等出迎に到りて其賑ひ山王神田の兩祭りにつきて雜沓群集す開帳場は諸講中並に盛場及び相撲諸藝人より奉納の造庭種々なる奉納物作り物等出來掛茶店見物の諸與行飮食店諸商人の露店建つらなり朝早天の朝參夜に入りて夜參ありて參詣の群集實に夥しく隨て開帳場近隣の繁昌是また莫大なり此開帳場に當る寺院內社內數ある中兩國回向院に於て催す開帳の上に出る繁昌なし勿論宗法によりては深川靈巖寺下谷土富棚長遠寺に於て行ふ又法華にては身延山の祖師の尊像其他は成田山不動明王京都嵯峨の釋迦如來小田原なる道了大權現等は 抑 繁昌なる開帳とす

○四 月

桐花乍ち放ち梨杏方に新たなるの候降雨つゞく事あり是を迎梅雨といふ朔日更衣にて今日より五月四日まで袷を着る又九月八日まで足袋をはかず十七日は上野東叡山御社參日光御祭禮なり目に青葉山ほとゝぎす初かつをの季節とす

○灌 佛

四月八日灌佛會は諸寺院の僧達は灌佛堂の屋根を時節の諸花を以て葺きける牡丹芍藥百合の花紫藤燕子花美をつくし紅白の色々空を實物に凝す工夫は新菊や費は厭はぬ金錢花そも撫し子の誕生會天地に指をさす花の薰りは高き賤きも是や唯我獨尊と渴仰せざるものぞなし只ありがたく出來上る御堂の內に鎰佛の尊像恭やしく安置し參らせ甘茶を灌き奉る當日早天より參詣群集し兒童は甘茶戴かんと小手桶を携へては幾度といふ數限らず晌午過ぎまで引もきらず御本堂の廻りには緣日の諸商人露店を張りて賑はしく場所によりては立錐の餘地なきまでの繁昌なり

○灌佛會重なるものは

上野東叡山は法華堂にて修行あり
芝三緣山增上寺は本堂にて執行ある山內大に賑はへり
淺草金龍山淺草寺は僧侶惣出仕ありて唄散華經段行道の作法あり
本所回向院特に群集す 同彌勒寺
大塚護國寺は護持院庭中山ぴらきあり
牛込榎町濟松寺は輪藏を開て廻さしむ

小石川傳通院花見堂特にうつくし
俗家にては今日新茶を表て佛前へ供し卯の花をさゝぐ

いたゞきといふ菓子を佛前に供す
いたゞきは草團子の製にてつまみてちぎりたるもの
に餡を少し載せたなり餅菓子舗にて商ひたり

江戸府内繪本風俗往來中編卷之貳 終

裏頭之部目次

○四　月
深川八幡宮別當永代寺の牡丹　佃島住吉社頭の藤
染井植木屋のさつき　時　鳥
○五　月
端　午　根津權現の枯若花
蟇　梅　雨
雨後の風景　富士講中神拜
雨國の川開
○六　月
天王祭笹團子　兒童手習ひ初め
蟲　干　午　睡
梅干雷干　驟雨雷鳴
朝　顏　蚊やり火
山王大權現陰祭　名越の秡
涼　船　遖
軒の燈籠

江戸府内繪本風俗往來中編卷之參

菫の葉散人著
同　畫

○四　月

○深川八幡宮別當永代寺の牡丹

江戸の頃は牡丹を培養するもの至つて少なし諸侯方に於ても牡丹を園中に栽培し給ふことを聞かず鉢物に仕立たるもの一二鉢あるを珍らしとしたり其以前旗本の士にて牡丹花を數種培養せるより牡丹屋敷の名を後までも傳へたり東臺上野寛永寺山中にある律院の牡丹は紅白の大輪にて二株幹の丈家上に高く出て珍らしくいとも古株なりき又深川なる富ゲ岡八幡宮の別當永代寺庭園は牡丹の培養よくとゞき花時の頃は乞ふて見物するもの絕へず然るに種類多からず又麻布廣尾邊にも植木屋園中に牡丹を仕立て人に見せしめしも十株くらゐに過ぎず又西が原にも牡丹の園ありたり何れも立夏より三日目頃花の盛りなり

○佃島住吉社内の藤

藤は上野山王の臺又は龜井戸天滿宮の社内坂本なる圓光寺品川の鈴が森大塚藤寺傳明寺芝增上寺山内辨才天の池の岸等江戸市中藤の名所なり大方年々立夏より十五日目頃見所といふべし然るに花の最長にて三尺以上のもの少なし茲に佃島なる住吉社内の藤は他に異なりて藤棚の下より海上白帆の詠面白く去りながら花は長くたるゝもの少なし

○きりしまつゝじ

きりしまつゝじは立夏三日目頃より盛んなり大塚護國寺の石坂の兩側又日暮の里常光寺いづれも紅白の兩種上野穴の稻荷は白の一種眞乳山聖天の坂紅白共にうつくし皆平常の培養よく屆きしかば花の光艶全くよし其花時を待ちて見物する人至るは染井なる植木屋伊兵衞が園中なりこは立夏二日目頃を盛りとす家業がらとて他に劣らじと仕立ける上に庭園の詠めもあるより格別といふべし

○時　鳥

時鳥のは小石川邊高田馬場駿河臺邊は立夏より三日目頃初聲を聞く此外江府中時鳥の名所いと多くありて風流文雅の士時鳥を待兼たり就中月次詩歌連俳の席に雅人相集りし時忽ち一聲高く囀くるや筆を止め耳を傾けて大ひに

興を增すに至るより夏の夜の短かきを訝るなり

○五　月

夏至半夏生梅雨竹酔日等あり空には男兒の紙幟吹貫鯉を見地には乙女の田植あり合歡の花夕に咲き葵の午日に傾くよりたゝく水雞を聞きおよやけには端午の御祝ありり

○端　午

五月五日は端午の御祝儀に付諸侯より柳營へ粽の獻上あるなり今日より武家方の禮服帷子となる民間にては單衣を着す市中皆柏餅を喰ふ此柏飾は手製なり又菓子屋へ注文するあり職人は都て節句休をなす男女共子供は武家町人おしなべて清き衣服を着して各々師の許へ祝賀を述べに行く終りて各自の遊びにつく武家方大奥にては絹縮緬絹糸を以て製したる藥玉といふ物を諸々へつる藥玉の内にかほりよき藥品籠めてあるよりゆかしき匂ひを風のまに〳〵吹送る勿論藥玉は四季に隨ひてつるもの故製する所の花も藥品の調劑も春秋によりて別あり然るに五月の外は偬り用ゐず藥玉の製はうつくしくして高尚なるものなり

○杜若花

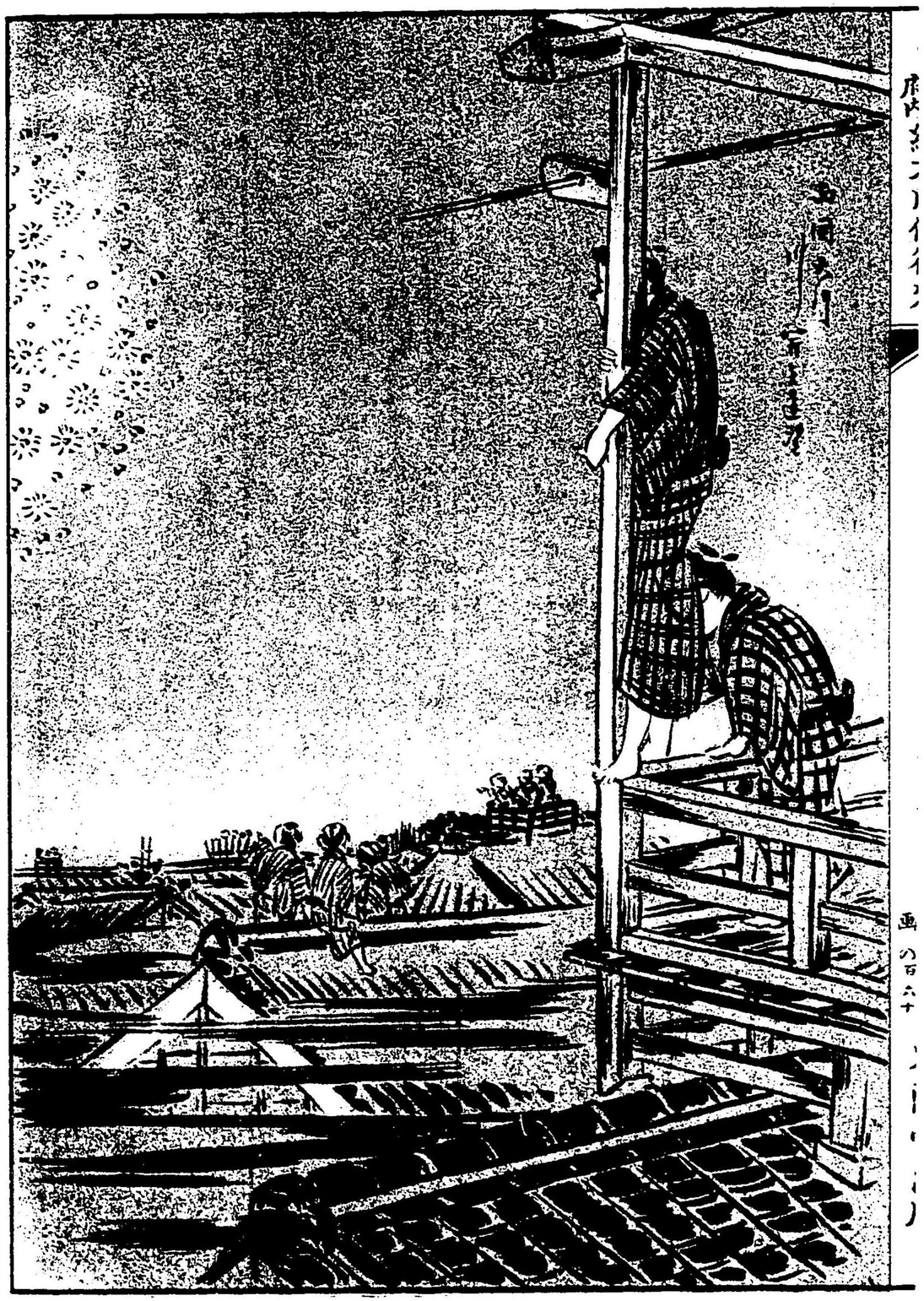
杜若は武家庭池にもあるものなれども名所として數ふるは隅田堤の三巡社内一は根津現權の社内なり花は立夏より廿日前後見所とす同じ花にても三圍の風雅根津の神さびたる池沼に咲くは又自から別なる趣きありしなり

○螢

螢の名所は落合姿見橋の邊王子谷中螢澤目白下江戸川のほとり麻布古川本所邊なり半夏生の頃を盛んとす但し王子邊は至て早し谷中螢澤は蟲の光り他にまされり此螢を捕んとて日暮より男女の別なく兒童等打つれ長竿の穗先へ竹の葉を結付或は團扇或ひは紙袋などつけ飛巡る螢を捕へんと田の畔小川の岸邊を追ひて走れるより足踏そゝねて池沼に落つるなど螢狩には往々あることなり

○梅　雨

梅雨に成ると間もなく梅干の梅實を賣來る盤市中にひゝく梅雨は年々陰晴定まることなく衣類の洗濯物を干すかとすれば又雨降出す傘の干けることなく濕氣に堪かね焚物をふすべて濕氣を拂ふなど扨又蚊の早く湧出る場所は其以前より夜毎に蚊帳をつらざるはなく又此入梅の前



後より蚊の出づると增長せり又霖雨中は暑冷相定ることなく季候の不順實に甚だしかりき

○雨後の風景

驟雨雷鳴相止むと均しく今まで軒下に佇立て雨やどりせし人々漸く東西に散じ一時途絶へたる通路も再び人よ車の往來繁く夜なれば一天雲收散じて月色雲のすき間より照り家内の坪庭植ごみの樹竹水氣したゝり岩石の間なる下草は地にふし飛石の面は清く洗はれ吹送る風のすゞしく已に苦熱を流し去りて心よく白晝にありては林間の蟬の聲再さわがしく夜間にありては蝙蝠の飛交ふもをかしく此の如きこと夏の炎暑中屢次あることなりき

○富士講の神拜

富士淺間大權現を信仰せる人々講中を結び講名を異にしけるもの其講數市中に多かりし此富士講中例年六月富士へ登山す故にそれ等の祈願のため五月末より講中有志の家々へ相寄神壇を構へ美事なる神器を設け榊洗米菓子果物を供し講中の先達なる人より他の信心堅固なる人々謹沐して行衣とて登山に着せし衣類をまとひ鈴を打振ながら富士山の御詠歌を唱ふ此祈願兎角人の心をして諸〳〵の障りを拂ひ家内のけがれを除く如く感じて難有覺へたり此先達を始め神拜をなせる人〳〵謝儀施物等は一切受ざるのみか各自幾多の費を憚からず諸人助の寸志を表してなり

○兩國の川開

五月廿八日は川開きとて日暮より花火の打揚ありて江戸中の涼船皆すべて大川へ漕よするより差しも廣き大川も船もて埋め東の岸より西の川岸へ船から船を歩して行かれし程なり又兩國の橋上より川の兩岸は人と燈火にて埋まりたり打揚の花火は十二提燈といふにて止みけるより陸の人川の船四方に散じける頃は夜も白らむるが川開の賑ひの常にして此賑ひをぞ川開と覺へしまゝもし此賑ひなくんば何程の花火を見物せるも川開とはせざりと覺え來りしなり又此夜市中遠近の別なく花火の見え得べき限りの所にては屋上又は火の見且は物干臺へ登り煙花中天に開くを見ては玉やと呼び鍵屋と叫ぶ去れば川開は兩國近隣のみならず江戸中の賑ひといふべし其以前の川開といふ此月此夜初めて大花火の催しあるより夜々打つゝきて涼船大川へ出て涼煙花の催しありて川は賑ひ陸は兩

國橋前後共涼茶店或ひは見世物興行扱は飲食店又は諸商人の露店の夜業始まりて七月終る迄打つゞきて人出たりとなり天保以後は煙花の催し二次三次夏中にありて止みぬ其他涼花火といふもの絶へたり隨て涼船も大ひに減じける又掛茶店其他の夜業涼客は隨分賑はひたり

○六　月

炎官政を司り火傘空を張る此月をみな月といふは雨ふりがたく水なし月といふことゝかや去ば古人も苦熱の吟少なからず避暑の計を專らとす然るに天王まつり山王祭はかゝる炎熱をして却て恐れしめしは江戸ッ子の威勢といふべし朔日氷室の御祝ひありまた賜氷節の名あり

○笹團子

笹團子といふものは天王祭りに製するものなりこは淺草御藏前なる天王祭りの笹團子有名なり御藏前なる天王宮のことを團子天王と呼びしは天王宮御假屋にまします間御假屋に多くの笹團子を供へられ笹團子にて神輿の埋むる程なるより團子天王と唱へたり扨笹團子は清き青竹の葉繁りし枝に白紅黄色なる新粉餅を恰も花の開きし如く

に綵付たるなり此を天王宮へ備へ奉り其下りたるを戴き諸病あるものに煎じて湯を呑しむる時は病に勝つの力を添へるとて氏子の外なる人々までも拜戴なり是笹團子をいと多く供ふる所なり此他中橋南傳馬町なる牛頭天王宮にも笹團子の神供あり是は氏子毎戸より各自手製にして天王宮御假屋にまします御前へ捧奉り其下りたるを戴くなり笹團子は尤うつくしき物なり

○孩子手習ひ初め

江戸の兒童男女共武家町家とも六七歳より文字かくことを習ふに當時幼童筆學の師なるもの市中町毎になき所なく此師孩子を預りて仕立ける預り置時間は毎日朝より午後までとす弟子の多きは百人餘少なきは五十人に下らず師たる人質素にして而て懇切なりよく孩子を敎育す此師を以前は寺子屋といひしよしなるが今は手習師匠樣と稱したり兒童の父兄通學中の道の遠近より萬事の都合を斗り適宜に入學せしめて筆算讀書の世話を賴めり孩子齡六歳の年六月六日を以て師に就しむれば萬端の障を受けずとて今日師弟の緣を結ぶもの多し其式物は白扇一對か又錢百文より銀一朱を目錄に包みて師の許へ參らす弟子と

画の百六十二　東陽堂出版

なる孩子日用相用ゆる所の諸品は先以手習机硯箱水瀧硯墨筆筆入雑巾手習草紙又師に筆を乞ふ所の手本紙其他社中弟子一同へ配分し参らする所の菓子を持参す多くは母なる人付添へ至るを常とす弟子となる孩子は今日より師を我親の如く敬ひ師は弟子たる孩子を子の如く愛す江戸市中一般筆算より品行且は徳義の道を先導するもの此の手習師匠の外にはあらざるなり数ゆる所の書法は御家流溝口流大橋流花形流等なり其中御家溝口の二流盛なり

○蟲干

蟲干は六月中暑の眞盛りになす諸商業中商品によりては梅雨の濕氣をやう〳〵凌ぎて初めて其濕氣を拂ふより諸々にて初ひ總て土藏中にあるもの何品の別なく皆水氣を含ひ故に蟲干土用干といふをなすなり去れば寺社の寶物武家の武器より書畫骨董の秘藏品藏書等を風入なすに忙はし其中毎戸なすは衣類にて簞笥長持葛籠行季を開きて取出すは天保以前より只今新調の男女衣類子供物より大人ものとくすみしあり又はでなるありて座敷の隅から椽鼻さで縄張渡して掛ざる様は谷川に紅葉のしがらみしたる如く昔の花見もかくやと知られ家の女房女子下婢と詠めては出し出しては詠む模様の縫ひの御殿着より今當世のしま小紋よく似合たる身上と餘處の見る目も憚りさまなり

○午睡

眞夏の頃は午飯終るや睡氣頻りに催し市中道路の往來も日光のつよきに堪へかねて一時は絶て止ぬるまゝ自然近隣何等の譽も聞へず諸職人は午飯休の肱枕諸商店は算盤にもたれる手代あれば硯箱へ肱をつきたる老番頭も見へ船漕よする小僧さんあり勝手の方に女中方思ひ〳〵の忍眠り奥にて子供を寐しながら母親さへもへの字の形去れば此時いづれも同じ新睡の擧皆目の覺るに及びては最夕飯扨行水の汗を流し膳に向ひて燒酎淡盛扨は龜の年の潤ひに老爺のお好の園基將棊又夜が更て翌日も午飯終れば睡るものと眼が覺て又ひるね氣樂な世代と笑はれるが昔の江戸の習慣とは扨お恥かしきことなりける

○梅干雷干

此頃青梅の鹽に漬たるを漸く紫蘇にて紅色を染日々日光に曝すこと頻りなるは來年の梅干の頃までの儲藏殊に年經たる梅干は風邪の藥といふ又當時冬に至れば晝夜の別

なく數度の火災此時彼我の辨當の準備に用ゆる料として梅干の漬込をなさざる家更になし去れば屋上より物干臺扨は窓下店の片脇など梅干を曝さゞる家はなく是と同じく雷干とて白瓜を切て一鹽にして干す生干にて味淋酒へ浸して食するに味ひ極めて美なり是また此所彼所に干たるが見ゆ赤きは梅ぼし白きは雷干夏の炎天に限れるなり又武家方御下屋敷等には梅林に梅あり畑に紫蘇つくれありて梅干は自から出來得るなり

○驟雨雷鳴

日々炎熱燒が如く六月大暑前後御城諸見附御門內外は撒水の手際美事に彼の俗にガエンと唱へし小者等數十人出て日々數度に及ぶ諸屋敷方より寺社共門前より居家敷のめぐりへ水を灌く町々又灌水絕間なきも其甲斐なく所謂燒石に水の譬にそひかず暑氣減ずること少しもなき折柄一天少しく雲の起るかと見る間に風を加へ空一面の黑雲覆ひ見る〳〵うちに大粒なる夕立降來る道路の行客狼狽するかと見れば家々の臺所の引窓且口々の板戶を閉るより洗濯張物梅干雷干等の干あるものを取入るいとまもなく水煙をなして混々と玉水溢れ出て雷鳴遠近に轟きすさまじき光景となるや今までの炎暑は已に洗ひ去り雷除の咒且種々あり蚊帳をつるより線香又は正月の門松をいぶす中にも其以前より頭痛など感じたる雷ぎらひ桑原萬歲樂を唱ふる中に雷鳴も遠くなり電光も薄く雨も休かと覺ゆるや雲のすき間より日光射し林間の蟬の聲又噪がしく夜中なれば月色照り坪庭の內自から清く溜れる水に月影を止め蝙蝠の飛交ふなど夏中しば〳〵ありしことにこそ

○朝顏

朝顏は此節盛んに開くなり此草は江戶に何れといふ名所もなく町方の寸地のなき處にては土鉢に植て毎朝朝顏賣のかき來れるをもとめて二日三日の詠として後は塵芥と同じく捨てける又買ふて夏朝の目覺とするは日本橋近邊なり山の手に至りては庭垣の際又は土藏或ひは臺所の前等へ種を卸して唆しむ寺院の境內などに至りては珍らしともせず種をもふせざるに去年の種の落散りしものより生茂りて自然のまゝに花の開くは又一入の趣きあり近年朝顏の培養追々開けしより人力により種々〳〵の亂咲大輪小輪より葉蔓に至るまで人造をつくしたり其朝顏を鉢に仕

江戶繪本風俗性來

東陽堂出版

立進物になす又細竹の花入に種々の花を挿て毎朝未明に知れる方へ贈り趣す朝の寝覚の料に面白ものにこそ

○蚊遣火

江府山の手邊は何れも蚊の湧出ると早くして多し然るにとりわきて本所淺草は蚊の名物といへるに違はず全く甚だし此に次て下谷邊なり陰暦四月より蚊帳をつらざれば毎夜眠りに付とならず蚊帳の用なきに至るは十一月なりされば夏の夕暮行水夜食の折は蚊遣を焚て蚊を防ぐ蚊遣は蚊遣香を始め楠等を用ゐたり又蚊遣の火鉢も種々の別ありしも其日〳〵を送れるものはかゝる上品なる蚊遣を用ゐず杉の青葉松の青葉等を盛んにふすぶ日々の煙りの細きに似ず蚊遣の煙りに至りては太しく戸々に煙を出せるより家は煙りにつゝまれけり其頃のとにて此煙りは蚊の害を防のみならず自然養生にもよきよしいへり

○山王祭

麹町なる山王大權現の祭禮は子寅辰午申戌の年の隔年六月十五日に行はせらる是を當時本祭或ひは祭年と稱して氏子町々祭禮の事にて隨分多用なり氏子各町より山車ねり物四十三番出て附まつりといふを加へる時は四十八番なり神輿の行列は諸大名の供奉相加りしかば至て長列にして實に嚴重といふべし十騎の法師武者の如きは勇ましくして宇治の戰場もかくやと思はれける祭り通行節は一切往來の人を止められ又家々二階より見物を禁ぜらる又道筋御屋敷方は邸宅長屋窓下へは多くの足輕の士袴羽織を着され六尺棒を突立居て路上を警固し給はる御物見窓には簾をたれ籠て其内には御縁邊の姫君及び相從ひ來らせける女中衆の見物あり當日は武家は一切出門を禁ぜられけるまゝ往々町人の體にて町家の店を借りて見物するなり本祭りにあらざる年は氏子町内軒提灯囃子の屋臺並に作り庭御酒所など出來て引出せる山車の人形並に幕を町内自身番又は店を借りて飾りたり此陰祭にても他の祭禮の數等上に出たる賑ひなり

○名越の秋

名越の御秡は六月晦日なり芝明神宮を始め大社小社共此御秡を行はる就中眞崎神明宮はとりわき其式嚴重にして具備せりと聞ぬ或ひは社の式により大川に舟漕出して名越の御式をあげ行はれしも數あり當日屋形船且家根船を仕立て大川の納涼盛んなり

此頃船宿の軒をつらねて繁昌せるは

日本橋西河岸　鞘町河岸　江戸橋　堀江町　伊勢町
新橋　汐溜　小網町　神田川　牛込　淺草川　兩國
柳橋　米澤町　向兩國　本所一ッ目邊　鐵砲洲　靈
巖島　深川其外諸所なり

船宿抱の舟人なる者實に江戸ッ子の勇める者好みて舟人となるもの多し船宿といふは屋形船屋根船荷足などいふ船を河岸につなぎ客の約束に從ひ漕出すなり船宿は室房のつくり何れの船宿も皆同じ餘り手廣からざるは客の少しの間待合に用ひて飲食などなしける所にあらざれば なり船宿皆表かゝりの同じきは出窓に格子を入れ其脇入口にして看板に行燈を出し行燈には持船屋形の船名をしるせり家内の間取は何れの船宿も同し作にて大小の差あるまでとす座敷の横火鉢並に掃除の清きは斯業の得色といふべし

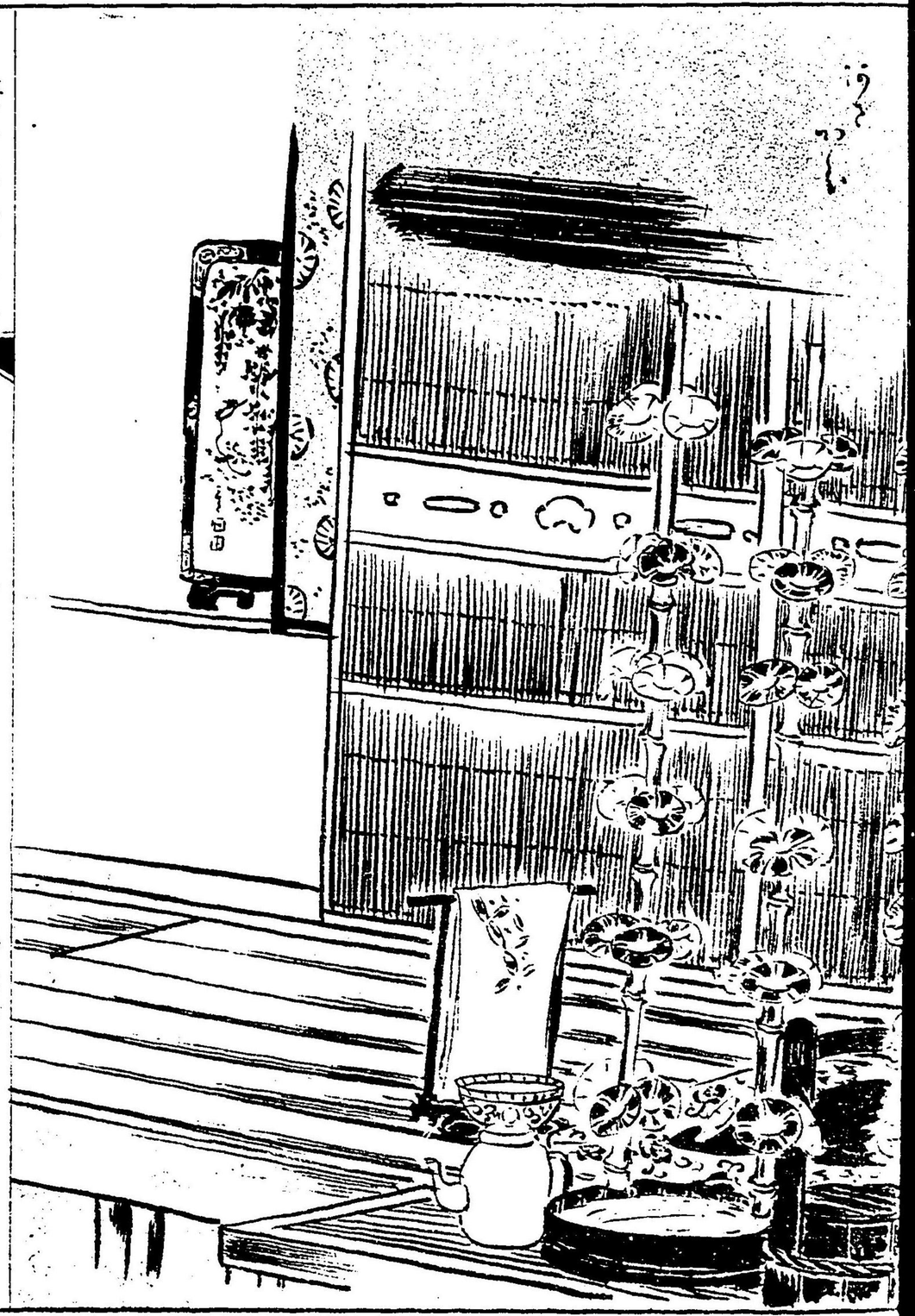
○不忍池の觀蓮

蓮は例年小暑の後廿日目頃より花開く蓮花の名を得し場所は不忍池赤坂池溜同所御門外又市谷御門外猶牛込御門外の御堀增上寺内芙蓉洲隅田川木母寺同所北丹鳥池下谷池之端妙忍寺等とす不忍池の觀蓮會は寛政四年壬子六月廿四日山本北山其弟子長澤容幼公が早逝を悼み觀蓮節不忍に集りて幼公遺稿を讀といふを題として分韻して詩を賦す會する者五拾人此を始めとし其後市河西野谷蘆谷野澤酔石菊池五山等諸家相續で追逐し今に至れり此亦藝苑の一美なり少壯の人其始を知者まれなり故に之をいふと琴臺翁尺牘新裁

○軒の燈籠

此三十日より江戸市中至る所提灯或ひは切戸燈籠を毎戸毎夕ともすは亡魂の供養の燈火とかや提灯は長形丸形上ひらきて下細りたる形の三種なり皆大中小ありて無紋なるあり紅畫藍畫にて山水花鳥人物のかた美しく切戸燈籠は絶へて品よく細工の技倆勝れたるより費もまた多し無紋の長形大提燈へ題目又は名號或ひは先祖代々など書しつけるあり何れも皆今日より八月七日頃迄は夜毎ともすものとしける

新吉原の遊里仲の町兩側の茶屋今日より燈籠をともす燈籠は作工物を出し又は畫を出す畫は當時の浮世畫工豐國國芳廣重の三畫工競ふて技倆を表し新案妙圖を工夫せ



江戸府内繪本風俗往來中編卷之參 終

るより見物の人士夜毎に群集す細工物に引替へるや此細工人もまた晝に劣らじとて工夫をこらして見物の目を驚かする山水人物の作りよく出來たり

江戸府内繪本風俗往來中編卷之四

裏頭之部目次

○七　月
七夕
魂迎
精靈棚
四萬六千日
數入の子供
百花園
廿六夜
○八　月
八朔
十五夜
萩
○九　月
飯倉神明宮祭禮
後の月
神田祭
菊

江戸府内 繪本風俗往來中編卷之四

蘆の葉散人 著
同 畫

○七　月

和名を不月といふはたなはたに文をかすとてひゝくゆへにふみ月とも文ひろげ月とも云なり金風曉を報玉露珠を凝す孟蘭盆の法會より軒の燈籠の手向あり今より陽氣下り天色清明なり

○七　夕

七月七日は七夕とて年中五節句の第四回の節なり去れば王公貴人は嘉辰の祝儀を擧給はれ又市中町民に至るまで祝意を表す皆舊儀を行ふ茲に民間に借地借家するもの例年今朝供用の井水を汲ふ故に井を供にする家にては壹人づゝ出て井戸職の手助をなすこと市中皆同じよりて至る所今朝井戸改のわらぬ所はなかりける

○魂　迎

七月十三日より十五日夜迄は孟蘭盆會にて眞宗の一派を除き其他の檀家なるは武家町家何業の別なく魂棚をかざり先祖累代の精靈を始め有緣の靈は猶更無緣の族に至るまでの供養を營むこと貧富の別なく家ある族は一般とす就中身柄ある武家筋目正しき町家に於ては魂迎とて十三日夕刻より各自の墳旦寺に行墓前へ燈火を奉り禮拜をなし生けるを迎へ參ちすが如く家々の定紋付たる弓張提灯をともして路上をてらしつゝ迎ける家の主人入口なる玄關まで妻と共に出迎ふ町家は主人着流羽織にて家内打つれて出むかふ時向火とて麻殼を門にて焚くなり去れば當日内外とも賑ふこと夥しかりし此以前より盆使進物の贈答あり刺鯖の進物町家は麵類を進物とす

○精靈棚

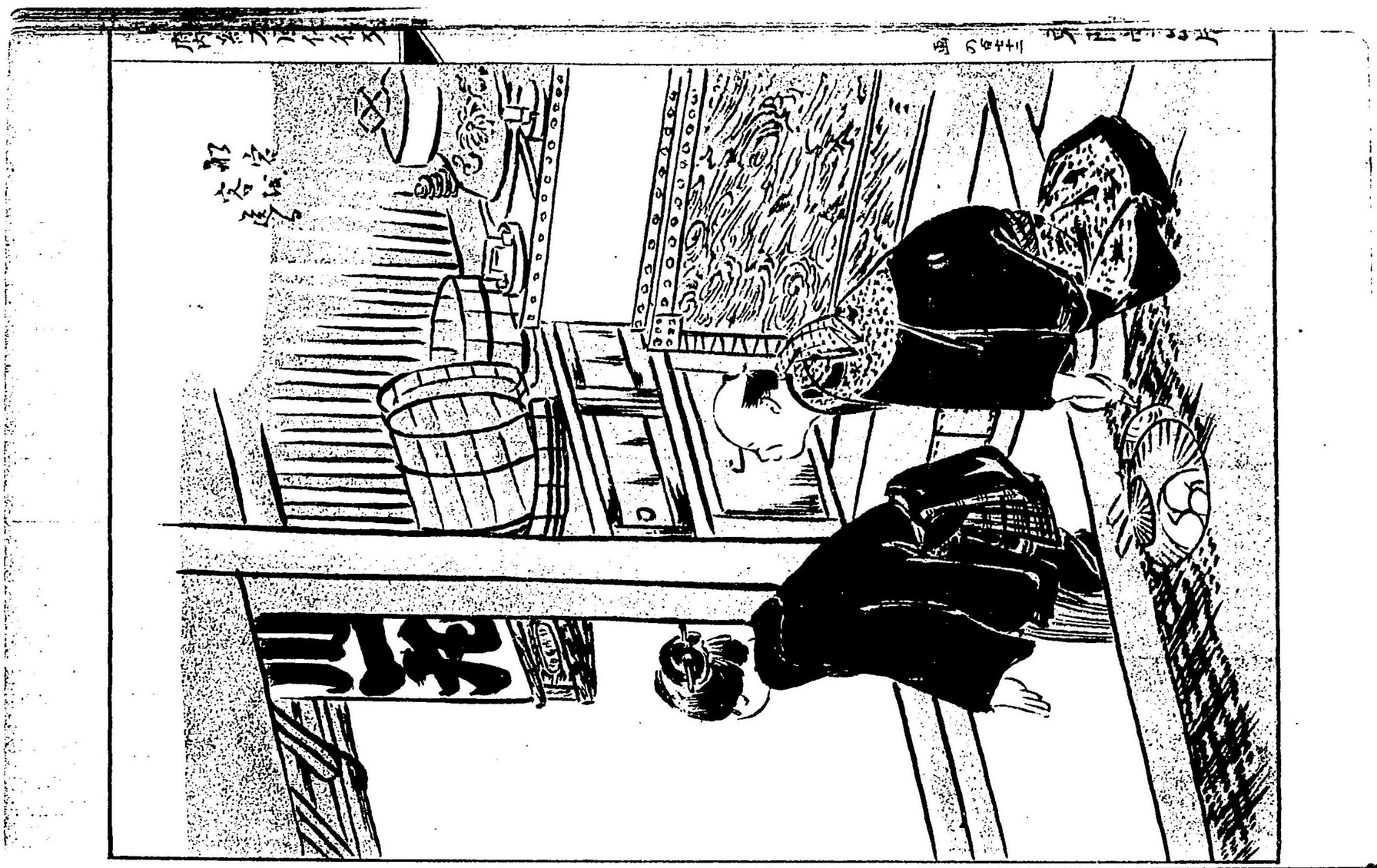
魂棚をつくり飾れる料に用ゆる草類より其外都ての物を商ふ市場江府中諸々に立つ年々七月十二日夜より開き十三日朝に終る

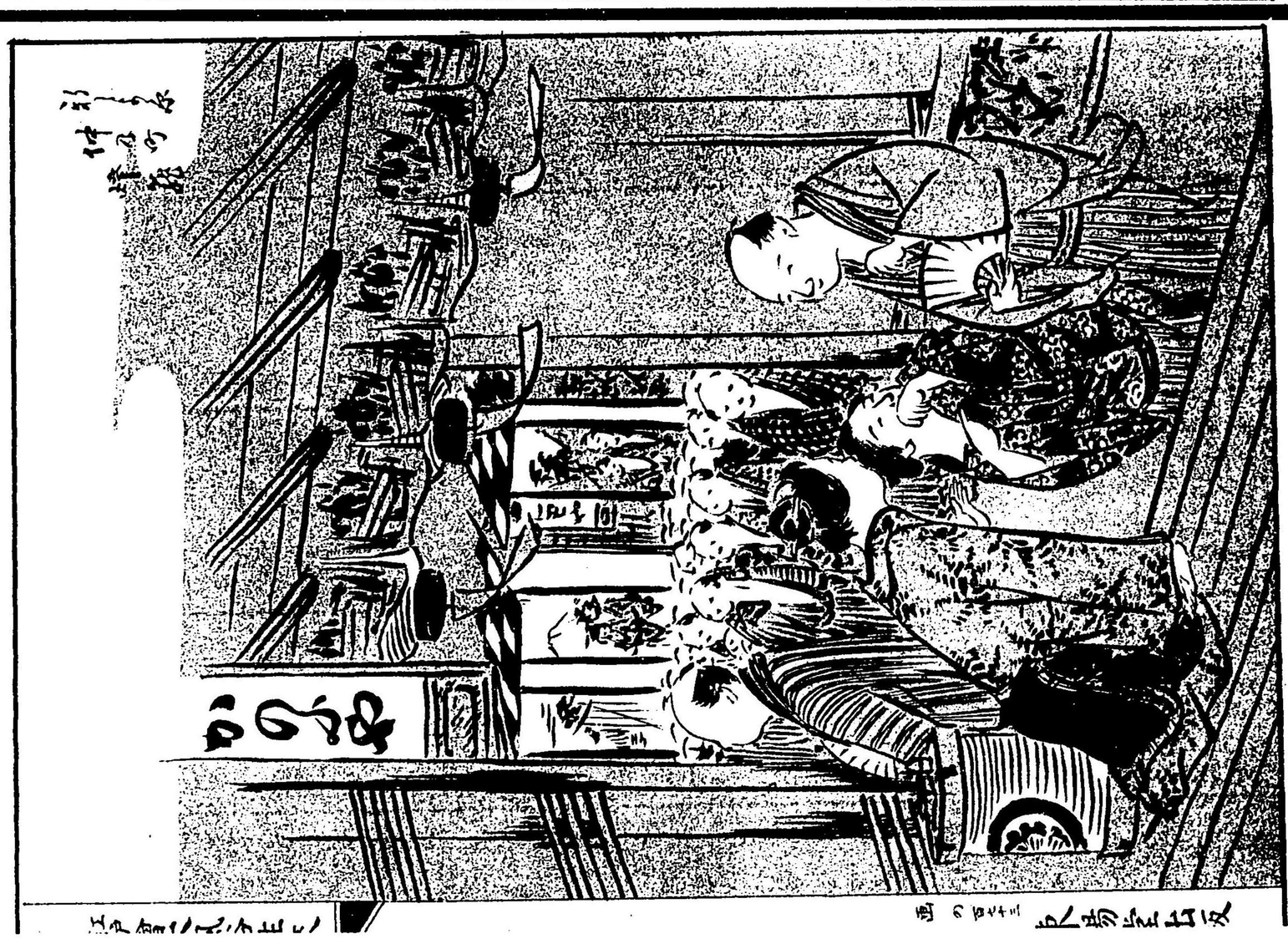
十二日夜の部

新よし原仲の町、深川櫓下、小石川傳通院前、本所四ツ目、根津權現總門前

十二日より十三日午前迄の部

日本橋の南北、兩國廣小路、淺草茅町、同駒形、同雷





画の百七十四 豆腐屋

七月七夕
井戸さら
にの倍は
ゆく

画の百七十五 東場座出板

神門前、同門跡前、本所中の郷、深川森下町、本郷通り白山、牛込通寺町、市谷谷町、麹町四ッ谷御門外、同天王御旅所前元飯田町、赤坂、三田、芝飯倉、西久保其外所々に小市場立此市場より魂棚に用ゆる所の種々なる品を求め來りて十三日に魂棚を出來自家の先祖代々より有緣無緣の亡魂を祭り出來秋の野菜果物を初物を供へ又菩堤寺より僧來りて看經を勤む是を棚經といふ棚經僧の出る寺は小刹のみにして大寺院よりは棚經に出づることなし此魂棚のある中は魚鳥の肉を食せず勿論雙親存生せる子等は精進に及ばず俗に盆知らずといひたり市中都て魚鳥の肉を商ふもの盆中は休業に同じ十六日より商ひを始む

○四萬六千日

當月九日は觀世音菩薩千日參りなり是を世俗に四萬六千日といひて此日に觀世音へ參詣する時は四萬六千日詣ふずるに同じ功德なりといふ今明兩日參詣多き所は

淺草金龍山正觀世音、本所回向院一言觀音、三田魚藍、四谷南寺町汐干觀音、青山梅窓院泰平觀音、麹町八丁目栖岸院、牛込神樂坂行元寺襟かけ觀音、大塚護國寺、駒込光源寺大觀音等皆緣日商人露店を張出し群集なす中にも淺草金龍山を第一とす當所當日の賣物赤 蜀 黍は雷よけとて人皆求めぬものはなかりける又日本橋通壹丁目呉服店白木屋の觀音菩薩は例年今明日とも參詣の善男善女を額かしむ當店の眞中なる入口より店の奥へ入れ案置し奉れる觀音の尊像を拜さしむ去れば白木店内外群集して偶仰すといへども日本橋數丁以内の者のみにして遠方よりの參詣なし故に江戸ッ子觀音といふもことはりなり

○數入の丁稚

江戸にては工商とも十ヶ年の年期にて奉公を勤め工なれば其年期中に職業を覺え壹人前の匠人となる商なれば十ヶ年の年期中に商業を覺えて商人となる工商共歳十二三より奉公に出れば皆前髪ありて若衆髷に結ひたり是を小僧と唱へ十六七歳に及び前髪を剃落し野郎となる是を若衆といふ商人は三十歳以上にして番頭となり主店を取しまる工商とも前髪ありて小僧又は丁稚と呼るゝ中は正月十六日七月十六日の兩度主人より許されて兩親の許へ行是を數入とも又宿下りともいひて新調の衣服より手拭はき物當日の小遣錢をもらひて當日未明に主家を出て自家

へ行くや先祖邊の家を訪問し菩提寺へゆき墓前に額き其後始めて思へるまゝに遊ぶ日暮に及べば夕飯を食し主家へ戻る準備をなす本人は遊足らず且つ再主家へ戻るの辛きは今日親許の甘きを味ふより一層つらく落る涙を袖にかくして母親に伴なはれて主家の勝手口より入る母親は今日數入につかはされしを謝し猶また次回の宿下迄は家主兒を大切に業務に勵むやう注意萬々にして母親の立歸る十五十六日の宵の程のありさまなり

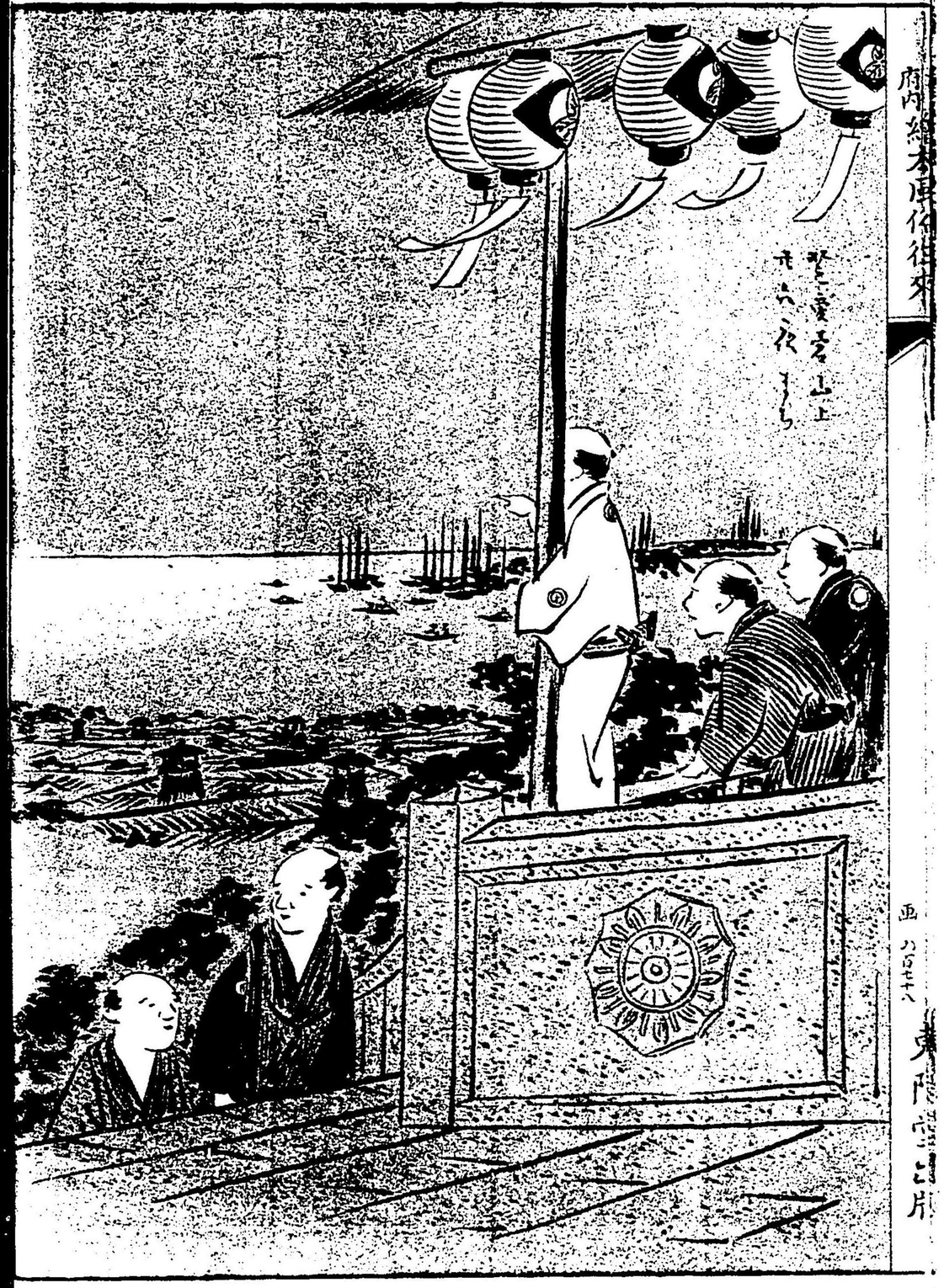
○百花園の七草

七草は第一萩第二薄第三葛第四瞿麥第五女郎花第六蘭第七朝顔のよしなり其以前鞠宇が秋の七草考の冊子ありてくはし文化九壬申三月上木し岸本由豆留の序あり向島なる新梅屋敷といふは最初梅樹を植付しが後に秋の七草を植付培養よろしきより此園中に遊べる人秋時にも絶へず文化中此屋敷草創之時龜田鵬齋先生入口なる門聯に往古來今香不ㇾ斷東西南北見無ㇾ窮と題せしは梅花のみなるまゝ文政中に至り新に七草を植込しかば大窪詩佛先生改め題して移ㇾ栽春夏秋冬花來見東西南北人とせし聯は今にかゝれり後は七草の外千種の草花を繁茂せしめ年中花香の絶ゆることなきに至りしより百花園といひたり此創閭は北鞠塢とが號ぜしよし承りぬ

○二十六夜

此月二十六日の夜を二十六夜といひて今夜の月の出は三尊の姿に上天すとかいひて此三光を拜さばやと人々高臺の地海の眺望を撰て相集り時刻を待つ其他は築地海手、深川洲崎、湯島天滿宮の境內、飯田町九段坂上日暮訪諏神社の臺、目白不動尊の境內、芝浦の海岸別して繁昌なるは高輪海岸より品川なりこは年中此地第一の賑ひなりしは天保以前のことなりとかや其以來は掛茶屋に月待の客來り茶菓酒肴のみにて鳴物手踊にわかなどの催しは絶てなし品川の妓樓もまた平生と同じくして客官の繁きのみにて昔時の全盛なる賑ひは全くなし又芝なる愛宕山の掛茶店は平日は日暮迄にて茶汲女も皆引拂ひしを常とす然るに當夜に限り夜更くる迄客官を待ことを許されて軒に提灯など點じて景氣を粧ふより此夜客足多く武家僧侶の族は多くは當山にて月の出しほを待詩歌俳句を弄びて樂しむ此近邊なる軍談の講釋席落語鳴物の寄席等も月の出るまで演ずること年々同し然るに天保以前

御休所
御休所
御茶



六番 打吉
七番 竹三郎
小 八寸 九寸 新吉 永之助
番 壱 壱 壱
通之丁目 吉良屋

献上子供
人の振まくら

の光景は彌〻失せたりと當時の老人語りける

○八　月

朝夕冷氣加はり日脚少しく早く清風夜を永ふす蘇子舟に乘じ明皇殿に遊ぶ十五夜の月彼岸團子軒なみ毎家の取遣り彌陀詣で札所の觀音參り老爺老媼野外に杖をひく年中の好季の誘ふ所なるべし

○朔　日　月頭の第一日なり

今日八朔にて田面の祝賀あり江戸御城中御儀式格別にして淺草御藏にては米穀の相場八朔の出來によりて極まる雜司ヶ谷鬼子母神境内鷲明神祭禮にて參詣多し新よし原の遊女今日白小袖を着して仲の町へ出で道中す勿論太夫に限るなり吉原中遊女の數多き中に此遊君太夫と唱ふる所の品格を備へたるもの實に別なり百金の衣類も襤褸と同じく金銀高價の手道具も破扇と異ならず去りとて物の精粗を知らざるにあらず白刃をも踏べくして慈哀深く萬乘の君を見ること禍夫の如くにして神佛を恐れ金錢を卑みて操節を高ふす等の覺悟ありて一種異樣の人となり他に比類皆てなし此遊君今日はでを粧ふ白重ね鮮潔にして愛觀すべく其以前黄金を放擲して愛したるもまたひべなりといふべし

○十五夜觀月

十五夜〻觀月は明夜の陰晴はかられざるより十四日の夜月見の宴を開き詩歌連俳を催すあり扨又市中おしなべて團子を製して月に供ふ栗柿葡萄枝豆里芋の衣かつぎを三方盆にうす高く盛あげてたり團子は大きさ徑三寸五分位より小さきは二寸餘とす此團子に尾花女郎花等を添へたり當日前より米を臼にて引き團子の粉を作り十五日朝未明より家内打揃ひて製するを吉祥としたり月に供ふる團子の外に小團子を製し一人に付數十五箇づゝに柿栗等を添へて配分するより家中多人數ある家にてはいと澤山に製したり去れば手傳ふ人々多きまゝ臺所は隨分の喧噪なりしも是相かわらざる家例として目出たかりける大江戸の繁昌又今日は江府に尤多く祭られける八幡宮の祭禮にて遠くは神樂太皷の音相響け近くは幟の見ゆる所彼所此所にありて賑はし、

○秋

萩は立秋より二十五六日目頃を盛りとす其箇所本所法恩寺、鎧戸天滿宮の境内、隅田堤三囘社の内、受地秋葉權現

の境内池の邊水に映じて尤もよし寺島蓮華寺、同百花園、下谷正燈寺、淺草清水寺、同東光院、御濱御殿の萩は日本國の名所の萩を植付給ひしかば萩の頃はいみしき樣に咲けるもこは猥りに拜見をなし得ることを得ず茲に萩を以て聞えたるは本所萩寺なり萩寺は柳島と龜戸の中間にあり て龍眼寺てふ寺なり寺名を呼べば知る人稀なり萩寺といふ時は誰も知りたり此寺内差して廣やかにもあらず萩も他の名所と同じく幽趣閑雅なりける風情なきも此地は柳島邊の別野の家作龍眼寺近隣の趣きはみやひず鄙びず此地は此地の得色を備ふるより萩も自から花情を別にし萩寺の名を得しが且は他に樹竹なく尤も萩のみを植付られたり去れば爪すゐの床に花すりと吟詠なきを恥る心地したるは昨日の秋光今日忘れかねたり

○九　月

此月九日は重陽の佳節五節句最終の儀式なり後の月見より神田祭の勇める賑ひ飯倉神明の　盆市或ひは菊花の幽趣漸く呂脚のつまるより寢覺の床に風前の笛韻を聞きて秋の名ごりを知り月下の砧聲に冬の來れるを悲みける時々の時雨はいづくも同じ秋の夕暮ひとゝ淋しき頃にぞなりける

一ケ年中五節句の最終は重陽にして將軍家は諸大名の參賀を受させ給ふより下乘下馬に御供方禮服をかひつくろひて差しもに廣き場所も所せきまで乘物箱引馬長柄鎗にて埋まりしを見ても殿中の御式いと嚴重なりしを知られたる下々にても當日は男女の兒子達時服を粧ひ武家に在ては讀書手跡弓馬鎗劍の師の許へ祝賀に行き町方にては手跡算盤の師女子は手跡より絲竹の師の許へ行き儀式を行ふ又當日數日以前より重陽の贈答武家町家の使ひに往來繁かりき

○飯倉神明社の祭禮

芝なる神明宮は飯倉神明宮と古稱すとかや然るに芝の神明宮とのみ唱へ來りしまゝ飯倉神明の本號を知るものなきに及びたり此神九月十一日より十五日まで祭禮のよし承はりしも九月の月に入るや社内に見世物曲馬力持などの小屋立てあるは曲猥樂又は輕業なんどの興行始まり諸商人も露店を張りて出で神明前町は更なり宮社近隣は軒提灯をつらね人群集なしたること九月下旬に及べるより俗神明のだら〳〵祭りといひて幾日か本祭日といふこと

九月重陽之賀
三味線の師の許へ
笑子誂可考

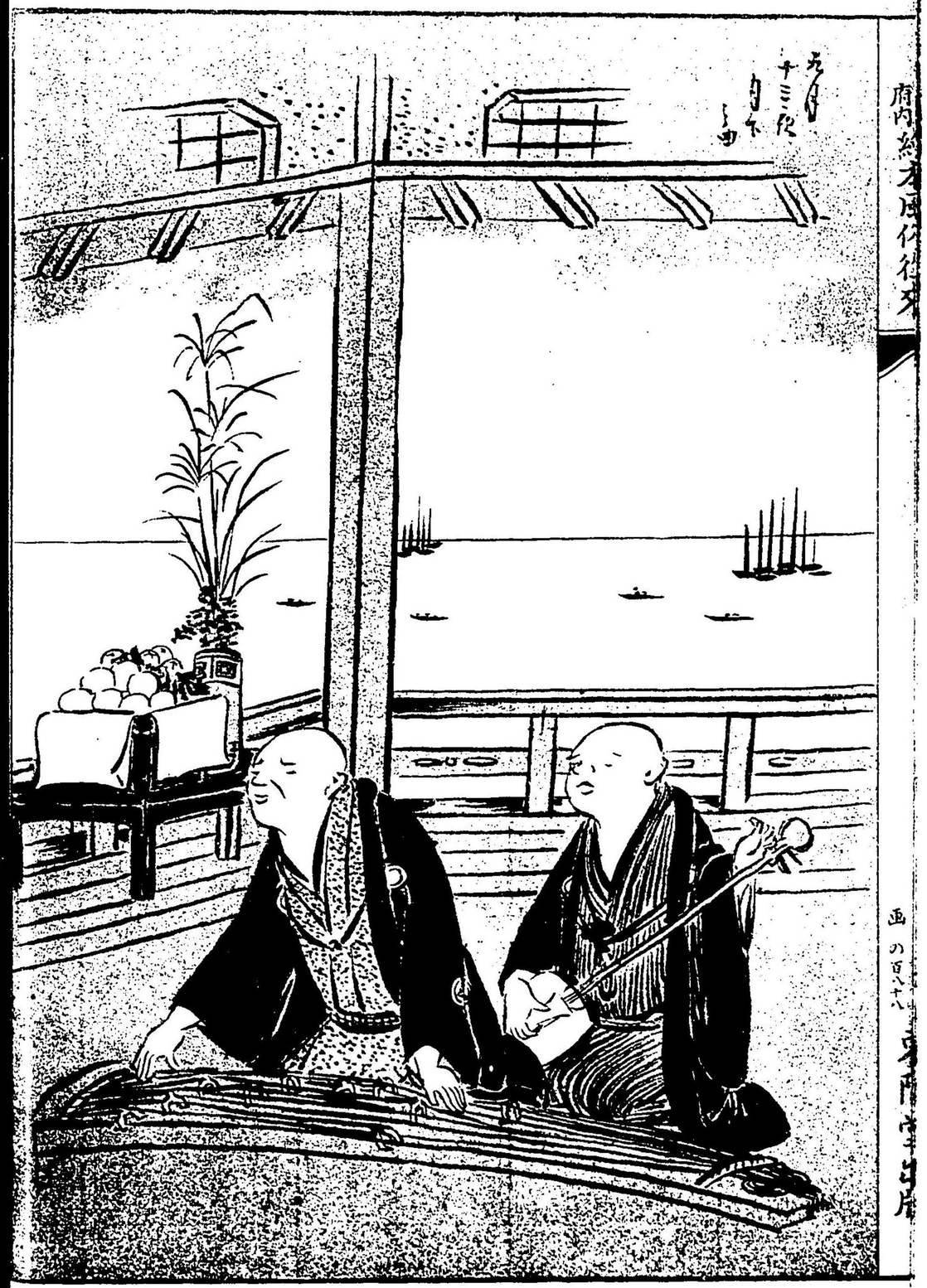
萩乃
まちこ

も知らざるなり勿論當社は京橋以南第一の繁昌は外に比類なき土地なり故に平日常に人群集す殊に神明前町幷に日影町にかけて淺草觀世音前町の次は當所なるべし社内に吹矢あり矢を吹付て當るや種日様々の人形及び鳥獸樹木妖怪の作り物下より出で上より下り或ひは龍宮の樓閣の戸左右に開くなどの細工美をつくし巧を極めしは江戸に類なく當所壹軒なり此店表間口七八間ありたり扨また祭禮中蓙賣の店多く出づ此蓙を目かち蓙と俗稱したり是を以て神明の蓙祭の稱あり又チギ箱といふ小判形の箱に藤牡丹を色どりて畫き大中小三ツ重ねて一組として商ふ薩州侯の如きは此チギ箱をいとも美ことに注文あらせられて産神の名物として將軍家大奥へ御慰みとて例年祭禮時の獻上ありたり此チギ箱賣の店蓙うりと同じく多かりき又當社入口の横大澄籠こは當所に名高き芝泉堂と號する手跡の師あり常に社中二百人餘も出入せる弟子中にて十歳以下にて天稟筆力に優れたる兒童を撰びて二尺餘四方なる大文字兩太神宮の四文字を揮毫せしむ又源助町なる孔雀幟此のぼりは大きさ二間四方位なる朱の鳳凰羽翼を左右に伸たるを幟の頭につけたり幟の幅は九尺なり又三島町なる東江源隣が筆になる幟又芝大門前の軒提灯は深川親和の兩太神宮の篆文字を用ゐたり又花露屋といふ化粧品店にては甘酒を醸し置きて通行の人に振舞ふこと十四十五の兩日なり然るに振舞に預かる者割合少なきにいぶかりたり此の六ツは當祭禮の名物當時誇るに足りたり

○後の月

九月十三日夜の月を後の月或ひは十三夜と唱て團子を月に供ふること十五夜に同じ唯十五夜は團子の數十五箇を供へしを後の月には其數十三箇を用ゆと十五夜の團子には餡を用ゐて食せしを十三夜には黄名粉を用ゆるのみ別なり又十五夜に團子の馳走に預りし時は十三夜にも必ず團子の馳走に預る等にてもし十五夜のみにて十三夜を欽く時は片月見とて是を忌嫌ふこと江戸の風俗なり今日深川六間堀神明宮の祭禮あり扨又神田明神宮祭禮年には此日三四日前より祭禮に出づる衣服を着かざり遠からざる場所の縁類又は知れる人の方へ往などにて往來賑はへるは都て神田最寄なり殊には産神町々は別して忙はし

○神田明神宮祭禮

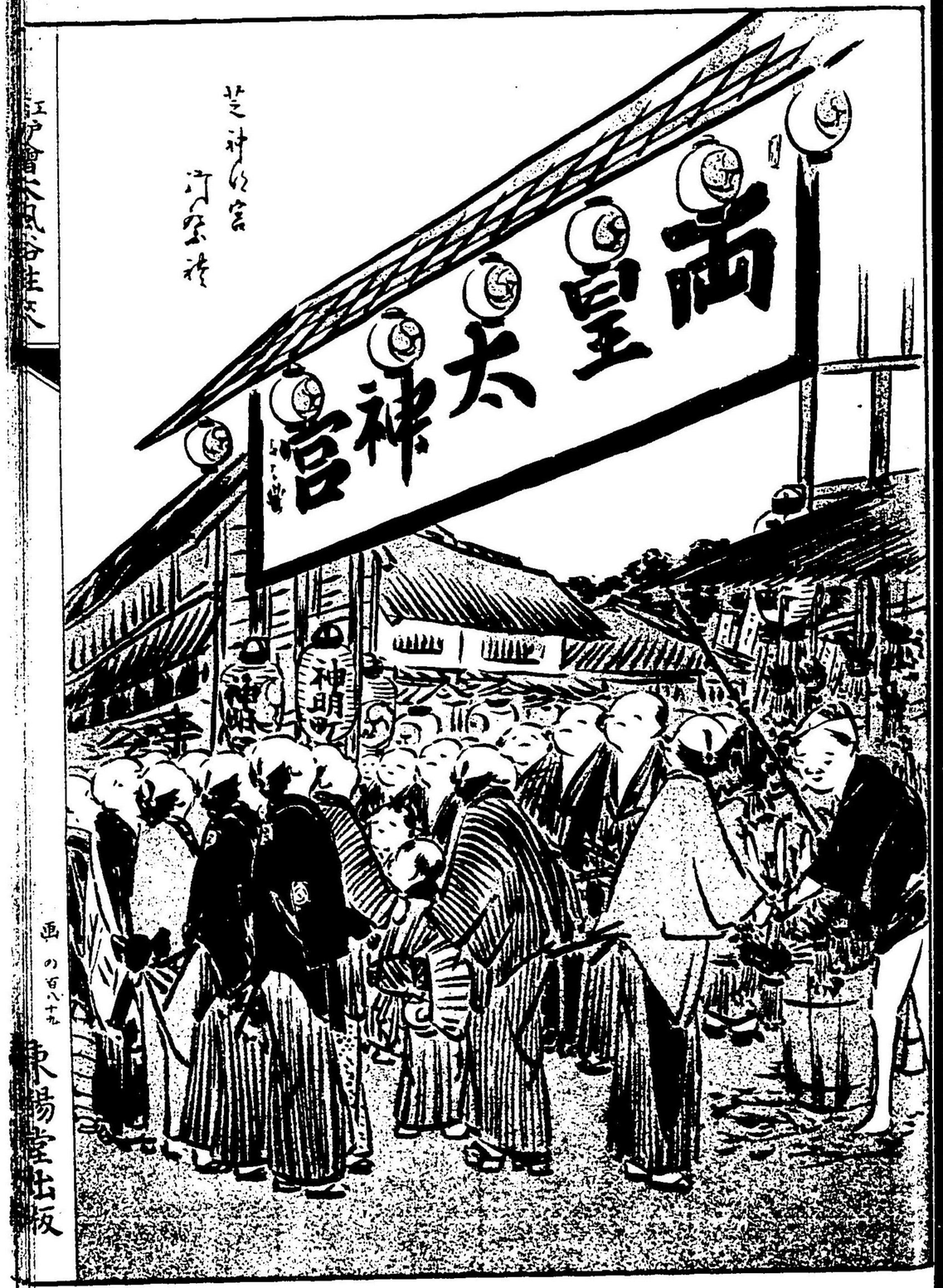


此祭禮は大江戸二ッの大祭の一ッにて丑卯巳未酉亥の歳にして乃ち隔年なり九月十四十五日當日とす十五日は未明より巢車ねり物を引出し江戸御城中へ練こむ神輿二社渡御し大名方より供奉し參らす引馬長柄鎗等多く出されける相馬侯の如きは黒く馬を染出せる幟は布八端にて作りしかば隨分の大幟なり此幟を腕にためて持たるは相馬殿藩士中力量あるものを撰ばれ手代三四人付き神輿の眞先に立ち袴羽織大小刀を帶して幟を押立たるも勇ましき巢車四拾番も出其外手踊ねり物多く出たり

○菊

菊花は守山黃龍侯安積澹泊翁が遺法を試み給ひて培養其功を奏し菊經百菊譜の著あらせける寶曆中より次第に世の愛玩を博したり澹泊翁は明人朱舜水より傳來せるとかや其後追〻巢鴨染井邊の花師造化の巧を奪ひ種〻樣々に作出せるより菊經百菊譜も陳腐となり澹泊翁が法も手を下すに所なきまでに至りしも其本づく所皆前人の功といはざるべからず目黒青山四ッ谷巢鴨本所駒込染井等皆花壇菊を作りて名高し例年立冬より五六日目頃よりよろし彼の細工菊は俗間に行はれしも黃菊白菊其外の名はなくもがなと絶唱せるより風雅の士は好ましからずと聞ぬ

江戸府内繪本風俗往來中編卷之四 終



浅草田
揚木や

神田
まつ

江戸府内繪本風俗往來中編卷之五

蘆の葉散人著

同畫

裏頭之部目次

○十月

玄猪の御箭火

お十夜

御命講

惠比須講

小鳥狩

嬉開

勸進相撲

醫家の冬夜

冬夜の三味線

講武

商家の繁昌

燈下の我雖

紅葉狩

○十月

菊香晩節梅應二小春一とまた斗杓指レ北日影回レ南など此月をいひしなり四方山の紅葉は唐紅を染出し鹿は初音を鳴く山路會式櫻の花やさしく咲く小春日よりの麗閑寂々たる茶室には二三客口切の味淡泊にして月末になるより初しぐれ催し日脚短かきをいぶかる野外の散歩夜の長を歡ぶ居職人の夜業追々寒さ增に隨ひ晝夜火災の數の繁くなるは江戸の名物といふもをかしけれ

○玄猪の御箭火

十月初亥の日は玄猪の御祝儀とて諸侯方暮六ツ時日暮過き前に御登城なり故に大手御門及び櫻田御門外にて大箭火を焚かれける今日より御城中は御間毎に火鉢を出させ給ふ民間に於ても同じく當日より火鉢並に炬燵を用ゆること例年違はず扨大手及櫻田兩御門の大箭火は今宵登營の諸侯方への御馳走にて大松薪を幾百本となく積置て取くべ

て焚く當御門定務の俗にガエンといふ見付の中間多人數出て、箒を焚く其傍には當御門固めの大名の家臣火の元を嚴重に取締られ今日日暮より翌夜中に終る尤も將軍家の御徒士目付役並に御小人目付の兩役人立合ふ開夜なるまゝ火煙空を焦し御城門の白壁紅ねに映じ青松の間より焔炎うつり堤下の溝水を照したる光景は昔時軍中の夜篝と思はれ太平の世に武勇輝きたり此日武家方には紅白の餅を諸所へ贈る町家にも餅の贈答ありしなり

○お十夜

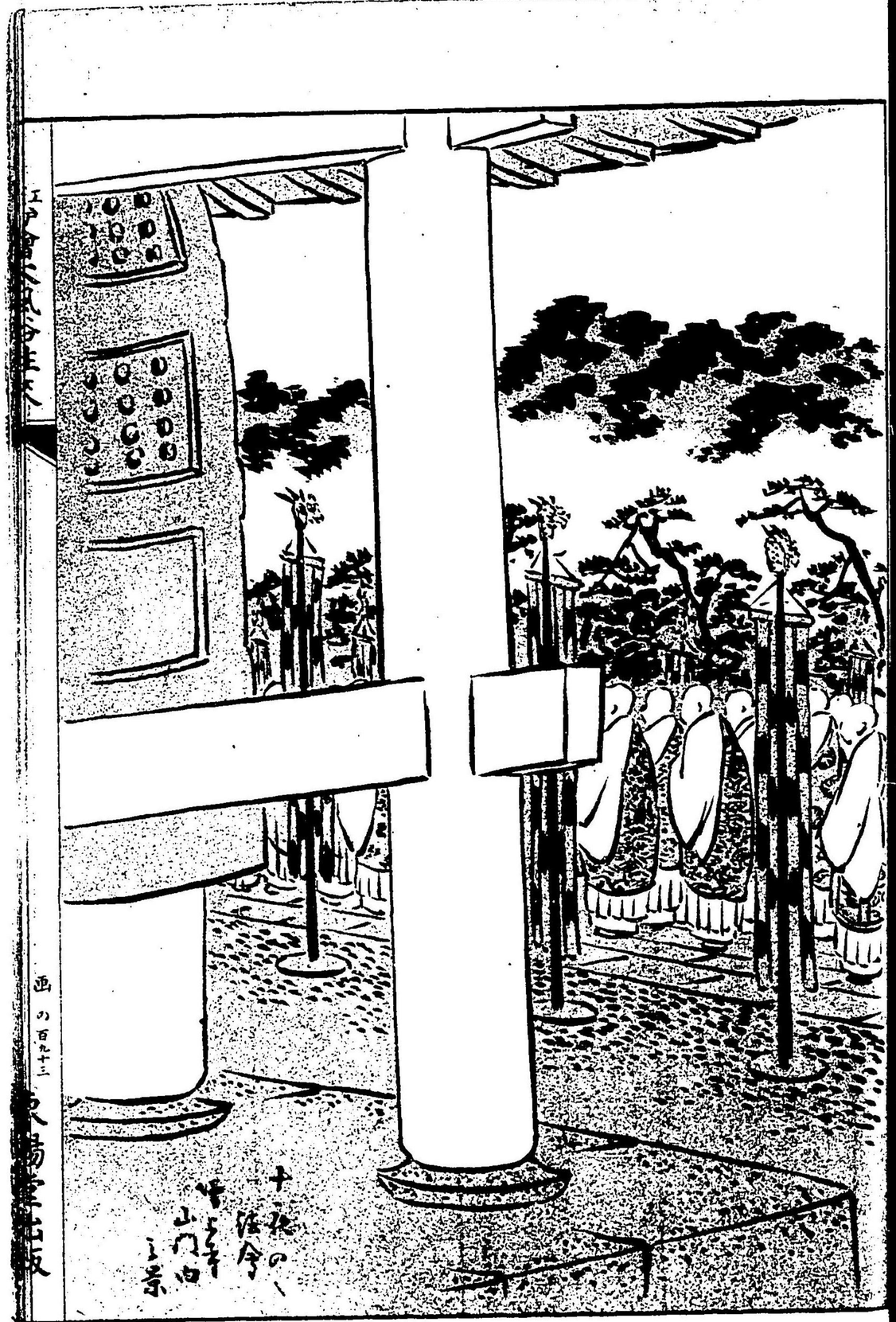
例年此月六日より十五日に至るまで淨土宗の寺院にては十日十夜の法要修行あり是を世俗にお十夜と唱へたり本所回向院深川本誓寺三崎法住寺南品川願行寺青山養光寺奥澤淨眞寺淺草觀世音堂うしろの念佛堂千住勝專寺行德德願寺等いづれも善男女群集す就中芝三緣山增上寺は江戸將軍家の御祈願所なるまゝ別して十日十夜の法行おごそかなることいふ斗なく大僧正より御靈屋付なる八院の別當及び役僧を始め寮主僧數百人出仕して行はせらる色染の法衣には七丈八丈の袈裟金襴蜀紅金繡に身をまとひ品位正して看經讀誦あるや極樂界もかくやと思ふばかり恐れ尊くありがたかりし光景にこそ

○御命講

十月十三日は日宗御命講の法要にて此宗の塊越武家町家の別なく家々の佛壇を飾り日蓮上人の尊像をば御綿とて紅白の綿をかけ青紅の餅を備へ造り花を挿むこと常なり此飾りに上中下精粗あるは家の貧富に應ずるなるべし今日朝より終夜洲上なる本門寺へ參籠する講中を始め其他の士女江戸より本門寺まで引もきらず其他參詣群集せる寺院は品川妙圓寺本郷丸山淨心寺淺草どふ店長遠寺大塚本傳寺うし込鮫滿の祖師赤坂今井谷の祖師小梅村常泉寺高田亮朝院等とす

○惠比須講

十月甲子の日は大黒祭なり俗に初子といひたり神田明神地内の大黒天上野東叡山護國院小石川傳通院麻布一本松なんど皆參詣群集せり此他大黒天を案置しある社内院裏いづれも賑はへり此大黒祭には戸々夜々に用ゆる燈火の燈心を商ふ燈心は些末の物とはいへ缺べからざる品とて甲子には買ふ人多く又大黒天へ供ずる菓子を七色菓子と唱へて七種の菓子を賣れり七種とも極めて代價安き粗菓



江戸會所名物之内
東屋芳治郎事於
画ノ百十五
東陽堂出版

府内絵本風俗往来
画ノ百十四
東陽堂出版

江戸會大風谷生之

西の百七十七

久場金出版

府内紙本座位往来

東西雪山席

西の百七十八

嬉しらと
待合の客

力士
相撲
場へ
趣く

なり其他この神に供する御酒餅膳部家中一同へ振舞ふ所の品は商家各家の定めありたり此月二十日は恵比須祭なり恵比須祭は恵比須講と稱して商家にては此上なき大祭の樣心得たり鍛冶職錺職石職に輔祭として稻荷大明神を祭る紺屋に愛染明王を祭る大工職に太子講として聖徳太子を祭る船を扱ふ業にて船玉大明神を祭る醫家及び藥種商にて神農を祭る芝居座には客人大明神を祭る等皆家業の有難を忘れざるの祭禮にして月祭あり年祭ありていづれも酒肴珍味を調べ料理人又は仕出の膳部を命じ絲竹管絃の餘興ありて客設けの丁寧よく心をつくして饗じたり去れば此月二十日の夷講等は諸商家々の賑ひ大方なくまして日本橋最寄の商家は格別の賑はひとす

○小鳥狩

冬季に至るや目白、ひめ、あとり、ひわ其他種々なる小鳥飛來るは森林高く繁りたる邊に多く此等の小鳥を捕へ飼ならして弄ぶ少年は駒込千駄木あたりに地屋敷を領しける小祿なる旗下の士の少年御家人の子弟原巧みをつくして捕へもし飼もしたり此他は赤坂青山麻布邊に多し此小鳥狩は町家の子弟は決してなさず幕下直參の士に限り

たり其捕へる方法幾數あり又文武練習のひとつには鶉鶉駒鳥などを仕立鳴音を聞樂ひを上なき遊としたりける

○爐開

當月朔日より末茶家にては爐開口切の催しあり當時茶の湯を好みて茶室庭園等の趣きを粧ひ閑靜に茶味の濃淡を愛するは諸侯方藩臣に絕てなく幕府旗本の士致仕の後隱居となりて茶湯に遊ぶ次は醫家或は將軍家諸御用達町人又は御藏前札差町人且は豪商の主人諸山の僧侶次は新吉原遊廓の遊女屋の主人及幇間等とす此他將軍家直參の御坊主方及び諸侯方御茶道坊主衆は皆勤め柄によりて茶事の修行簡要なり又上野東叡山中勤仕の士などに至りては宗匠を凌ぐ者輩出し斯道の蘊奥を極むる人少なからず此士は皆東叡山の後ろなる根岸の里に地屋敷を領し住居しけるより此里の門構家作り板塀生垣の園木立の配置其樣凡ならず去れば此根岸てふ所は都下第一の靜地にして風流人士の住居地なり

○勸進相撲

勸進相撲は大底當月下旬より初まる春秋二回の出世相撲の本在所は向兩國回向院境內を定場とし小屋を構高矢

を組立相撲興行中は矢倉の上にて毎朝東雲告るや太皷を打鳴す其響き勇ましく時刻來れるを待て彼の大諸侯御抱の力士絹布の衣着重て金銀造りの脇差を帶て弟子力士化粧廻し入れたる葛籠を荷ひて供に從ひし幕内幕下の力士本所回向所最寄の住居なるより出場の樣勇ましくして美々しきを見る人天下の力士と羨まぬはなかりしなり彼の劇場に俳優の樂屋入とて早天より打鳴す太皷と共に出場すると同じことなりしも力士は寺社奉行の配下にして町奉行の支配にあらず小屋ものと呼るゝ俳優とは泥雲の相違にして其品位自から別物なりける

○醫家の冬夜

橙や蜜柑の實の黃色を呈する頃に至れば醫師の顏色青くなるといふは江戸時代の惡口なり然るに十月も過ぎ十一月の末より極月終りに至る迄引風の病人多く此引風を忍びつゝ極月前の繁忙に藥を用ゆる暇まなく病勢を募らせたるより遂に臥床につき醫藥の苦さに苦しむなど年々同じ姿なり扨醫家は何れも夏中の患者のために儲置たる敗鼓馬勃も缺乏に至るより藥籠中の準備此時を過さず整生の若輩學問の暇夜々此事に從事し散藥煉藥膏藥丸藥の製法忙はしく大醫は自から整生も多く後輩は前輩の指揮に從ひ各々負けしと相はげむも師につくすの道は乃ち斯業仁術の棟樑なるべく然るに燈火のほくらき處に神農と夢に會ふ少年なしとせず是等に至りては朱襄の仁術の棟樑とやいはんか

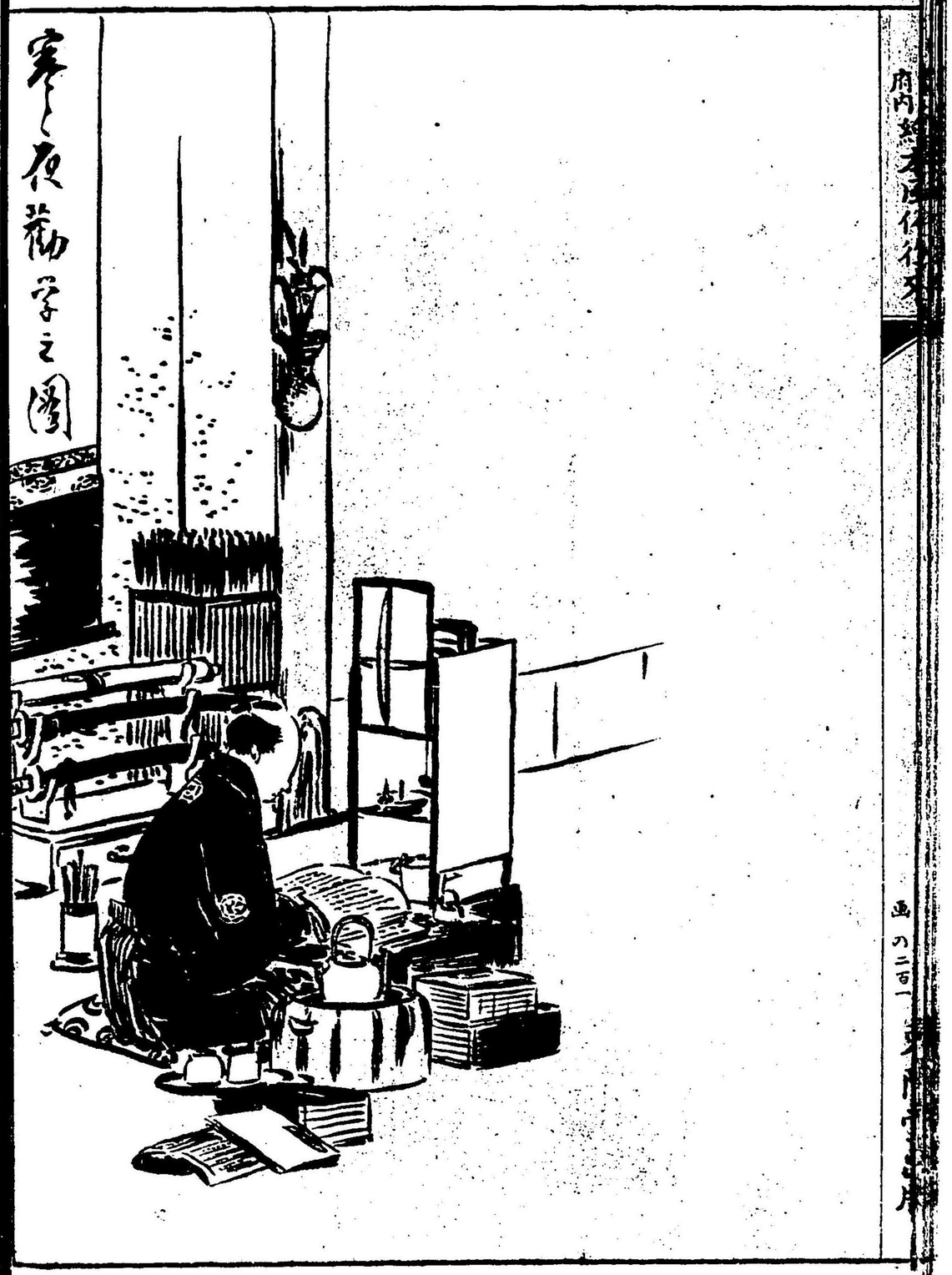
○冬夜の三味線

武家地は元より町中にても大通りと呼べる場所本町石町大傳馬町の如き彼方は筋違御門内より大通り南京橋に至る迄の兩側の商店に音曲鳴物の音色の響くは山王神田の兩祭の時のみ其他は年中決して琴三味線の聞ゆること絶てなし然らば此邊兩側の店ども女子に遊藝を習はしめざるかといふに決して左にあらず琴三味線の藝は勿論手踊笛太皷迄も習はしむること殊に甚しく隨て金錢もいみじく費やしける程なりしも世間へ知れざる樣又奥座敷も手廣く土藏と土藏打續ひし所にて店へ聞へざる樣溫習するより鳴物の響き店外へ聞ゆることなきなり此他横町新道の如きに至りては夜長き此頃三味線の音の聞へざる所はなかりしなり

○勸學

寒夜馬初を洗ひ

寒夜勉学之図



冬夜の縫針

節玄英にいたり候飛灰に近く日短く星昴の夜燈下の業は彼の土の經史我土の記傳雜書霰說の五車妙齣は時を過ぐべからず老年は又唐宋四庫の富籠谷に繼ぎて博を要するは平日の嗜み專らにすといへども此程は乃ち年中第一の季節とす又詩文書畫の家々門下生の勉强長夜を忘れ雞鳴を聞て初めて夜を徹したることに慙くなど己れが氣根に任せて涉獵するより如此上に及ぶは是全く戶々に時辰儀なく東西南北に報ずる時鐘も時としては聞へず且は其道に耽るの致す所是等に至りては後の人の閔笑し給ふ所なるべし

○講武

士分以上の身にしては幕府の直參諸藩の臣家何れも馬術の嗜肝要とす就中幕臣の士は人物の賢愚に關せず馬術の達者ならざるはなし當時馬術の修行は馬行といふもの第一の嗜みとするより幼年の中木馬に跨り馬行の正しからんことを欲す此頃夜々木馬の稽古の時にして旗本の士八九歲なる兒子居給ふ屋敷にては此兒子をして木馬に乘せしめ身體の構へより兩の腕の開き手先指先の工合脾の樣足の張り鐙の踏等の修行をなさしむ故に鐙の音所々に聞へたり

○商家の冬夜

此月に入るや暑氣去りて後秋もいつしか立て今は火桶手あぶりの時代夜に入るや諸居職人は夜業初まり諸商家は向季の仕入扨は諸御得意御出入方の御注文は日々に增加し下職方の割振より日限物の催促又は出來上りの調査等日脚の短かき時に及ぶは當年に限らず年々同じ初冬の繁忙番頭手代小僧ども晝は奔走夜は夜の業あり日限の約束と出來の善惡利益は二の次第一に家名に關することなりしかば相互に日間なく家業大事の營み中此頃よりして十二月の大年越に至るまで晝夜と寸暇なきなり

○燈下の裁縫

當時一家の妻女子が家事に於ける炊事の外に縫針とす此裁縫年中の手順とするは冬季中着用せる衣類は翌歲梅雨の頃には皆引ときて洗濯し張板に張上げ夏中に綿入幷に羽織胴着襦袢の類に至るまで一家中の着用を縫終りける奉公人ある家にては小僧の着用せる衣類とも悉く出來秋風の起る頃は家中一同それ羽織よまた袢天よと冬に至るや襦袢胴着等已に仕立終りて葛籠籠笥等より取出し着す

るのみにして此時に臨みて針取ることをせず又夜中の夜着蒲團の類より足袋股引に及ぶまで必ず夏中に洗張縫直し終りたり扨此等の事ども終次第晴着類の蟲干をなす蟲干終るやまた夏衣の仕舞洗とて初夏に着用せる衣類の洗張より仕立直しをなすかくする中に秋も過て初冬となるや來年の新衣の縫針にかゝるかく手ぐりせざれば繁き火災等の中の住居其中には吉凶の日間入あり都て此等の事共の捗どらず怠る時は腑甲斐なき引ずり女房の誹謬はまぬがるゝことなく又は此中に祭禮且は芝居見物及び寺參り親類幷に知己への無沙汰を見舞等あり又右の始末を運ぶに堪へず他人を傭ふて衣類の仕立洗濯を頼むは妻たるものゝ恥辱上なきことゝせる習ひなり然れば此月等は白晝は勿論燈下の手業怠ることなかりける

○紅葉狩

紅葉狩するものは詩歌人書畫家俳句連句の宗匠醫家及び寺僧御茶道方幷に武家方は四十歳以上の士に多し紅葉に聞へたる土地は上野東叡山々中、谷中天王寺、瀧の川、根津權現の境内、品川東禪寺、高田穴八幡宮境裏、大塚護國寺山中、大久保西向天滿宮地内、角筈十二所權現社地、目黒祐天寺芝增上寺、辨才天池邊、鮫洲海晏寺、目黒瀧泉寺、淺草觀音奥山近き頃染井植木屋百種の楓木を植付たり又淺草三谷堀なる名妓おなはなる者綾瀬邊より橘場へかけ幾千本の楓樹を植付春の花は從來ありしも秋の詠めに乏しとて此擧に及びしも惜哉地味に適せざりしか皆枯果たり其碑文の石も立しが今は碑の跡さへ止めず又右に揚たる江府楓樹の名所も今日は其風情皆昔時と相違せること實に甚だし紅葉は立冬より七八日目ごろより見所となる

白膠木は赤坂溜池の洲三田小山の坂の邊芝赤羽根河の岸等とす立冬より六七日目の頃楓紅に先だちて染出せり

江戸府内繪本風俗往來中編卷之五終

江戸府内

繪本風俗往來中編卷之六

裏頭之部目次

○十一月
三芝居顔見世狂言
初子の日
酉の市
三嶋稻荷おひたき
七五三の祝
狗兒の小屋
吉原秋葉祭
報恩講
町火消
火の見
土藏の目塗り
御防大名
劒術
甲信の者江戸に來る
寒行僧
馬術
寒中うしべに
佃のいさり火
千鳥
雪

江戸府内

繪本風俗往來中編卷之六

蔦の葉散人著

同畫

○十一月

寒氣次第に募り雪を催し先づ霰の降出すや悲風凛烈雪花を飛ばして以て銀世界となる隅田川に輕舟を掉さすまた羽織かくして袖引とめらるゝ果報者あり獅走の間近き寸隙なく脛をあらはし奔走するあり炬燵火桶を擁する老人あれば犬と共に雪中を飛あるき雪打雪圍雪達磨を作る少年あり又晴れたる時は晝夜の火災天を焦して紅ね色を呈し夜間も心靜かに眠れる閑隙なきも是乃ち冬分の定まれることゝ火災に馴れたる江戸のちまた平氣で送りしは昔しの江戸の此節なりける

○三芝居顔見世狂言

例年十一月朔日は猿若町壹丁目中村座同二丁目市村座同三丁目守田屋の三芝居顔見世狂言興行なり顔見世は年一度役者の等級及び給料の上下を定め彼の出世相撲の番附の如く顔見世番附の定まるより當月の興行故に總役者等

級上下ありて初めての事とて見物極めて多く大當りをなすまた顔見世とは總役者を盡にかきたる番附にて顔の多く現れしをよしとす去れば市川團十郎尾上梅幸瀬川菊の丞の如きは顔斗でなく全體を此番附の中央に盡さたりそれより技倆の劣れるに隨ひて紙面の片端に僅かに顔の盡き出せる樣芝居に心ある人氣を用ゐて見る時は盡よく物をいひて面白かりし扨此顔見世狂言隨一たるは市川十八番の暫くなりしとや實は天保以後は顔見世の繁昌更に絶へて只かたのみを殘したり此暫くといふ狂言を始め其他の家のものも海老藏歿後演ずるものなし漸く近年に及びて平生の狂言に十八番の出づるもの一ッ二ッありしのみ然れば芝居も昔時に及ぶ繁昌は絶へたりける

○初子日

當月は子の月なるを以て初子の日の子刻に大黒天をまつる時は來年の福を得るとかや其供物は平生の甲子祭りの如く只赤小豆飯をたきて供せり當日は甲子と同じく種油の燈火に用ゆる燈心を商ふ人市中に多くまた大國天の案置しある寺院は何れも參詣群集せり此門前にても燈心を商ひたり小石川傳通院上野東叡山神田社本所龜澤町芝增上寺山内麻布一本松等の大黒天は晝夜參詣引もきらず大黒天の祭りある所此他猶多し

○酉の市　一に酉のまちといふ

酉の市は此月中に二回なる年あり三回あるの年あり三回ある年は火災多しとなり勿論多年の經驗三の酉ある年は江戸中火災繁かりき下谷田甫なる鷲大明神を新鳥といふ千住二丁目勝專寺鷲大明神社を中鳥をいひ又目黒なる同神社も當日酉の市なるも遊士に關せず相應に賑はひたり就中新鳥は特別の群集晝夜雜沓せるを猿若町三芝居の繁昌淺草金龍山觀世音の賑ひ新吉原の遊里常すら東都名所なる上に壹ヶ年の運の神といふより熊手幷に芋頭粟餅を携へたる肩摩せる裏田甫の蜘蛛手の道遊女等今日は裏二階の窓の内より珍らしげに詠めては種々の噂さに時を移すを下より見下げて凡腦の犬の日までの樂みをなすなど若き人に多かりし

○三崎稻荷おひたき

水道橋の堤内堤上川を背にして同橋より東手に稻荷の社あり三崎稻荷大明神と神號したる從來此邊は都て武家大小名のやしき立こめ町家は絶てなし故に當社氏子は皆武

江戸會本風俗生業
西の二百八
東陽堂出版
西乃市

西の二百七
東陽堂出版

家のみなり華表の脇に掛茶店ありて木立繁れる蔭にて涼風に富みしかば夏の炎暑を凌がんと諸人此茶亭に休ふ冬はまた北に土堤を控へけるより温暖なり春秋は西に不二の一望ありて景色すぐれたり年々此月七日八日の兩日御火焚の祈禱を執行せらる今朝例により蜜柑をまきて拾はしむるに武士の子供等のみなるまゝ拾ふ所の兒童壹人もなく唯通行の諸人の拾ふ所となるもをかしき神樂殿にては十二座の神樂も行はれ又武家方にて正月より武運長久を護り賜はりし御札御守の古き幷に幣束其他いやしくも古き物は悉く持來りて社前に納めしを今日の神火に焚きて火防の祈禱を行ふ是をおひたきといふ彼の遠き支那國にては文字ある古紙は收め置き焚捨るよし聞及べるが吾江戸にては神事に遣ひし物は一切神社の前にて燒捨ける其と是とは品變れども道を踏み行ふ意は同じことなり去れば諸社とも此事あれども當社は今日行はるゝによりて茲に編す

○七五三の祝

今月十五日は嬰兒の宮參りにて男女三歳を髪置の祝ひと唱へ男子五歳を袴着の祝ひと稱し女子七歳を帶解の祝と

いふ是すなはち七五三の祝なりこは月の初めより月の終りまでに嬰兒の衣類を新調し氏子の産神へ詣ずるなり元來武家に多かりしより其華美を好まず身分相應に出立しが町家に移りしよりいみじく華奢を粧ひて出立樣になりしまゝ天保度に及んで其華美を嚴禁ありしより武家は却て此祝ひは次第にすたれたるなかに只身祝とて産神へ詣ずるも告朔の儀極めて質素にして其印を擧るのみ當日永田馬場山王宮同宮御旅所萱場町藥師佛の境内神田明神社芝神明宮深川八幡宮市ヶ谷八幡宮赤城築土の兩社赤坂氷川宮湯島天滿宮淺草三社權現等は特の外なる賑にて神樂殿にて神樂あり諸商店商人出し中に祝飴幷に手遊物の店は特に繁昌す嬰兒參宮するや神官神殿に於て土器の盃にて御酒を賜はりぬ又幣を以て身の穢惡を拂はるゝの式ありけり當時のこととて神職必ず賽物に拘はること決してなきは右等の大社は皆社祿を領し又諸家方の奉納にて富饒なり隨てよく神職たるの品位尊とく人をして敬神の意を發せしめたり

○狗兒の小屋を作る

此頃は飼犬の子を產する時節にて犬の多き市中武家町家

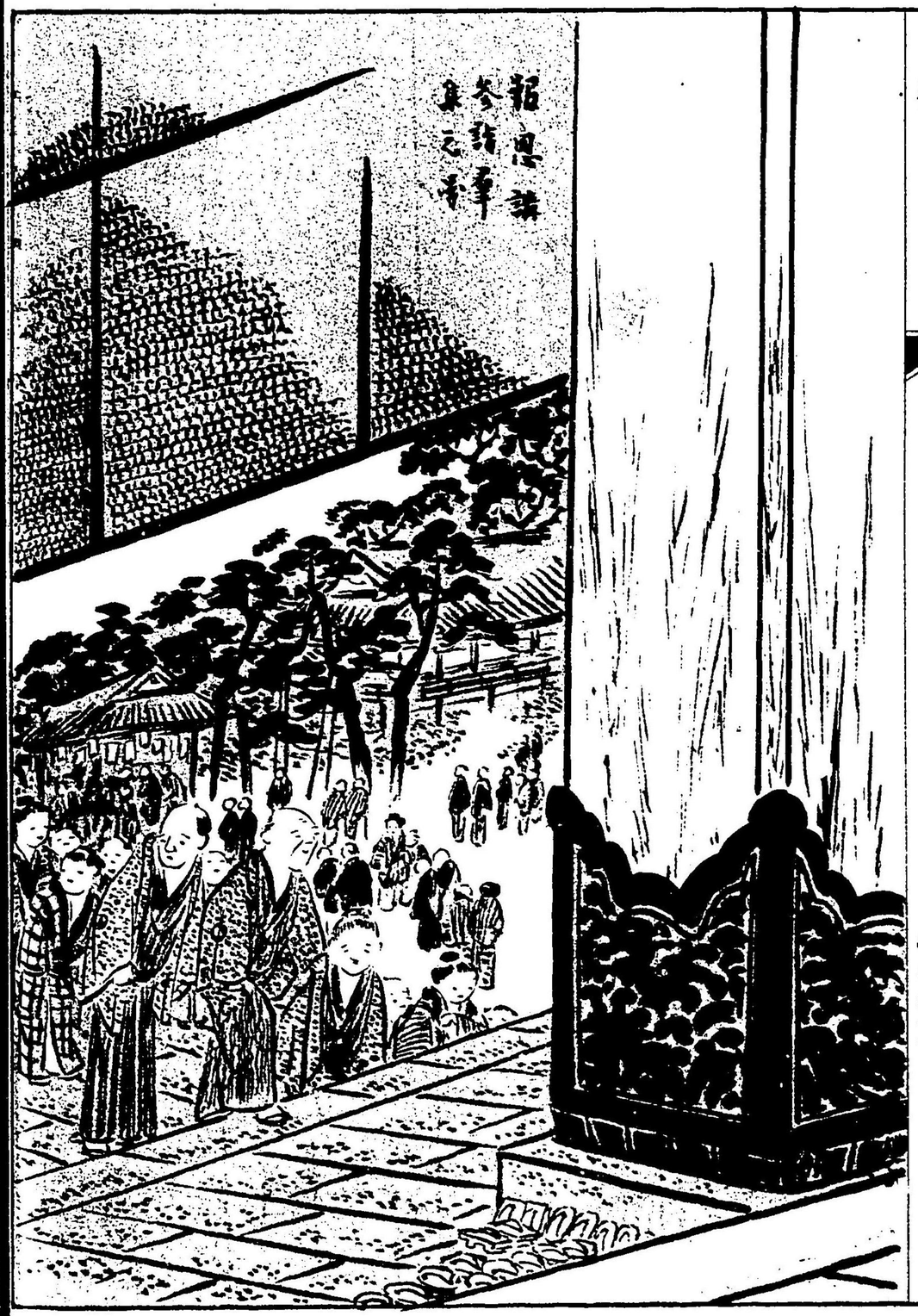
社寺の別なく犬兒の二三疋ヅヽチョロ〳〵とはいまはりける江戸の犬は大小あり又強弱ありて大犬は四尺以上小犬は二尺以上牝牡とも赤黒二色の斑毛ありて美事なりまた眞白眞黒の二種あり當時犬は夜を守らしむるに飼用ねたり然るに兒童等此犬を嗾けて鬪爭をなさしむ又た犬に名を付るに熊と八との二ツを多しとす其他は白また黒或ひはぶち并赤といふは色によりて毛色のまゝを呼たるなり此外ムクといふあり是もムク犬といふ一種ありて毛長くして耳尾など垂れて美くし斑毛に種々の異色ありムク犬は極めて弱犬なり都て江戸の犬は愛嬌ありてたくましくよく人に馴たり子犬また可愛ものなるまゝ畫にもかきたるもの多し然るに眞の子犬の可愛くして強氣なる樣を寫したるもの稀なり都中何れの所にても犬の子を產するや兒童寄集り小屋を作りて雨雪を避けしむ猶又食類を持來りては母犬に與へて乳の養ひとなす町家にては自から餘地なき處は總雪院の後地掃留場の隅などへ小屋を作れりそれに返して山の手邊或ひは家敷地は餘地多きまゝ日向きよき所自由なるより小兒等小屋地の場所に苦しまざるなり

○新よし原秋葉祭

新よし原の遊廓は日本堤を西に行左へ下れば一樹の柳ありて繁る是を見かへり柳といふ柳の下は乃ちえもん坂なりえもん坂を下れば五十軒とて兩側皆青樓附の茶屋なり茶屋といへどもせんじ茶を賣らず五十軒を行けば新よし原の廓門あり是を大門といふ總檜木の上木を以ていとも美事に作れり大門を入るや七軒といふ七軒より仲の町なり此外ムクといふあり是もムク犬といふ一種ありて毛長くして耳尾など垂れて美くし斑毛に種々の異色ありムク犬は極めて弱犬なり都て江戸の犬は愛嬌ありてたくましくよく人に馴たり子犬また可愛ものなるまゝ畫にもかきたるもの多し然るに眞の子犬の可愛くして強氣なる樣を寫したるもの稀なり都中何れの所にても犬の子を產するや兒童寄集り小屋を作りて雨雪を避けしむ猶又食類を持來りては母犬に與へて乳の養ひとなす町家にては自から餘地なき處は總雪院の後地掃留場の隅などへ小屋を作れりそれに返して山の手邊或ひは家敷地は餘地多きまゝ日向きよき所自由なるより小兒等小屋地の場所に苦しまざるなり

江戸繪本風俗生業

秋葉



景を茶屋樓上に在て藝妓割間を相手にしつゝ詠めけるは又一興と申べけれ

○一向宗寺院報恩講

此月廿二日より廿八日まで宗祖親鸞上人の忌日にて法會の執行ありける世俗是をおかうと稱したり又おくも日ともいふ日々本堂に於て讀經說法あり此法會の頃は日々天氣打つゞき快晴なるを俗にお講日和と稱したりお講中は門徒の老若晴着の小袖を新調し着かざり打つれて參詣に行是をおかう小袖といひたり扨東本願寺さしもに廣き御堂の中善男善女所せまきまで滿々たり堂中に於て讀經說法を聽聞するに男は幅せまき肩衣樣のものを肩にかけ女は薄ものゝ頭巾をかぶる此頭巾をつのかくしと俗稱したり同宗報恩講を行はれ參詣群集する寺院は下谷唯念寺草阿部川町稱念寺同田甫西德寺小日向上水端本法寺芝靈南坂上澄泉寺等なり西本願寺報恩講は廿四日より廿八日までなり參詣の群集東本願寺に同じ

○町火消

此頃は江戸市中大小の火災晝夜の別なく數度に及べり火災起るや火の煙立あがるよと見れば町中壹丁毎に設けある火の見の半鐘を打鳴し火の遠近方角火災の大小を報號すつゞひて火消の出るを報するや四十八のいろは火消身支度して神速に防火消火に趣く此鳶の者たるや猛火の中に飛入て働きけるさゝ身の固めこそ肝要なれ腹掛襦子に下筒袖を着し刺子の長袢天同袢天同じくすゞしといふ手袋下頭巾の上に猫頭巾をかぶり草鞋を穿に足袋も厚く重ねてよく刺たるを用ゆ是通常の身固なり其他は自各の好みによるなれ是等の支度は皆平生に鳶の妻たるものゝ手になるなりスワ火事の報號半鐘一點撃くや妻たるもの夫の身仕度に力を添へ早きを專ら夫の家を出るや是今生の別れの覺悟はさながら武士の戰場へ向ふと同じき光景は筆紙の及ぶ所にあらざりしは當日の風情なりける

○火の見にて火災を警する太皷

幕府旗下の士にて勤めける十人火消といふ役あり十人火消は御本城内外高き要所〳〵に火消官邸の設ありて火消役仰付る時は此官邸へ引移る官邸十ケ所ありける故十人火消と唱へたり尤も近年に至り二ケ所を減じ八ケ所となりしも舊唱を以て十人火消いひ來りたり一ツに同役ともいひたり民間にては都て同役と唱へて十人火消といふも

のなし此官邸に櫓の設けありて火の見番役晝夜交代して詰居て火災を報ず報ずるに大皷を以てす火の見役は終身此役にて他へ轉ずることなしされば火の方角遠近をよく辨じたり場所によりては諸御役人方御登城あり又詰場あるを皆此報皷の打樣によるものから其差操に種々の應變ある故に苟且なることを許さず去りながら火の見番は報皷を打鳴して火を警する元より差つかへなき筈なりしも當時の法に火を失するに其次第種々ある中大凡二ッの別あり一ッは手過ちとて輕く濟むあり一ッは火事とて罪科にかゝるより此二ッは火消邸の火報あるとなきとに依りて別るなり故に火の見番は茲に見斗ふこと至てひづかしこれ等は成べく罰科を省ける精神よりのしかたなりける

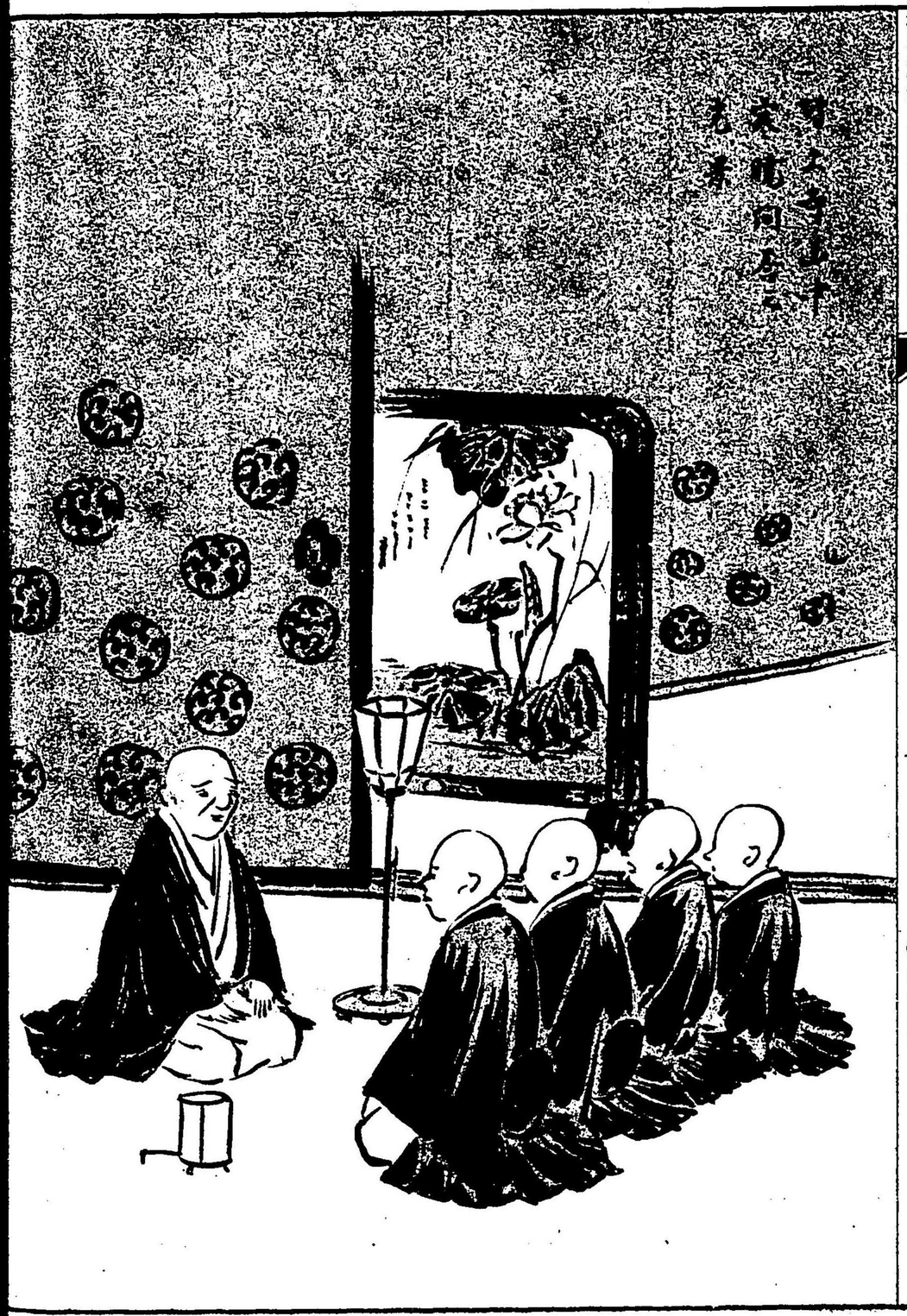
○土藏の目塗

土藏を持てる家自火を失する時は所有の土藏は見す〳〵燒失せしむ若し土藏の數ある家は其中一棟を燒失せしむること法にはあらざれども世間への申譯なり然る時は其罪科も何分か輕減ありて事濟なり故に平生より出入の左官職火中に飛こみ土藏の土戸開戸も閉目塗をなし燒殘りたるに自火の經跡を知る時は自から開戸を押開き内に火を入れわざと燒落すとありて見るものをして哀れを感ぜしむることまゝありしが是全く人々に迷惑を掛自身の不締を申譯するの餘儀なき次第なり天保以前は土藏の數少く已に文政の大火海岸まで燒失せる時は日本橋の橋上にて海面を見たりと己れ蔵の藁幼年の頃老母の語るを聞たり蔵の葉は覺てより汐岸迄燒拂ひたる火事あれども土藏と土藏重なりあいて數丁先も見へずなりしは全く土藏の數の增たるなり

○御防大名

前なる十人火消は本役御鐵砲改めを勤め火消は兼務なり故に勤めといふに止り奉公にあらず本役の御鐵砲改こそ奉公なり御防大名も勤めにして奉公にあらずまた火消と防火との別あり火消は火中に入りて火を撲滅す防火は火を離れて火の來るを防ぐなり此防大名を定火消定防と混ぜる人當時も多くありき定火消は十人火消定防は大名の防火なり又防大名を方角ともいひたるは火事の方角によりて出馬あるによるより防火方は大團扇黒澁塗白く屋敷の相印を出す是を數本持出るは粉火の流來るを煽ぎ拂ふためなり又彼の船子等が船掃除に用ゆる如きの大箒

府内絵本風俗往来
左宮職
土蔵戸前ニ
日ヲ
画の二百十七



画の二百九十九　東陽堂蔵版

だはし數本を持出るは火粉の屋上に落しを大わらだはらを水にひたして打消に用ひられたり其外持出らるゝ器具火消と異なるは防ぎの御役なればなり且又引具せらるゝ人夫小者仲間も多くは防役大名は御國人なれば江戸ッ子揃ひの十人火消とは雲泥の違ひあり只管御備への美々しきは是又江戸火消の及ぶ所にあらず且人數も數倍なり此御防八組ありたり大手御門詰四組櫻田御門詰四組火事といふや此御門へ出馬して將軍家の御下知を待て何地へか繰出す勿論大名主君自ら出給こと稀にして多くは御供頭役御代を勤ける此防大名は將軍家の御見舞火消なり

○劒　術

江戸の頃は擊劒といはず押なべて劒術と唱へたり流派多くあるうちに安政以前より眞影流幷に一刀流盛んなり尤も此流の内に達人の聞へある人輩出せること多かりし平生劒術の藝古は晌午前限りなり町家の子弟ある所は夜中にも教へられしが至て稀なりとす年々寒の入になるや寒稽古とて天亮より道場附近は竹刀の音叫びの聲高く道場の板敷の鳴響く音聞へて勇氣を感じ寒風霜雪の寒さを覺ず門人多き道場に至りては數組の仕合初まり獨燭を點し師なる人技倆の優劣刀竹の亂を正し入かはり差代りの稽古にて夜明る頃は會兒の休息其内に食事をなして又相初まる此外鎗長刀柔術共都て寒中は寒稽古にて彼の遊藝に至るまで寒稽古寒ざらいとて火の氣少しもなき所にて皆相圍みたるまゝ技藝の堪能者引續出來たるなり

○甲信のもの江戸に出づ

甲州信濃邊は雪降つゞき寒さも隨て烈しく家業農業の合の間なるより此頃江戸に出て奉公につくものあり又商ひをなして明年の春は利得を懷中して歸國するありそのまゝ江戸に永住するもありけるが十中七八までは歸國するなり何故江戸に止らざるやといふに火事と喧嘩の多きに恐れけるとなんと聞へし奉公するは多くは湯屋米屋に住こむもの十に八九なり永住して江戸に止まる者は町内の木戸際に番屋といふものありて其番屋の番太郎といふものになり又は酒店の傭などとなる然るに末は金を溜て米屋の店を出すものは甲斐信濃越後の出生に限りたり又冬分江戸に止まり春になりて歸國する甲信者は干海苔幷に干柿を商ふに店を持たず箱荷を大風呂敷に包み脊負て武家町家の勝手口に立て言葉質朴によく進めた

り去ればとて不正の東西を賣るにあらず併し甚だ安價とせず然るに江戸の者は信州の山だし或ひはおしなゝどゝ馬鹿にして弄び戯れては却て山だしおしなの利する所となりて安價の東西を高價に買ふ所となるなり

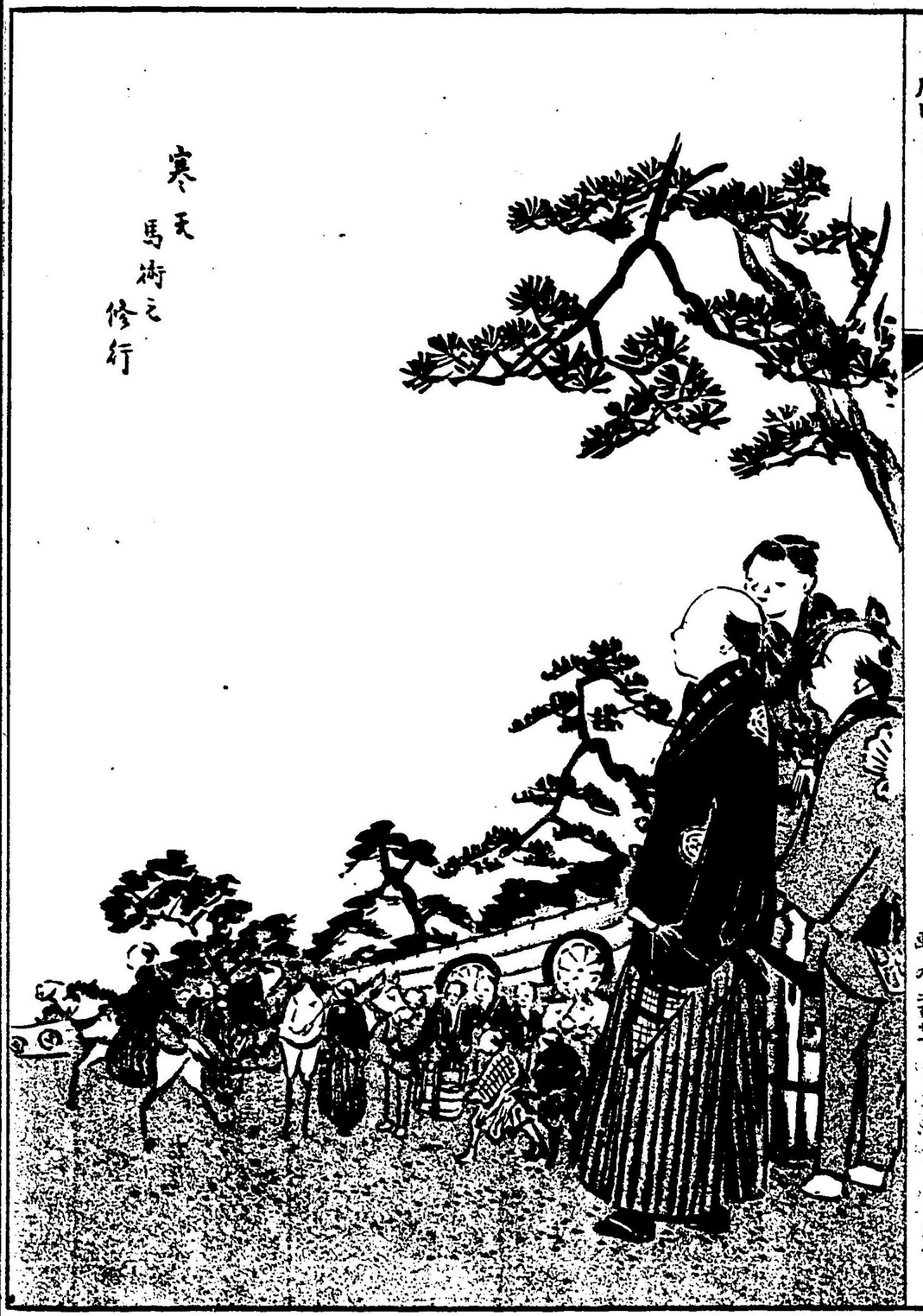
○寒行僧

僧侶方には隨分酒色の凡腦より學識高き人もあられもなき身となる僧もたま〳〵はありしが彼町根越多き町寺といふものは知らず芝増上寺上野寛永寺其外吉祥寺圓祥寺青松寺天徳寺抔は金地院などの如きに至りては僧侶の修行全く正しく況や芝上野兩山の席僧碩徳あり博識あり知識ありしは平素の習養によると見えたり芝増上寺山中山下谷天神谷三島谷など皆僧侶の學寮にて滿たり一寮の弟子僧多きは十二三人少なきは五六人十二三歳より廿三四歳の青僧年々寒中三十日の間は湯に浴せず冷水もて身を浴し一枚の綿衣裳に麻の黒法衣を被て霜雪寒風を事とせず谷々寮主僧の所に至り突然の問答をなす若し此問答に寮主負る時は上なき恥辱纔僧勝時は譽れ上なく夜明る頃迄に諸寮を廻り終り初めて朝飯につく其後は念佛三昧午飯終りて玄關前庭園の掃除此を終りて讀書又經文の開講此を終りて夕刻より澤鉢の修行に出づ故に此僧共に非常のもの出るなり

○寒中のうしべに

江戸にて製する紅といふものは冷せる能あるより娘兒們の衣類の裏地は皆紅染を用ゐたりしとなりされば敢て虚色の粧ひといふにあらずとは江戸時代のいひける所なり又唇へ紅を指すも同じとにて唇のあれざるための事とかや是皆昔の紅の製能なり扱また寒中のうしべにといふは寒製の紅より都て寒中の製品は其效能格別なりとし食類藥材器物に及ぶまで好みて寒製をよしとしたり寒中の丑の日の紅は口中あれたるによしとて丑の日には毎戸皆紅を買はざるはなし油元結紅おしろいを商ふ店にては今日うしべにと大書したる張紙を店頭に出し紅を買はるゝ客へ土製の臥牛を景物に出すこと一般なり牛は大形中形小形の三樣にして精粗の二種ありて紅を買ふ多少により差あり此景物の臥牛は小蒲團の上にすべて愛せらる江戸の頃は紅屋といふものありて紅花より紅を製す其業の傍紅染紫染を受合てそむる是乃ち本紅染ぬ江戸紫といふ色なり紅は細工紅口紅の二種あり口紅を賣に少量は蛤

寒天
馬術之
修行



貝に容れ多量は紅箱とて黒塗印籠蓋の小箱に盛り又茶碗にはきて賣る紅茶碗紅筆とて別に製作ありたり

○佃のいさり火

白魚は藝州廣島邊は多きよし聞及べる所なりしも世間せまき處の葉未だ此を辨ぜず先江戸の白魚は大川筋にても手網にてすくひけるが佃島の白魚を以て江戸の名物としたり此月は白魚の漁猟時節にて夜々漁火を焚きたる舟幾艘となく佃沖に浮て白魚を網す高輪邊又は品川の二階の見晴しより此を望むに寒風暗夜の光景風雅にして又さびしき趣きを添たり彼の秋夜の碪の音は耳を感ぜしめ寒夜漁火舟は目を感せしむ今は碪の響いさり火の火影は機械車の音電氣の光と變じたり

○千鳥

千鳥の鳴音は勢闘なる下町と稱する地にては聞とを得ず芝浦の邊に至りて漸くに其鳴音を聞く芝浦はあやしの漁師の住所にて家の前なる浪打汀に漁船をつなき爺々婆々アより孫とも世間知らずの漁家育ち上下尊卑もあられもなく此のまゝちョは娘をいふなり此野郎目は家の世續爺様婆さまちやんおヅかと荒き磯邊に鳴千鳥音色に迷ふ歌人詩客時々しのびて歩を移せり此芝浦は夏季に至れば漁り歸る舟を待受鮮生を鹽に燒熬びたし阿和盛などに酢を進め吹來る濱風に日中の汗をわすれ芝浦の燒は安くして妙だしとは江戸の頃なる光景なり且又別に調料割烹などいふにあらず漁夫の家にて喰はしむるのみ漁夫等に於ても利得を占むる心もなく客か主が白髪の老爺婆己が用ゆる皿鉢に魚を盛りて出す質朴窮窟目きたる席上より遠くまさると當時のすね者心のまゝに口腹を肥すは茲に如くなしと日暮頃より出かけたりける千鳥は霜月末より臘月のはじめまでなり

○雪

東都は雪の尺に滿るを大雪としたり雪の節は御城内其他芝上野の兩山等の如きは直に人夫出でゝ雪掻のけられ通路白色を見ざりし諸大名及び旗本衆御屋敷廻り寺格ある寺院幷に大社の門前また同じ町方大通りは通路烈しきまま雪の積れる暇なく總じて路上泥濘となりて雪の色を殘さず下駄草鞋幷に車の往返絶間なきによる又兩側の商家は屋上に積れる處を掻落し各自店頭客の歩行の便りよく務めたり且は雪を珍らしと北國邊の人の笑ひを顧みず雪

画の二百二十四 永島三山板

見に出かけたり其地は隅田川の堤、三圍長命寺の邊、眞崎、上野東叡山、不忍池、湯島臺、神田明神宮社内、王子邊、日暮里諏訪社の邊、道灌山、目白不動境内、牛天神社地、大森八景坂、吉原等とす此等の雪を見るに彼の障子船に掉さゝせ隅田川へ漕出すあり又雪を踏つゝ翁のころぶ處ぞと杖によるあり障子船は通客歸りは船を竹屋の渡邊へつなぎ有明樓抔は八百善又は三谷堀へ漕いれ吉原の夜雪をめづるか杖によるは隱士墨客知己友人の庵をたゝく夜に入るやさしも白色を止めぬ大通邊も次第に通行の減じけるに隨ひ路上白布を敷し如く追々靜かに物音絶へて何地へ通ふか拔丁の客を乘せて駕籠かき飛ゆくかけ聲の聞ゆるゝ夜蕎麥うる風鈴の響き犬の吠るゝ赤兒の啼聲遠近靜かなるより聞へたり夜明るや路傍に雪團の大きなる目玉に炭團を用ゐたる大達磨の一夜作の見ゆるなど此月より來陽迄數度に及びしありさまなりし

江戸府内繪本風俗往來中編卷之七
裏頭之部目次
○十二月
焼いも
お事初
煤拂ひ
節分
年の市
羽子市
年の尾の禮
餅搗
門松飾り
むろさきの梅
しんよし原狐舞
王子大晦日夜の狐火
以上

江戸府内繪本風俗往來中編卷之七

蔦の葉散人著
同 畫

○十二月

此月は一年將に盡んとして四序こゝに終る故を去りて新を迎ふ江戸の頃年中の期極月を以て今年の事を納め來年の正月を以て更に相初むる納ると初むるの準備なるより當月の繁忙全くはげしかりし今は寒も明け立春となるまゝ日脚も日々長きを加へしも武家社家寺院とも皆共用に寸隙を爭ひ日の短かきをつぶやきたり武社寺共米穀及び金錢の出納領地の農民に關し是實に苟もならざる責ありて私ならず懸りの役々日夜の別なしまた來年正月の式儀は是また嚴格なる事にて私しならず去れば新調の禮物繕ひ直しの式器は商と工とに關して注文の役人は日限の責寸時も缺くることを許さず隨つて工商の繁忙甚だし且は火災繁き季節隨て起臥に定時なきより感冒にかゝるなど是等の臨時はあるも當時是を以て本月の印しなりとて恐るゝこともなく憂ることもあらず日に繼き夜をこめ役目業務の專一とせるは此月の事なりとしける

○燒いも

江戸市中町家のある土地にして冬分に至れば燒いも店のあらぬ所はなし又町々木戸際なる番太郎の店にては必ず燒いもを賣る總じて燒いも屋は御外輪曲見附御門外御堀端にある燒いもやは必ず店大きく丸やき燒いもとしるしたる看板行燈も巨大なり然るに此大店の燒いもは味ひ粗味にして香氣薄し 隨て廉價なり日本橋近邊の如く總立こみし町中にある燒いもは必ず甘味にして香氣格別なるは川越本場を用ひしと見へたり去れば價も隨て高料なり切燒として割りて燒くに鹽を用ゐ丸のまゝにて燒くに鹽を用ゐず切燒丸燒其味ひの優劣は好める人口に適ふを以つてす燒いもの釜土は三箇より四箇を並べるを大店とし二箇を通常とす此業を營む者江戸ッ子になし又意外なる有金家ありしは隨分に利得ある業と知られたり此燒いもの賣盛るに隨ひて時候寒きを增したり年々九月下旬より十二月まで此業の繁昌とす正月より二三月までは燒いもを燒かずふかしいも又いもの丸あげ等を商ひたり

○お事はじめ

十二月八日をお事初めとす例年今日より來年正月の事の初めとて專ら其事に着手す勿論世間皆正月の來るより其準備をなすより是非共家業は猶更家事等武町共其事に隨はざるを得ず今日はお事初めの印しに味噌汁を製す汁の實には里いもこんにやくにんじん大根牛蒡燒豆腐赤豆を用ゐたり此汁の實を用ゐるは年中今日のみ是を以て小兒に至るまで正月に近きを知り油斷少しもあらず又餅戸目籠を竹竿の先へつけ高く出せりこは放生會よし古書にも見へたり然るに當時此目籠を出せるは町方斗にして武家方には行はれず寺社にも皆てなし

○煤拂ひ

例年十二月十三日は將軍家御煤拂ひの定日なり隨つて諸侯より旗本の士御家人及び町家も今日に前後して煤拂ひの大掃除をなすと日々なり煤拂ひの式の膳部は里いも大根牛蒡にんじん燒豆腐田作の平盛豆腐の味噌汁大根にんじん田作の生酢鰯引鮭の切身の調理にて酒を汲ひ勿論家例により大同小異ありと知るべしまた町家にては蕎麥の振舞あり猶交際上煤拂ふ家蕎麥の贈物の取遣をなしたり御城御奥女中方平日用ゐらるゝ手拭は白無地の晒木綿に限れるも御煤納めの日には染模様の手拭を許用ゐらる又胴上の御家例ありて誰彼の別もなくそこらへ來り合せる人を捕へて數人にて中へ高く揚げて一聲に目出〳〵の若松様よ枝も葉もしげるお目出たやサアーサツサノ、サと唄へり諸侯方御奥にても煤拂ひ大掃除には胴あげありて歌は別なり偖お事初めも濟み煤拂ひ大掃除も濟み伊勢よりは皇太神宮様御秡も下され新暦も頒布なりて日を逐て來春に日程なく心世話しく日を送りたる中に家中見舞の贈答も終るや寒明節分となるも早やかりし

○節分

平年は大凡十二月十二三日より廿八九日の頃までに寒も畢り節分となるなり諸侯より民間の大店商家は皆家々の商式を畢げけるも節分の振舞等は前に出せる煤拂ひの膳部と同じきは此の以後大晦日又此の夜の如し偖又神社にては猶更神前の式法特に嚴格なりとす上下一般共當日は柊の小枝と豆の枯莖へ鰯を指したるを家の門戸より出入の口々窓へも挿み日暮に及ぶや神前佛前へ燈明の數多く輝かせると同時に臺所にて鬼打豆とて白き豆を煎

雷神前内
蓑市

節分
豆まき
乃図

大利春府
鎧掛之字

幸乃尾

鍋島肥州侯
正月表御門
松飾つゝの
圖を作る

りて米の升へ盛り三方へ載せて出す此豆を受取豆まく役目の人先神前より佛壇に供し家の間毎にまき並に雪隠へもまくなり豆を撒に大音に鬼ハア外〳〵と二聲いひて次に福ハアうち〳〵と三聲叫ぶや其座敷の戸障子を閉撒ちりたる豆を年の數程拾はんとて老幼男女騒ぎ合ひて拾ふ其中福茶とて山椒梅干黒豆を加へて茶を煮て出す福茶を飲む中奉公人は主人の前に出て當夜の目出たきを祝す子弟は父兄へ祝賀の禮あり終りて蕎麥の振舞ありて後主人は氏神へ詣ふずる其中厄拂ひといふもの來るを呼びて拾ひたる豆に錢を添へて厄拂ひに遣はす厄拂ひは日出たきつらねを逃て惡魔を拂ふ其中に又獅子舞來る是を呼びて笛太皷を打鳴し當夜の惡氣を拂ふなど節分のありさまなり

○年の市

十二月十四十五の兩日は深川八幡宮年の市十七十八兩日淺草觀世音年の市廿日廿一日神田明神社年の市廿二廿三兩日芝神明宮としの市廿四日芝愛宕山權現年の市廿五廿六二日麹町平河天神宮年の市此以後大晦日まで諸所に市あり大晦日の市を捨市といひて捨るが如く安賣りに賣ばたすより小家の人皆大晦日の市にて買もとむるなり市の賣物の大凡をいはゝ宮苔御酒德利并に口かざり雜木として木の皿へキ盃鏡餅の臺三方門松竹しめ繩草類橙海老羽子板つく羽根飛鳶弓破魔餅のやき網灰ふるひ火箸其他勝手用金具類桶類掃木ちりとり雪かき暦大小の柱かけを始め植木や花やより線日商人見世物與行勢とす市は總て正午前より人出夜に入三時計の間は尤も群集雜沓せり時としては雨雪に出會こともあれども家例として必ず定まれる市にて諸買物を齊へける

○簑市

簑市は淺草觀世音年の市十七十八の翌十九日雷神門内外へ簑賣る露店多く出たり當日は近郷近在の農家の人多く老婆少女田舍姿にて來れる樣は都下の輕薄なく手織の衣類は克明をあらはし自から結べる髷は質素にして色氣に薄く訛れる言葉は故里を名のる掟昨日に變る市の客却て勝れる風俗なりと當時の評もをかしけれ

○歳の尾の賀

歳の尾の賀は諸侯の君公は定日登城ありて將軍家御對顏にて賀儀を申上らる時の御禮服は多くは麻上下を召させ

らる殿中場所により御城詰御坊主衆御付添へ御案内申上げるは常の御登城と同じ其外諸役人及び醫師法眼に至るまで各自定日ありて歳末の御賀を祝し上たり諸侯方又大祿の旗士各自御自邸の御殿に於て君臣主從の間に此禮あり社家寺院共公に對する式と私の儀あり師は弟子より此賀を祝するは弓馬劍槍儒家書家を始め遊藝に至るまで師となり弟子となるの間は弟子たる者師と仰ぐ人の許に至り式禮を述ぶ工の弟子は親方と仰ぐ人に商の奉公人は主人と敬ふ人に禮儀を述べ各町の每戸皆氏神へ寺院は境家より醫師は病人の家より祝賀し此他親類緣邊使者を以てするあり自身に往くあり書狀にて申述ぶるあり進物納物金子目錄の贈答工商は御出入御得意へ歳暮の贈物をなす其品には奉書糊入美濃紙半紙小菊紙半切折詰鳥水引元結鰹付油すゝ油鹽引鮭鱒鱈數の子田作牛蒡里芋醬油油掃木雪掻釜の蓋俎板踏臺なんどなり

○餅　搗

餅搗は例年此月十五日より搗始む諸侯方版本の御殿なる餅は皆御膳所より搗て差上ぐ去れば下方の手にかゝらざること平生の召上り物と異ることあらず藩臣にても大祿の人大社大寺の神前佛前の備へ餅是また下方の手にあらず其以下御殿は女中方社家は神職寺院は住職以下の僧侶衆の餅は臺所にて平生召抱への者達にて搗くこと夜より晝にかけ二三ヶ所にて搗ものなり町家にても大家大店の餅は殊に多きものとすまた引ずり餅とて釜蒸龍臼杵を持あるきて諸方の餅搗を引受其家の前に至りて搗もの幾組となく江戸町中にあり此餅搗やは十五日より大晦日まで夜を籠て廻り搗くに手の廻り兼しにくるしめり町の餅は引ずり餅をよしとす

○門松飾り

將軍家御城三十六の見附御門飾りは定まれる御用達にて作り諸侯方にては御抱人にて御門飾りをなされ旗本も同じく御手人にて作り大社大刹も同じく抱人ありて出來ふまた身分よき町人幷に大店は抱の處の者之を立て其以下は各自にて門飾をなす横町中通新道なる家にて家業に追はれ手少なる者多き土地は町内の處頭引受く同一に松竹を立てしめ繩をかく都て門松飾りは例年十二月廿八日を定日とせり扨また諸大名方御屋式のかざりある内に三十五萬七千石肥前佐賀城主松平肥前守殿山下御門内なる御

江戸會本風俗生人

画の二百廿四 東陽堂出版

府内絵本風俗往来

画の二百廿三 東陽堂出版

上屋敷表御門の飾りはつゝみの胴にわらを編てしめとしたり其の作り大きくして美事なること江戸中に比類なし門飾中の尤物とて其名高し此門飾は都て正月六日の夕に取拂ふものなり

○室咲の梅

室咲の梅は白にて一重なる花のみなり此梅の鉢作は根に福壽草又は赤葉の南天且はユキソリ草を添たり土の上に白砂をまきて粧ひたり此室咲梅花の鉢作りは染井巣鴨邊より出せり植木やは此梅の鉢を年末の進物にして出入得意へ贈りまた賣品にもせり切花の室咲も同じく白一重の花也大凡當月中旬より賣出せり正月の指し花は室咲の梅白玉椿柳とせり

○新よし原遊里の狐舞

其以前は知らず新吉原に限り年越大晦日に獅々舞は壹組もなく狐の面をかぶり幣と鈴を振り笛太鼓のはやしにて舞こむ是を吉原の狐舞とて杵屋の長唄の中にも狐舞の文句をものせしあり抱一上人が吉原十二ヶ月の畫中又此狐舞を十二月に畫かれたり狐は白面にして赤熊の毛をかむり錦の衣類をつけたるまゝひとも美事なり世間の不粋は當所大晦日の狐舞を見しものなしとなり

○王子の狐火

王子稻荷神社の門前なる畑中にいとも大きなる榎あり是を裝束榎と稱したり年々十二月大晦日の深夜數千の狐此榎の下に集りて榎を飛越すとかや飛こと高きに隨ひて狐に官位の高下のつくとぞ故に此榎を裝束榎といひける年々大晦日の夜は必ず此邊に數點の狐火ひらがりて上下せり已れ麓の葉若年の比二とせ斗見にゆきしことあり實に聞所に違はず數百とも思ふ斗の狐火を見たり此邊は都て樹木森々として白晝すらうすぐらく春の花夏の潤の外は人の通行もあらずなして暗夜の大晦日北風は烈く木々の梢へ吹き遠近寂寞として物音なく彼狐火は見ゆるかとすれば失せ失せるかとすればまた光り身の毛もよだつばかりなり勿論空高く東天紅の映ずるに從ひ夜明ては其跡も留めざるよしなり

江戸府内繪本風俗往來中編卷七 大尾
五十五
東陽堂出版

江戸府内 繪本風俗往來下編序

結城織の衣類に小倉の帶、青縞に眞田の紐の前たれをかけしは、其名は丈八にあらずんば久兵衛久八と、問に及ばずして、商店の番頭なることを知らるべし、音松と名づけ、辰五郎と呼ぶや、組合の印袢天に豆しぼりの手拭は離れッこなき處の者と、察するを易しとす、吉公、熊公は、大工にして、長松は丁稚なること勿論なり、丹次郎、艶次郎、の色男は、〆吉、米八、の藝者と一般、相撲に小次郎、小介などは尤も損あり、醫者には黃八丈の小袖、黑八丈の羽織を着せずんばあるべからず、肩入の胴ぬきに、深編笠は浪人なること五段目の定九郎が、黑の紋付に朱鞘の大小と同じ、蓋し名は體を現はすとかや、其名あるや其體其風俗、あらずんばあるべからず、之に由て而していふ時は、色氣小說の作者は丹次郎生にして、滑稽小說の作者は丈八生なることを想像し得んも、斯に至りては必ず當になるべからず、右に述たる所は、皆江戸時代の風俗にして、今日の證とするにたらず、然れば繪本風俗往來の作者の馬鹿面を想像し給はんことを、

明治三十八年九月　　おしのは誌

緒言

○名主○家主○店子

一江戸市中町々、公用を勤務し、町方諸取締りを司る長を、名主といふ、名主は番號を以て組を分つ、先壹番組何人、弐番組幾人として、廿壹番に分たれける、其他番外弐組ありたり、去れば第壹番組より、番外弐組の人數を擧る時は、其人員百を以て數ふべし、名主の配下に家主といふものあり、家主は町内の諸取締をなす、（名主に名主代あり、家主に町代ありたり、○名主代町代は地主名主家主店子の中間に立て町内の出來ごとを、可成公法にせざるやう調停す、）家主は多き町内は數十人に及び、少き町内は八九人ばかりとす、名主役は支配地全部より給料を徴し、家主は地主一手より給料を渡す、名主は總町の代表者にして、家主は地主一箇人の代表者なり、名主は町御奉行所へ勤め、家主は名主に勤めて、借地借家の町内に住居するものを世話す、借地借家の人は家主の指揮に從ふものとせり、借地借家の者を押なべて店子と唱へたり、當時公文に、何町家主誰店何某、と認めける、又其頃の下世話に、店子は家主を親と思へ、家主は店

子を子と思へ、などのいひ習はせありたり、

因でいふ、下肥を錢に代ふものは、此の家主の外他には絶てなきことなり、又當時の狂句に、家主は店子の尻で餅を搗、といひしは、年々正月の餅は下肥を買りて、搗といふことなり、

○地　主

一地主に二種の別あり、吾所有の地所に住居する地主を、町内居付地主と稱して、地所を他人に貸て、地主他所に住るを、單に地主といひたり、居付地主は町民中一等に位す、居付地主は其町内の者一般より、居付樣と稱して尊はる、居付地主は町内諸入費の立替を負擔するは、勿論にして、町内諸費の出銀他の地主より多し、然るに居付地主とならんことを望む、金力家多しといへども、他に競爭者ありて、容易に居付となれず、又當時は地所を貸し利益を得んなどのことは、夢にも思はず、江戸の風俗にて、元來地所を所有するは、金力餘りありて初めて地所を讓り受て、地主となりしものとて、算當利益の外のものたり、地主となるは、町民中の名譽にして、居付地主となるは、又其上の名譽也しなり、

○店　子

一借地して苟も家屋を出來、安心して住居するは、地主の慈惠大方ならず、其店子たる者は、其地主を地主樣として敬禮せり、當時地所を持ものは、家持町人といふ尊稱を、町奉行より受るの身柄なれば、店子を苦ひる樣の事は、出來得べからざるの事なり、借家の店子もまた同じく、地主の慈惠に浴する者なれば、地主に對しよく、質素を守るやう、家主たるもの自然の習慣を施しける、

○地　主　店子の負擔

一地主負擔する所の、町費莫大なるは大傳馬町南傳馬町の兩町に如く者なし、其他は先第一水道費、第二火災消防費、道路の修繕、及雜種の費、第三山王神田の兩祭とし、租といひ稅といふ者、江戸町々に徵せられず、店子は町費一切かゝることなし、只冬季に至り火の元嚴重の夜番、其他祭禮の軒提燈、町内若者といふもの、或ひは鳶の者より、配付する揃ひの染浴衣、又は染手拭を引受く、是は地主への義理に出るものなれば、店子の貧富により、出銀の高下あるものとす、此外町内の諸費店子一切出すことなし、

江戸府内

繪本風俗往來下編

目次

賣卜者　小僧金子の使ひ
お記錄本や　松右衞門
岩見銀山鼠取受合　見附の交代
見附の焚出し　見附の撒水
千兩箱の運送　兩國回向院佛餉
七ッ坊主　鳥さし
普化僧　吉井ほくち賣
七色蕃椒　御免之勸化
居合ぬき　下掃除
鹽や　醉客
子供の喧嘩　豐島や樽の曲さし
鬼熊　油賣
夜たか　十軒店次郎右衞門
栗餅乃曲搗　紅かん
乞食芝居　繩衣裳の乞食芝居
阿房陀羅經道樂寺和尙　假似聲つかひ
店頭干　どっこい〳〵
住吉踊り　籠ぬけ
齒力　猫八
壹人相撲　砂文字
角兵衞獅子　鎌倉節の飴賣
辻謠曲　辻琴
大道講釋　デロレン左衞門
芝居新狂言　讀賣
獼脂曲突　はん引
丹波國から生捕せした荒熊
降巫　唐人飴ホニホロ
墓所の幽靈　淡島大明神
以上　五十五條

江戸府内 繪本風俗往來下編

蘆の葉散人著
同　畫

雜之部

○賣卜者

賣卜者の多く出るは筋違御門内より芝口新橋迄の大通り町尤も多く日々午前より夜に入るや提灯行燈を點したり其外麹町赤坂四ッ谷芝愛宕下久保町の原淺草御門内外柳原土堤にそひ上野山下本郷通り等に都て人の多く出ける所には必ず出たり白き木綿を以て蚊帳の如き圍をなして其中にて賣卜するもあり又三尺に六尺計の臺の上に机を控へたるもあり又賣卜の臺を前にかまへ卜者腰を掛たるもあり白木綿の圍なき卜者は皆笠をまぶかに被りて面を掩へり其扮打は古紋付の衣類に白き毛織の被布などを着し白髭を粧ふたる老人の異風なるものありしも多くは古紋付の羽織に縞の衣類を着し小脇指一腰を帶しいかにも由ある武士の浪人の如く見せたり此外は一戸の門構または表に格子戸などを立易經相の看板を出したり芝神明前の石龍子淺草の靑雲堂親爺橋の白井卜星南傳馬町の本國堂など易觀相の有名なり淺草御藏前に床店の内にて賣卜觀相をなすものありこはいみじき大きなる笠を門口につりて目印とするより藏前の大笠とて人口かまびすしかりき

○小僧金子の使ひ

當時江戸に有名なる金滿家多くある中に雨替町三谷三九郎同じく中井新右衞門室町の竹原神田の村田なんどより金子持運びて出る小僧等は歲十三四より十五六なりしが麻紐長く付たる家名を誌せる革財布に容て肩に載せ店を出るや路傍兩側の露店或ひは繪雙紙店又は手品籠ぬけなどの見世物を素見などして歩行樣は金に心を止めず萬一他に奪れもやせんと餘所の見る目の氣苦勞を小僧等少しも頓着せず猶甚だしきは神田橋外なる護持院原より九段坂へかけては人の通行もまれなれば重き財布の休み所とて叢中に大金容し財布を投やり心のまゝに遊びても財布の失せることなきは生馬の眼をぬくてふ江戸にもかゝることのありしは怪しむべきのことにこそ

○お記錄本や

賣卜者

外神田御成道の入口なる廣場に莚を敷て古書籍を陳ねて商ふ本屋の老爺あり此書商をお記錄本やと呼しは此老爺前へぢんこう記商賣往來都路往來今川古狀揃なんど破たるか又は表紙もよごれたるものを陳ねたる片脇には素麺箱を横に置て机と成し瀬戸燒の墨壺に禿筆を染て其頃廉價なる黄半紙といひし紙を横折にして終日何か認めて居たりしかば人呼てお記錄本屋といひしなり當所は元來廣場のこと故暑寒とも少しく風の起りし時は砂塵を吹上げて煙りの如くなるに頓着なく悠然として筆を休めざるは雨雪の日を除くの外十年一日の如く安政の末年の頃早や五十路を越しと見うけたり勿論年中日光に照り付られしかば顔色澁紙の如く頭髪蓬々たりしを手拭にて包みたり怪むべきは身柄よき武家の來りて破莚の片邊に着座して何か談話して餘念なき樣を見しこと數度なりける客店に立て古本を求めんとて價を問へば甚だ不廉にして一錢も引ことなく隨分頑固なる振舞ありたり後には同所へ壹戸を構へ古本の店を出しけるが從前の如く素麺箱の机に向ふこと同かりし明治の初めに至りて老爺物故せしとか其年月を知らず

○松右衛門

此小屋者松右衛門の外に何某と呼ぶ者ありしが今は其名を遺忘したり偖小屋者といふ者は市中往來道路上に於て死人又は犬猫を始め獸類の死物ある時は早々取片付或ひは日々來る物貰化子の取締をなし都て道路上の穢なきやうを專一にし汚穢物は一切小屋者にて始末をなすの掛なり然るに市民小屋者の間に於て雙方相互に不心得の事ある時は松右衛門支配地なれば松右衛門出て此を始末し其他の者の配下の町なれば其者其中間に入て雙方に誤りなく程よく其始末を全ふするの任なり故に市民方に祝事家土藏の建築子弟の祝婚儀葬儀を始め家業の外に外聞高きことある時は必ず松右衛門來りて化子物貰等の始末をし其妨げなきやう取締なり然るに松右衛門自身來るにあらず都て松右衛門は代人のみ市中に來るなり元來松右衛門といふ者は繁昌なる生計をなし文武の學び堪能なるものも出ることわりて市中を徘徊すること稀なり今茲に畫ける所の松右衛門は偽名の者にて眞の松右衛門が配下の白者にして年中日々市中に出て市民が戸々に來りへエ松右衛門でございといひては錢を乞ふ所のものなり

○岩見銀山鼠取受合

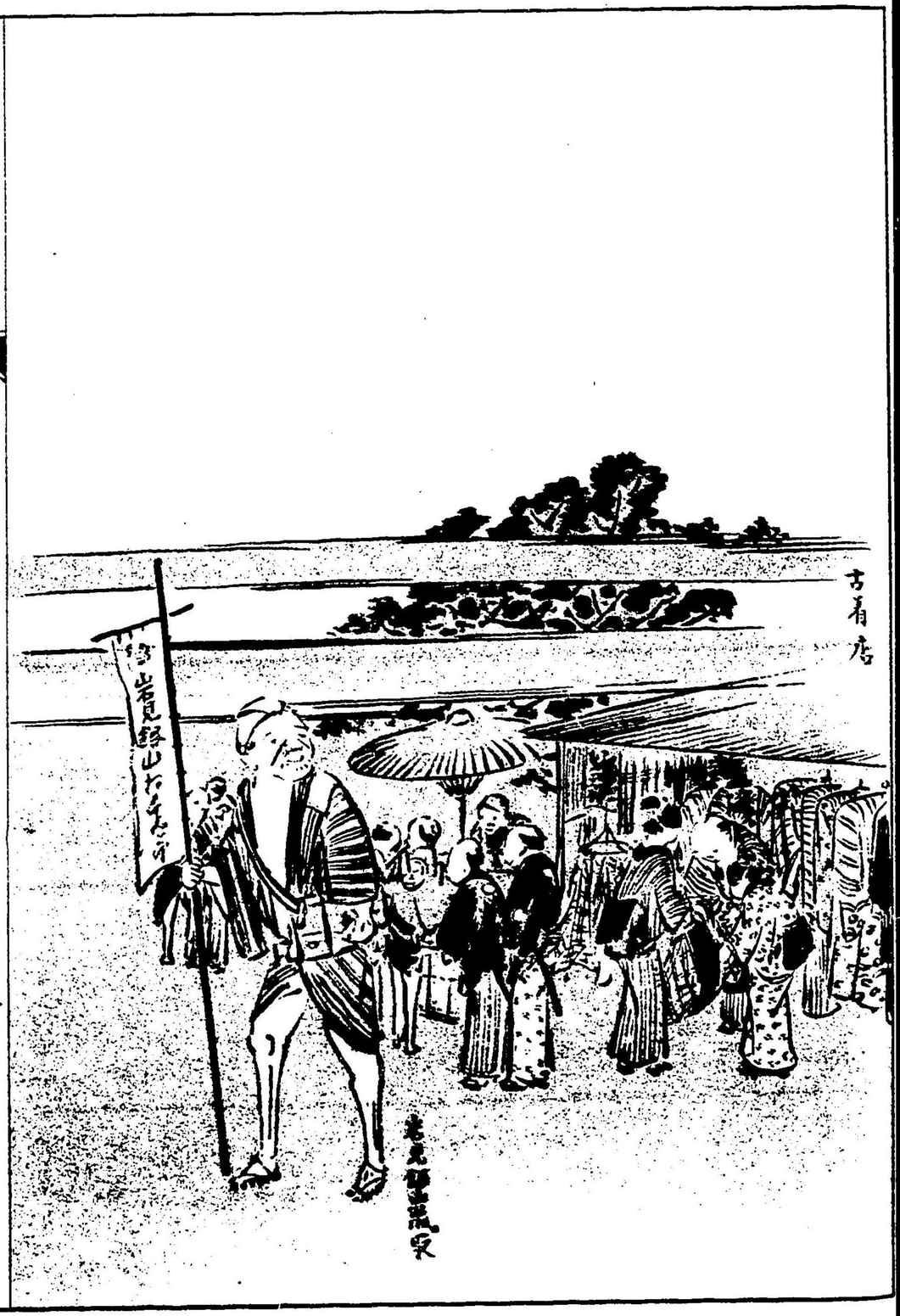
岩見銀山鼠取受合と黒地に白く染ぬきし木綿幅壹尺竪五尺ばかりの幟をかつぎ鼠が皿に盛たる毒薬入の食物を喰ひし所の畫模様を染出せる袢天を着し小箱の内に鼠取の製薬を納めて脇にかけて猫の眼に變化はあれど年中日々變ることなく市中を寶歩く者幾人かあり猫の鼻と同じく己れが口を潤さんとて大音にいたづら者は居ないか居ないかな〳〵いたづら物は居ないかなど呼はる聲にそこらに遊び居たる五六歳なる小兒は偖は己れが惡戯を知られて捕はれんかと膽を消して逃隠れる樣は恰も猫に出遭し鼠の如くなりし

○見附の交代

江戸城は三十六の門あり此門を見附と唱へしより三十六門といはず江戸三十六見附といひたり此見附御門は場所柄により大名方の守れるあり又旗本の固め備ふるありて番所にざせる番士幾人弓鐵砲槍の定數ありたり又年限の期定あれば其期に及ぶや故役は新役に守りを渡し新役は故役より守りを引受け勤ひ是を見附の交代といふ交代の人數は主人出馬はなしといへどゝ家臣中なる頭役總人數を引率なし弓鐵砲槍の隊伍を整へ金紋に猩々緋の馬簡付たる馬標を押立番士より以下小者に至るまで堂々として任所の城門へ繰出せる光景は太平の勇粧を示し大江戸の威勢輝きて目覺しかりけるものなりける

○見附の焚出し

見附の焚出しとは三十六見附の番士より小者に下されける三食の賄方をいふ此賄方は江戸に二軒にして一は元大工町に焚出五郎兵衛にして一は數寄屋河岸に焚出喜三郎といふありて江戸に名を知られたる顔役大親分にて又なき男なりける二軒の焚出何れ劣ず子方子分多人數ありて三十六見附の焚出賄の御用を勤む日々三食を調理し一飯毎に受負所の見附御門へ持出す勿論五郎兵衛喜三郎自身手を下すにあらず子分子方の手になるものなり偖其子分等は皆身中清潔なることは是ど全く水道の水に晒し上たるといふものなるべく調理場の臺所には十六七の竈並びて一飯毎に飯を焚く彼方は魚野菜の庖刀をなす此方は鍋にて羹方をなすなど皆其掛り〳〵ありて數十人立働きて餘れりとせずまた足らざるとせず且調理の味ひに至りては料理人の調べに異なりて其味ひのよきこと眞に



画の六

江戸前の食物といふべく食類出來上るや否皆運び出して見附御門へ送附なす中調理場なる臺所は片付清潔に掃除終る其手早と寒暑を厭はぬ甲斐〳〵しきは今は比類を知らざりける

○見附の撒水

見附御門にはガエンと唱ふる小者仲間御門毎に多きは四五十人より二三十人づゝの抱人ありて御門の蜘蛛巢を拂ひ去り御門内外地上の掃除より見張番所の掃除をなすことガエンの日々の勤めなり去れば烈風の節または夏の炎天の暑さ強き日は數度の撒水をなす見附御門は大名方及び重き御役人がた草履雪踏を踏ての御通路なるまゝ撒水斑なく水の溜りなどのなきやう平均に地面を濡しければ撒水もまた容易らず且また場廣き所往來の繁き所等に至りては通行の妨げなきやう手早く撒水を終されば相成ざるの儀ひなり撒水は先玄蕃桶とて四斗樽程なる桶へ水を井戸より汲容てガエン二人して擔て運び撒水場の程よき所を見斗ひ五六間位づゝ離隔して置く是運水の掛より撒水の掛りは番手桶とて小盥に手の付たる樣の手桶を手に手に携へたるもの三四人づゝ一の玄蕃桶の所に走り來りて水を撒に番手桶の取扱に遊びなく實に面白きまでなり故へに看る〳〵中に廣場一圓平均にむらなく地上に濡りを含ませ砂塵の起るを防ぐまた雙刀帶たる役人二三人撒水中此所彼所に立居て通行と撒水に害なきやうを制しける

○千兩箱の運送

日本橋金吹町三谷三九郎中井新右衞門室町竹原某神田連雀町村田某は德川將軍家御金子御用を勤めけるより此四家より千兩箱とて横二尺斗幅一尺深さ六寸位なる檜の厚板にて作りたる甚だ堅牢なる箱に各家の名字をいかにも光澤漆の如くなる墨にて筆勢飛動せるばかりにしるしあり其中に金子を封入して堅固なる錠をなしたるを一箇づゝ天秤の前後につりて擔出すこと十人或ひは二十人づゝ連りて呉服橋御門又は常盤橋御門と道の便に從ひて行を日々の如く見ることありたりしが擔行人足等は身に襤褸をまとひたる極めて下賤の者どもなりしも嘗てより此千兩箱運送に不都合ありしことを承らず且又送狀手形などの證もなし御金子御用の方より送附すると御金藏役人受取といふまでのことなり路傍往來の人も平生見馴

しことにてめづらしともせず又遠國他邦のものは千兩箱とて大金の納めありしとも思はず去れば石瓦を運送すると同じことなりしは是また江戸の江戸たるところといふべきか

○諸侯の水運

諸大名の水運は黒ぬりに朱にて屋敷の相印か又は花號を印したる手桶に蓋をなして錠をおろし天秤にて荷ひたり荷へるものは紺染の衣類は高くすそをからげ幅廣き帶をむすび黄銅金物打たる木刀一腰を差し鞋を穿たり此水は上つかたの召上り給ふ所の水にして中屋敷より汲せらるることあり或ひは下屋敷より上屋敷の水を汲せ給ふ都て上つかたの在せける所へは必ず運び參らす水運は少きは三四人多きは十人餘に及ぶ毎日午前を限りて午後は絶たり勿論諸侯一般にあらず清水の井ある屋敷は此事に及ばざるものとせり

○兩國回向院佛餉

兩國回向院中に三佛堂といふあり緑江戸砂子に萬治年中町奉行所より牢死刑死の亡魂のため一宇を建立あり彌陀釋迦大日の三尊を安置す幷に石塔一基造立あり當院より江都市町を毎日佛餉を乞ふ所の僧十六口此堂に住す

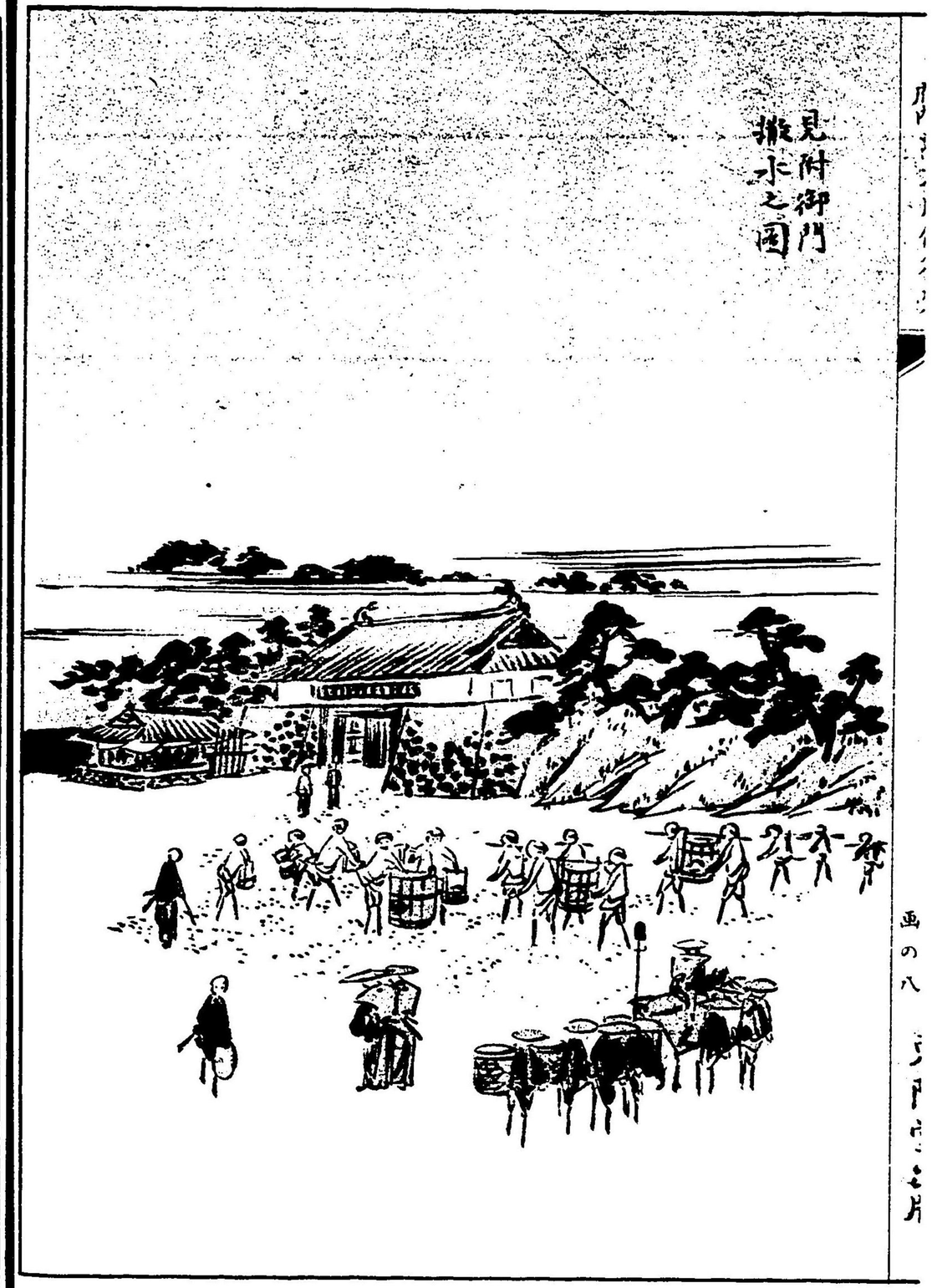
三佛堂の僧江都町々へ出で佛餉を乞ふ所の扮打は老僧壹人溜色網代の塗り笠に白き紐を結び色法衣に香染の袈裟をかけ錫丈を杖にして鼠色鼻緒呂色の塗下駄を踏しは長老と見へたり他の僧は皆墨染法衣に香染の袈裟をかけ素網代の笠の前に回向院後に兩國と大文字に書したるを蒙り法衣衣類は高くくゝり上て脛をあらはし寒中も足袋を用ゐず鞋をはき手に高く鐵鉢を指上て大音にりようごくツえかういゑん佛しやうと叫びつゝ來る此僧達道路の端へよらず道の眞中を足はやに歩きける町の兩側の家家佛餉し參らせんとすれば來るを待受て參らすもし行過し跡より參らせんとしても跡邊へ立もどるとなかりし也

○七ツ坊主

三緣山廣度院增上寺は芝檀林にして寺領一萬五百四十石實に徳川將軍家御祈願所なり塔頭三十坊あり各御朱印を賜りたり山中三嶋谷神明谷山下谷三軒谷等の區域を別ちて谷々に所化寮滿〻たり隨て所化僧の多き千を以て數へたり此所化僧等日々の課業終るや日暮七ツ時といふ鐘聲を報ずるや十人二十人つゝ組て市中所々へ澤鉢に出

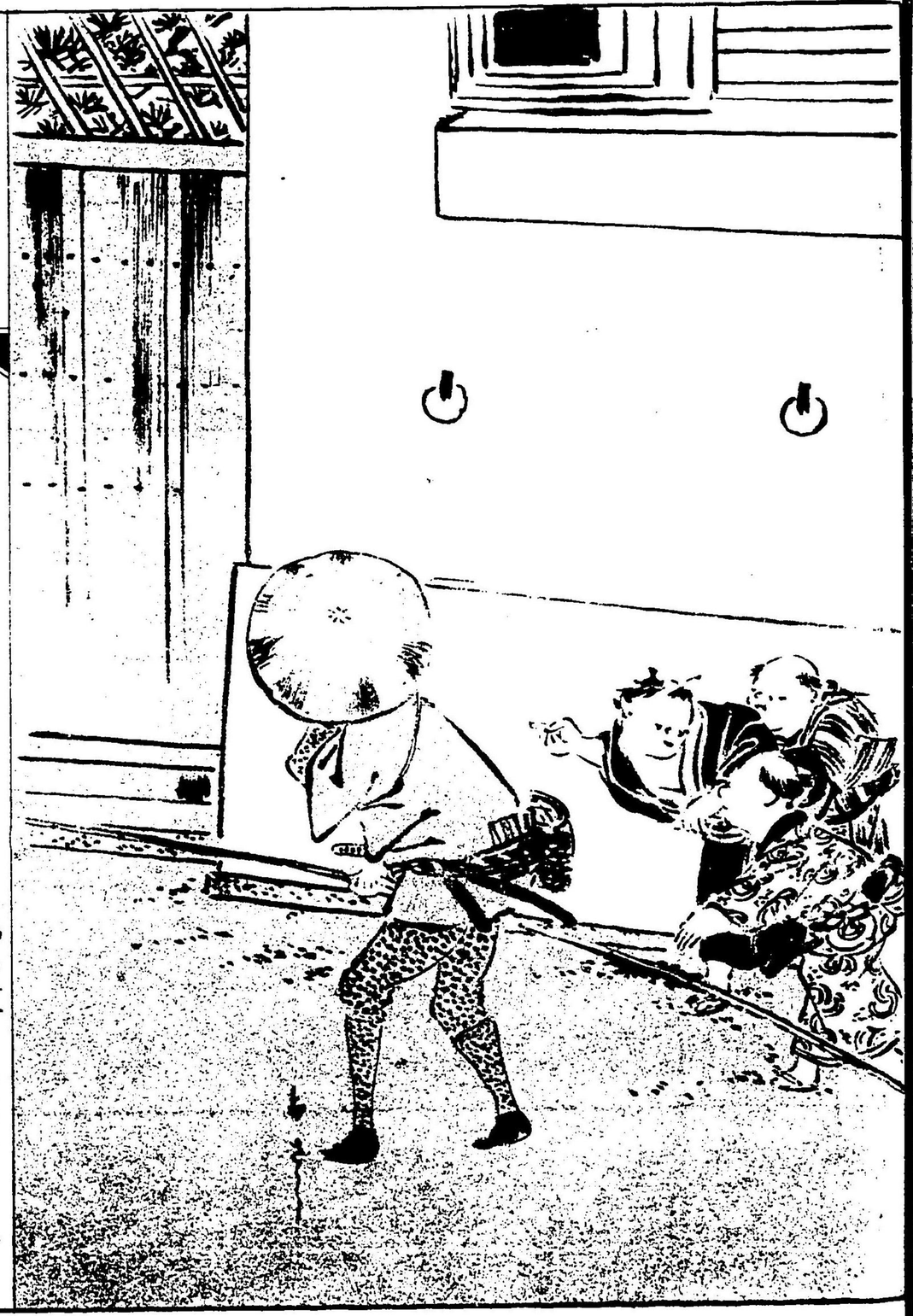
諸見附御門焚出之運搬之圖

千駄ヶ谷通之圖



見附御門
撒水之圖

画の十　東陽堂出版



画の十一　東陽堂出版

こゝに
かざりを
大象の動化
はなぢうの

六部

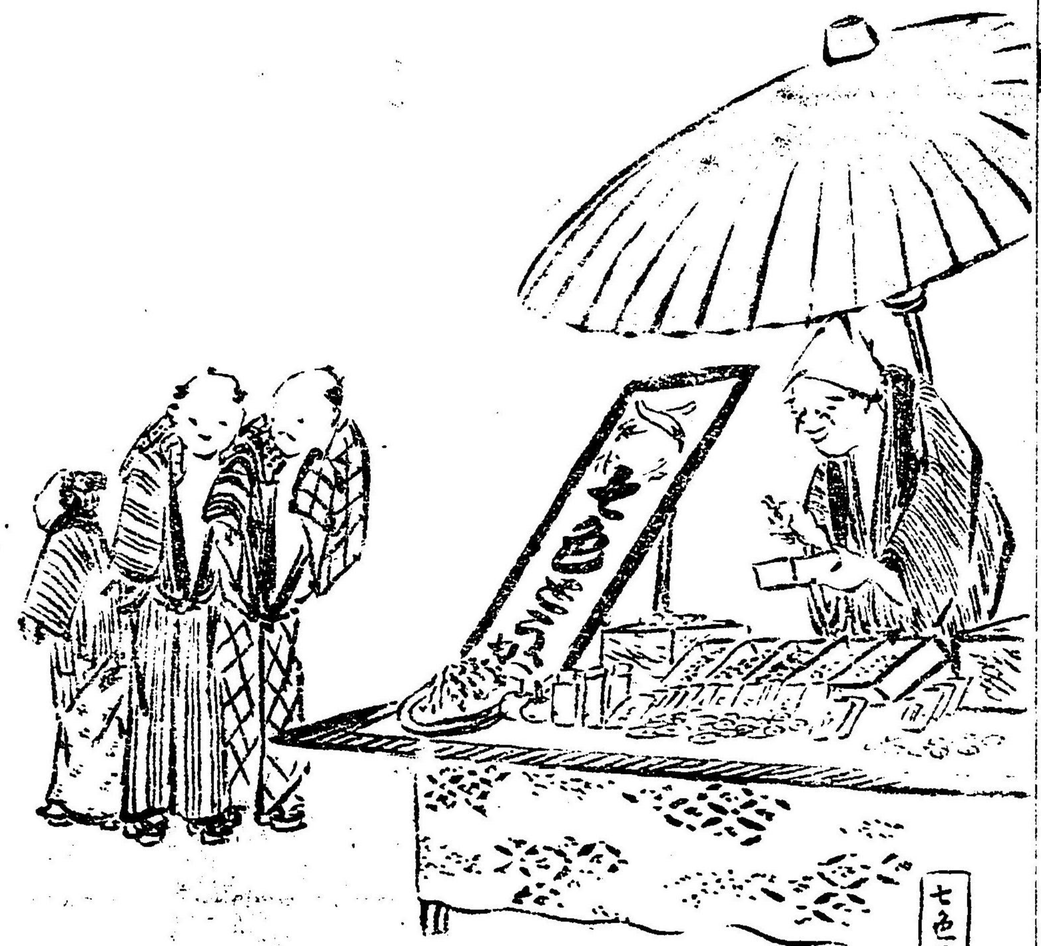
づ七ッ時の時鐘に出でけるより市中此を七ッ坊主と唱へたり尤も七ッ時より點燈迄の時刻を限れば今の二時間ばかりの中とす山中は元來豈かなれば澤鉢とはいへ青年僧をして身を安く置しめざるの修業なり故に物乞ふ乞食とは雲泥の隔ありまた此僧等青年の勇意飛んで肉をも喰はん勢ひにして夙に螢雪練磨の修學時代なるまこ兎角事あれがしと動もすれば諸侯の供先且は辻固めの番士武家の骨あるものと爭論を好みける山中にても澤鉢は名のみにして實は大道横行するものを懲しめんことを專らとす去れば事あるに臨みては一歩も讓らず進んで敵を挫きて歸山するを譽とはなしたり其扮打囘向院佛餉僧に同しくして拍子木を打鳴しつゝ足ばやに通行してける只念佛を世話しく唱へたり

○鳥さし

鳥指は駒込千駄木邊には多く將軍家御鷹匠役あり御鷹匠役は將軍家御拳の鷹として將軍家自身鷹を据へ給ひて畏くも京都禁裡へ奉る所の大鳥を獲給ふ所の鷹なり其外幾種となく御鷹の御預りあれば其資養に雀を指取是を鳥さしといふ乃ち鷹匠より出るものとす然るに猥りに雀を指取ることを許されず先神社佛刹の近邊田畑ある所武家邸宅の近傍を隔る場所にあらざれば指取ことを得ず鳥指の扮打は淺黄の頭巾を蒙り淺黄又は鼠色地の小紋野袢天同じく股引脚半黒足袋鞋の足がため帶の上に帶止三尺をしめて大小の兩刀をさし腰に籠をつけしは指取たる雀を入れるに用ゆ其彼方に下げたる小箱は鳥餌を儲よ箱なり鳥指竿は三本繼四本繼ありて太味より直なる又强弱の撰み等よく吟味したる竹を用ゐたり長さ多くは二間餘と覺へたり其外小鳥笛といふ笛を吹鳴すに是また上手と下手あり上手なる鳥指吹時は雀は追々集り來り高き屋上よりひくき軒先に飛下る時分を量り睨を凝して竿を差出すに必ず指取に定りたりもし鳥の所に竿の屆かざる時は投竿とて竿を投送りて捕ふ是故に忽ち人々集りて見物す人多く集る時は鳥は自から逃去る去れば鳥指は又他へ行なり

○普化僧

普化僧の事は曩に風俗畫報の中に悉く載られしかば已れ蘆の葉は其以前見し所のものを茲にいはん其樣は劇場に演ずる假名手本忠臣藏九段目の本藏が扮打よく當時の樣をうつして殘したりしも其居動體度に至りては失せて跡



なきも是非なし普化僧は前にいふ九段目本藏が扮打の如く草といふ艸にて編たる深く面を覆ふへる笠を白き木綿の繻紐にて顏に結びてかぶり白無地又は鼠色無地の木綿衣類天保以前は絹に絹の丸ぐけ帶を前に結び黑き絹布の袈裟をかけ繻子或ひは純子袋に笛なるか刀なるかを納めて帶にさし白足袋に黑の塗り下駄を穿て門口に來り立止りて少しくそり身になりて笛吹鳴す樣は此方には尋常の物貰化子を斷るが如く出ないョといふことを得ず手より手へ手の內の錢を渡すか左なくば五無用ですと言葉を丁寧に改めて謝絕するといふ體度を粧ひたり併し普化僧の僞物ありて來る其僞物に至りては普通の化子と異ることなかりける

○吉井ぼくち賣

ぼくちといふものに二種ありて一はぼくち殼といふ瀧木の殼を燒て消炭の如きものをぼくち箱といふ（ぼくち箱一に火打箱とも唱へた）箱に儲置なり毎朝入用のもの水火より先なるはなし井戸より水を汲と同じく火は鍜く能はず火打箱を取出し箱の內には火打鎌火打石の揃ひてあるものなればぼくちの上に火打鎌をかざし火打石にて火を打出してぼくちに火の移しを木片の先に硫黃の付たる付木といふ其附木の硫黃にぼくちの火を移し竈の下へ移して飯を焚こと江戶一般の習ひにて是を捨て他に火を取るの道絕てあることなし其一種は綿ぼくちとて袋につめたる黑き綿の如きものを商ふ其綿ぼくちを摘み取て火打石の上に置て飛散ざるやう指先に持て火打鎌を石に打付て出づる火を綿ぼくちに移して用ゆ此火は重に野外散步或ひは旅人道中の煙草の火に用ゆるものとす此綿ぼくちを吉井ぼくちとも唱へたり綿ぼくち火打鎌火打石道中旅行用の火打具の種々を商ふ露店往來の角々にありたり是を吉井ぼくち賣といひたり此露店暖簾を以て後を圍ゐ天井を斜めに覆ひたる構は何れの吉井ぼくち店も同一なり暖簾の印も又同じ因にいふ諸侯幷に旗本の高持大寺大社及び豪商店は年中昼夜火の絕ゆることなし故に火打箱を用ゐず但神前佛前の御燈明は必ず打火より火を移し奉ること是また同し又神前に備へ奉る供物より榊猪荒神松の如き皆都て打火を打かけて火の出づるを淸めとすること上下押なべて是また同じ當時劇場の出勤に俳優を始一同家を出づる時は必ず當人の背より火打鎌火打石を取出して切火をなす是は身の穢を拂ひて吉兆を神に願ふ心なりとなり藝者幇間寄席の出方及船宿の船頭且興行見世物の出方等皆同じ此等の世渡りをするものは猶更工商共朝々神棚より店頭を淸むるとて打火を出して神拜をすること是また同じかりける

○七色とうがらし賣

江戶の頃は蕃椒といふもの流行すと見へたり其證ともすべきは蕃椒を賣る店所々に見へたり家店あり床店ありまた腰簀圍の店ありて七色とうがらし十一味とうがらしの紙小袋入筒入等を始め油煎蕃椒を折詰曲物詰などにして陳列せり其外に七色とうがらし十一味とうがらしと呼つゝ箱を持て諸々賣步く蕃椒賣ありまた盤壹盤敷ぐらゐなる臺の上に蕃椒を交叉たる盆をかき其下に七色とうがらし十一味とうがらしと書たる看板を臺の左右に立て其中央に七ケの小箱を陳て其前に紙小中大の袋入と大中小の竹筒の振出を陳列し商人は黃銅の匙を執て吾前に厚紙を置て其厚紙の上に七色の配劑をなす賣者音聲をつくろひ片手に匙を持て片手に前なる小箱を持てまづ第一に用ゐ升るは胡摩胡摩は精根氣根を滋髮の毛の光澤を出すとあつて是を加ふ次に用ゐ升るは東京の肉桂肉桂は腹中を溫めて食氣を滋とあつて是を加ふ次に用ゐ升るは山椒山椒は口中を凉ふして惡氣を消すとあつて是を一味加ふと七味とも其效能を逃つゝ調合しつゝ八ぶさの蕃椒を賣りては辛き浮世の生計を營ひもの日本橋通り壹丁目を定店にして其外にもありたり其以前三蓋松の婆々といふもの此言立の名人なるよし聞及びしも作者の時代にはなかりしなり

○御免之勸化

羽織の染色は自身の年と同じく髮の毛と共に色を變じ垢に染たる布子は破れし盡の如く兩山より出たる眞さへ又手垢にそまりし帶をしめ股引脚半は雜巾をして三舍より多きをさけしめ腰がためのがたくり丸は鐵醬壺の雜を免れたる目出たき作物如何なる子細にや古手拭をかむり御免勸化と書たる札は數十年の昔は此老爺も札と共に新しかるべく思はれける此札こそ老爺の命にして由ある札なるまゝ此札を出して町家の戶に立や立れし家にては必ず錢を與ふべきものと心得立つ者も必ず錢を受るものと得心し雙方共に與ふと受るの理由は知らず與ふと受るを覺

へしのみ作者も未だ其理由何んの御免の勧化といふはやはり知らず筆とるも其風俗をしるすまでなり

○居合ぬき

居合抜の歯磨賣は淺草御藏前に長井兵助あり三田松本町有馬邸前に何某あり此二家の外江戸中になし二家とも表間口二間半許にて店は白地に籃の大形井桁の内に長の字の總張付壁同じく襖障子を立し様は其頃の醫師の玄關の如く其内の正面に光輝きたる黄銅作の長短大中小の居合太刀を幾腰も刀掛にかけたり又黄銅磨の金具打たる箱を据置威風を粧ふ三田なる居合抜は幸橋御門外久保町の原或ひは芝愛宕下増上寺御成門外なる路傍に露店を張りて家業の歯磨を商ふ時は五六間四方に太き麻縄を張廻し其正面程よき所に臺を据其上に刀掛を置て居合太刀をかざり其後頭は家の印を染出せる大暖簾を以て掩ひ刀掛の前には小さき臺の据てあり其上には一尺四方の三方盆を置たり居合抜の扮打は黒染五ツ所定紋付の衣類に小倉織の平袴を付て高股立をとり白き襷を十字に綾どり甲斐々々しく居合太刀を帯て右手に白扇を持て一本歯の高足駄を踏て立上りける左手には帯たる一丈に餘れる長き居合太刀の鍔許を握りて占身せるは直ちに抜んず光景なりしかば最前より見物せる山の如き人々は居合を見て行んと樂みしに居合抜は口輕き滑稽を言て見物の頤を解しめ已に抜かと見へて又抜ず家傳歯磨の效能をいふより歯磨を賣る見物は居合を見たさに買ずもがなの歯磨を買ふに未だ居合をせず此中蓋を傾げんまでに時を移す見物の人々足の痛きを覺へず小僧は主人の使ひの遅刻を忘れ田舎人は懐中の財布を抜れしを心づかず居合抜は今まで帯て居たる丈餘の太刀は脱して後邊にかけ短かき太刀と指かへ前に蹲れる己が抱への小僧を目がけてヤッといふ聲に抜放ち小僧を相手に打振けるが待甲斐程に覺へねば忽ち足の痛を感じ見物は失望らしく散亂すれば又後より立止る居合抜は短劔を鞘に納めて再び丈餘の長太刀を帯しもぬかざることは以前に同じ又歯磨の家傳の效能隨分人を馬鹿にせしも馬鹿になりて見物するは居合を抜ざる中の却て面白居合になりては趣味多からざりしと覺へたり

○下掃除

肥桶を天秤にかけ肥杓抄を桶の中へ入れて來り厠池に溜

居合抜

長井兵助

酔漢